言ふのかも知れぬ。だが、此が若し鴨であつたとしても、此歌は、表現は變り乍らも、尙此御製を、心に持つて居るものと考へる。卽加萬目（カマメ）を鴨とその妻と解して居たのであらう。

鷗が、此御製で問題になるのは、大和國に鷗の入るべき理由がない、との豫斷から來てゐるのである。だが、昔の地理を考へると、鷗の入りこまぬ訣はない。今も、信濃川を溯つて、越後の鷗は信州水內・高井郡地方に這入つて來る。其から見れば、大阪灣から、大和へはもつと近い。その上に、昔は、淀川が今程川口が西下して居ないで、大阪市附近が落ち口であつた上に、此三角洲に接して、大阪城の東側には、直に難波江が擴つて居た。その外小椅江（ヲバシエ）・玉造江（？）等の澤山の入り江があつて、飛び〳〵に、河內・大和國境の日下（クサカ）の日下江（クサカエ）まで、續いて居たし、大和川も、舊流は河內柏原邊から北流して、此等の江の間を縫うて居り、又猫間川・寢屋川その他の川筋が亂れて居た。其略改修の緒に就いたのは、江戶二代將軍代から後の事である。だから、海鳥は河內の山下まで行つて、其から直に、大和川を溯つて、大和平野に這入つた訣である。唯、かうした詞章は、融通自在であり、永續性のあつたものだから、必しも、大和國で初めて作られたもの、とも定められない。其點において、鷗の說明に執著する必要もない氣がする。

○何怜　右にあげた香具山の歌（卷三）の或本歌の左註に、「右今按ずるに、都を寧樂（ナラ）に遷して後、怜レ舊（アハレビテ（？）ヲ）、此歌を作る歟（カ）」とある。かうした處に、怜の字の出て來るのも、低意識の現れと言はねばならぬ。うまし國か、あはれなる國か、あなにやし國か、訓がきまらないが、姑らくうまし

で解釋しておくのが穩當だらう。うましは形容詞ではあるが、かうした熟語形を採つてゐるのは、形容詞としてゞなく、語根と言ふ立ち場からである。すべて語根は、其が形容する語との間に、修飾關係によつて熟語を作る。形から見れば、形容詞の終止形とおなじ形である。さうして實は、かうした語根が、他の語に接する關係から、語尾に屈折が出來、其が規則的に成形的になると、語尾變化を生じる訣である。うまし國と言ふ形は、おなじ系統の語であつても、「うまき國」「うまかる國」など言ふ形とは、全然感觸の違ふ語なのである。まづ「うま……」と言ふのに一等近い。うましは、語としては、くはしの纖細なのに對して、正反對な感覺を持つ語である。元、味覺から出た語なのだらうが、多くの場合、圓滿な美を示す事になつてゐる。「うまし男」「うまし稻（ネ）（？）」「うましあしかびひこぢの神」又「うまし物」なども、此に屬する語だらう。「うましぐに」と言ふ訓み方が正しいとすれば、「何怜小汀（ウマシヲバマ）」「何怜御道（ウマシミチ）」など訓じた樣に、立派なと謂ふに近い讚め詞である。甘美鏡（ウマシカヾミ）・甘美媛（ウマシヒメ）なども同樣に訓み、譯すべきを示すのである。結局何怜の字は、圓滿立派を表す場合のうましにも、感動のあはれにも、愛憐を示す「かなし」「うつくし」にも、と言ふ風に樣々の義に宛て用ゐた訣である。又、感動語尾にすら使うてゐる。「哭之（ナキテ）曰（イハク）、於母亦兄（オモニモセ）。於吾亦兄（アレニモセ）。弱草（ワカクサ）吾夫何怜（アガツマハヤ）。……言二吾夫何怜矣一（ト）此云二阿圖摩播耶一（ヲフアガツマハヤト）」又は、場合によつては、あはれと訓まれてゐるのも、語尾的に使はれてゐると言へる。

○ぞ　此類の「ぞ」は、多く「にてあるぞ」「なるぞ」の略語卽、代表的には「あるぞ」「なるぞ」

として通つて居り、其と言ふ指示助辭から、分出したものと謂はれてゐる。同時に寧、感動語尾的ですらもある。用語例を見ると、却て「なる」と謂つた連體的な職分を、持つて居た様に思はれる。つまり、日本語の終止形は、循環する所に、連體と通じる所があるので、其が後代程、分離して來たのだと思ふ。新しい處で見ても「……大君の遠の御門曾(ミカドゾ)　み雪ふる越と名に負へる　あまさかる夷にしあれば」(巻十七)「いしきをり酒呑むと言ふ曾(ゾ)　この朴(ホ)かしは」(巻十九)。此類は、何れも、「ぞ」と截れるやうに見えるが、「……なる、その」といふ連體の形を採つて說明が出來る。截れる様で居て實は截れない。「鶯の鳴くわが島ぞ。やまず通はせ」(巻六)。鶯の鳴くわが山齋なるその島にやまず通はせ」である。「たぎのうへの馬酔木(アシビ)の花曾(ゾ)。土に置くなゆめ」(巻十、一八六八)は、「激湍の傍の馬酔木の花なる其花を土に置くなゆめ」かう言ふ風に、すべてが終尾辭と見えて、而も連體の形を採つてゐる。つまり「ぞ」は語原どほり「……その……」と謂つた意義を持つものなのだ。「うまし國ぞ。あきつ島大倭の國は」の此場合も、「うまし國なる　そのあきつ島大倭の國は」と言ふ形だつたのが、次第に岐れて、「ぞ」で截然と終止にするやうに見えるのだらう。此意味において、數多い「ぞ」に疑問を持つてゐる。

○あきつしま　大伴家持の長歌(巻十九、前掲)で見ても知れるやうに、國見と言ふと、秋津島又は、蜻蛉の古語りを言はねばならなかつたやうだ。神武國見から既に、蜻蛉の「臀呫(トナメ)」を以て、國形(クニカタ)を表すと共に、昆蟲の生殖と、農の生産の祝福をして居られる。あきつ島と言つた事には、

色々な說明もつかうし、日本の國號が豊秋津洲と言ひ、又その國土の精靈を、豊秋津根別と言つたと傳へてゐるが、其は自ら別問題であり、又稍遲れての發達といへる。神武帝に假託申して居るが、とにかく古代に、細長くて、——蜻蛉の二つ繋つた様で——而も、山谷の出入りが兩方に多くて、翼を比(ナラ)べた狀に見立てられたからの、傳襲的な表現の咒詞が傳つて居たので、國見と言へば、必「あきつ」が出る事になり、同時に、「あきつしま」と言ふ國島(クニシマ)の稱(タ)へ名を用ゐて祝福する習俗を、續けてゐたものと思はれる。だから後々までも、國見とも見られない天子の狩獵や、行幸にまで、「あきつ」がつき纏ふのであつた。其で、此御製にも、勿論國見の歌の格として、「あきつ島　大倭の國は」を据ゑなければならなかつた訣だ。其で、吉野が殊に、天子平常の行幸地になつた爲に、こゝに蜻蛉の物語と、秋津野とが考へられるに到つたのであらう。此「あきつ」なる語に、「秋」を祝福する意義が、元からあつたかどうかは、疑問である。豊秋津洲と言ふ事が、穀物をことほぐ語としては、語の構成から言つて、わりに後代の聯想から、出て居るらしく思へるのである。だが勿論、古典時代には、既にさうした氣分解も、含まれてゐたには違ひない。

○やまとの國は　やまとについては、最早二度まで述べた。こゝでは、大倭の枕詞としての「あきつしま」について述べて置かう。「あきつしま」は、吉野に秋津野が出來た如く、腋上の内にも、秋津の地があつて、秋津宮と稱するのが、孝昭・孝安御二代に亙つて營められてゐた。卽、畝傍山西の地域である。卽ある時代には、神武天皇の國見の咒詞によつて、秋津島——島は前述國の條

参照――の地が固定したもの、と考へられたのだらう。秋津の地としては、噉間丘の物語に關係の濃いだけ、此地が深く、その印象を地名に止めたのだらう。が、「秋津」の名は、宮廷の遷ると共に、ついて廻つたに違ひない。御代はじめの國見の詔旨以後、屢くり返される詞章中に、蜻蛉の語が出て來たであらうから。その詔詞によつて、其宮廷の地が秋津洲となつた事は考へられる。其痕跡を止めて居なくとも、ともかくも、大倭宮廷の名には、必秋津洲と言ふ枕詞は、据ゑられねばならぬ、神聖な「風俗諺」として置かれたのだ。此は今言つた宮廷儀禮から出て居ると共に、其後ある時期の間、宮廷の周圍の地をやまとと言ふと共に、其に近接した地として、秋津を稱する所が出來る習慣になつてゐたに相違ない。其が次第に、單なる枕詞といふ感じを深めて來るやうになつたのであらう。更に後には、磯城島の大和など言ふやうになつて、混同する樣になるが、古くは必、代初めの國見と共に、地名地域も定まり、咒詞も必固定したものゝあつた事が察せられる。

○は　大和の國は、うまし國ぞ、と言ふのが普通の解釋だが、前に述べた通りとすれば、この「は」は主格の助辭の發達過程には、感動詞として定義のある事が、明らかである。其と同時に、文法的表情の移つて來た徑路が思はれる。

【鑑賞その他】　此御製もやはり、雄略御製と同樣、宮廷の大歌として、さやうお傳へして居たから、舒明御宇のもの、と錄せられてゐるのである。だが、何として、さうした傳承が生じたかと言ふことになると、今日の我々の知識では、知ることが出來ない。唯、萬葉集において、短歌呪

力の起原――と言ふより寧、本緣――を說く男女二尊貴（磐媛后・雄略帝）の御作物の次に、舒明・皇極の御代の御製を載せ申す、と言ふ集を通じて見られる、一つの習性の意義は、說明出來ないではない。其には、久しい宮廷の御流れの中にも、幾筋にも傳統のお岐れになつてゐること を、まづ考へ申さねばならぬ。奈良の宮廷を基礎として考へれば、すべての點から見て、天智・天武の二帝に對して、「すめろぎ」としてのお懷しみを、深く持つて居られた事が見える。この御流れは、御考妣としての舒明・皇極二帝から出てゐる。敏達天皇の宮廷から、二流れに岐れて、一つは、古飛鳥宮廷――と申しよいか――一つは、近飛鳥宮廷――と申すべき――に族岐（ウカラワカ）れがして見える。古飛鳥宮廷のお流れは、崇峻帝・聖德太子、いづれの例におかれても、斷絶遊してゐる。さうして後、近飛鳥の御族が、皇統を保たれた。（押阪彦人大兄（オサカヒコヒトオホエノ）皇子を經て）舒明・皇極二天子の御族が是である。だから、萬葉作者系圖の中、宮廷に繫（カ）るものは、皆近飛鳥族に包含せられてある訣である。だから、萬葉における宮廷詩は、近飛鳥宮廷の大歌だ、と言ふ事が出來る。卽後代の語で言へば、「近飛鳥御家集」と謂つた意味の歌集が、萬葉集を組織する基礎になつてゐるのである。

舒明・皇極二朝の御製の第二次（殆、卷頭）に据る訣である。其と同じ理由で、卷二の天智天皇代、卷三の持統天皇代、卷九の（雄略御製を卷頭に）舒明天皇代を、同樣の位置に据ゑた理由が、納得出來るのである。（卷八においても、稍條件をつけて、同樣の事が言はれる。）

私の所謂「近飛鳥宮廷」時代に於て、短歌が俄かに榮えてゐることは、日本紀（古事記は、此宮廷の記事に及んでゐない）を見ても察せられるが、一つは傳るべき理由があつて、特別に榮えた様に見えるのだ、と言ふ點の考へも必要だ。

此歌、その目的が、敍景詩にあつたものと考へることは、どこまでもよくない。敍景詩の發達は、序歌を通して見なければならぬと言ふ事は、「アラ、ギ」大正八年卷に書いた。其が譬喩歌に展開して行つた事も、屢説明して來てゐる。さうして恰も、此御製の出來たと稱する飛鳥朝には、觀照態度が著しくなつて來て、敍景詩に迫るものも出來てゐる。が、此歌は、さうでない。國原を敍したのは、單なる祝福詞章の類型であり、海原と疊みかけたのは、單なる形式上の對句表現に過ぎない。其上よく考へなければならない事は、作物に敍事的な技法が通じてゐるから、あの點も、矚目を直敍したものゝ様に見えようが、さうでない。敍事的になるのは、古代詞章の常法で、其處に歷史觀念も含まれて來る訣である。今であつて昔であり、昔の如く今である。太古以來の傳承と信じられてゐた詞章が、漸次部分的改變を、時代・空間の上に加へて來る。其古い詞章が、後代人の歷史又は敍事とする考へ方の基礎になつてゐるのだ。さうした發想の上に、外界の庶物を咒――祝福――するのである。後世詩歌と云へば、抒情・敍景・敍事など言ふ規範をきめて居る時代から見れば、敍景の型に入れて見るのも、無理のない誤りである。而も咒詞であるべきものが、歌の形を採つてゐるのは、一段の變化を經た訣だ。元正しくは稍律

的要素の尠くて長章であつた咒詞の様式で、發表せられねばならぬ種類のものが、其部分的游離形なる歌で以てしても、認められるやうになつたので、第一の雄略御製なども、此側の考へが必要だ。萬葉集の全體を思ふ上にも、歌と咒詞との對立を、始中終頭に置いてかゝらねばならぬ。

【萬葉集の鑑賞方針】 以上二つの御製に關聯して申すべきことは、古代歌謡の鑑賞を言ふ事は、其を行ふ事は、自由であるが、どこまでも本質的に可能性を持つものと信じて居てはならない事である。その成立が、文學から自由であつて、而も其傳承した理由も、其を傳承する間に、人々の持つた印象も、文學とは全然沒交涉な種類のものである事を思はねばならぬ。たとひ其間に、次第に鑑賞に似た文學的な嗜欲が出て來ても、まだ後代の人の持つたものとは、全然趣きを異にして居たに違ひない。

類型に類型を重ねて行く間に、技巧の意識が出て來る。即、文學的てくにつくが次第に發見せられる訣である。傳承によつて「前文學」が把持せられてゐる間に、愛著から來る好さの追求と、習熟による理會とが、亦内面的に起つて來る。かうして、古典文學に對する鑑賞法の第一歩に屬するものが成立して來る。さうして其が、土臺となつて、國文學の宿命的な方向が立てられる訣なのである。

だから、右二首は固より、萬葉集中大部分の歌――尤、文學意識を含んだ作家もあるにはあるが――は、實は文學作品扱ひをするのは、よほどの用心をして、かゝらねばならない訣だ。だが、

其にも段階があつて、文學意識が皆無でも、今日から其動機に、文學的なものの見られるもの、又文學的態度に飜(ウツ)して考へられるもの、又全然出來た動機と後人の見方とが一致しないで文學的になつて居るものなどがある。だが、最古い作物になると、さうしたどの立ち場にも這入つて來ないものがある。此二御製などは、其である。

重ね〳〵も言ふ。古典文學の鑑賞は、その作品の含んでゐるものだけに就いてすべきである。今人が、新しい見解を附加して、評價するのは、歌自身の價値に、何の交渉もないものだと言ふ事を覺悟してかゝらねばならぬ。是、私の特に文學的鑑賞を試みない所以である。

香具山望國の御製歌講義は昭和九年八月「短歌研究」第三卷第八號所載のものによつた——編者

（三）

乞食者(ホカヒビト)ノ詠(エイ)　二首　（卷第十六）

卷第十六は、敍事詩のくづれなる長歌或は短歌の游離して、世間に謳はれて居たものが多い。その中、殊に異風な、「乞食者詠」とある二首の長歌について述べる。かうした歌を撒布した人々については、色々考へられるが、不思議な神を持つて、旅行して歩いた巡遊伶人の一團であつた事は、確かである。昔は、新しい怖しい神を持つて居る人が來ると、村人は無事通過を望んで、之を歡待した。敵邑とも見らるべき未知の村々に、漂泊の旅を爲續けることの出來たのは、さう

いふ異風な神を齋く宗教團體の者ばかりであつた。此二首の歌は、歌の中にもある飛鳥の時代に出來たものだらうが、飛鳥の地を廣く見て、藤原に都のあつた頃に行はれたものと見てよい。恐らく其から奈良朝にかけて、生きて居つた歌だと思ふ。「乞食者詠」此を「ほかひびとのえい」と訓んで置く。既に其頃から、乞食者を「ほかひゞと」と訓んで居たらう、と思はれるからである。作者は勿論訣らない。

唯斷つて置かねばならない事は、「ほかひゞ」と自身を表す乞食者が、直に後世考へる如き乞食ではない、と云ふ事である。「ほかひ」は、祝福するほくを語根とした、「ほかふ」の名詞形なる「ほかひ」である。「ほかひゞ」とは昔の旅行宗教家で、行く先々で家・人・村を祝福して歩いた。神を持つて旅行するので、神靈の容れ物なる箱を持つて居る。平安朝から見える外居(ホカヰ)・外居案(ホカヰフクエ)など云ふ器は、行器と宛て字せられてゐる。現代にも廣く分布して殘り、曲げ物の器を「ほかい」・「ほけ」・「ほつかいな」ど方言で言ふ。「は行音ひとわ行音ゐ」では、音韻の相違はあるが、此時代は、まだ此二音——は行濁音とわ行音と——の音價が定まらないで、流動自由であつた時なのだから、假名の相違は、物の相違を意味しないのである。行器は曲げ物で、圓形・楕圓形の物、脚のある物・無い物・深い物・淺い物、大小色々あつた。「ほかひゞ」との用具であつた爲に、此を「ほかひ」と言ひ、神靈を容れた靈等(タマケ)なのである。旅行に便宜な處から、一種の旅道具として用ゐられた。

諸國をさすらふ祝言(ホカヒゴト)職人の中、最多かつたのは、海人族の人々だが、其以外の者もある。平安朝

以後、段々、所謂特殊的な流民と考へられて來た。地についた生業を營まず、旅に口貰うてわたらひした處から、段々賤民視せられる樣になつたのだ。一方又、かうした人々の生活を、一層乞食者らしくしたものは、奈良朝の行基門徒の佛者などに限つて免され、其が風をなした托鉢・行乞する者と、同樣に見る樣になつた爲である。

こゝの「詠」なる語が、文字通りの意味に使つてあれば、踊り歌の義。舞踊者自ら謠ふ部分である。萬葉集その物が、宮廷の樂人が、萬葉の古い材料に關係深かつた爲に、本集に現れた音樂の用語も正確に用ゐられて居るらしい。此處なども、さう考へて見ると、「詠」の字面及び歌が生きて來る。此が恐らく、古くから言ふよみうただと思はれる。詠の字は又、ながめと訓んで居るが、詠めは、其が更に獨吟式の要素を加へて來たものであらう。此に對して意味通ぜぬ歌を謠ふのは轉と言ふ。日本語のさへづりである。蜑のさへづりもあつた。此長歌を見ると、ほかひゞとが踊つた身ぶりが目に見える樣だ。

ほかひゞとの詠　二首

（三八八五）いとこ汝兄の君。をり〳〵て　物にい行くとは、韓國の虎とふ神を、生け捕りに八頭取り持ち來、其皮を疊に刺し　やへだゝみ　平群の山に、四月と五月の間に、藥獵仕ふる時に、あしびきの　此傍山に、二つ立つ櫟が下に、梓弓八つ手挾み、ひめ鏑八つ手挾み、鹿待つと　我がをる時に、さを鹿の來立ちなげかく、遠かに我は

死ぬべし。大君に我は仕へむ
我が角は御笠のはやし。我が耳は御墨の壺。我が目らはますみの鏡。我が爪は御弓の弭。
我が毛らは御筆はやし。我が皮は御箱の皮に、我が肉は御膾はやし。我が肝も御膾はやし。
我が反吐物は御漿のはやし。老い果てぬ。我が身一つに、七重花咲く　八重花咲くと、申し賞へね。申し賞へね。

右の歌一首、鹿の爲に痛みを述べて作れるなり。

伊刀古名兒乃君。居居而　物爾伊行跡波、韓國乃虎云神乎、生取爾八頭取持來、其皮乎多多弭爾刺　八重疊　平群乃山爾、四月與五月間爾、藥獵仕流時爾、足引乃　此片山爾、二立伊智比何本爾、梓弓八多婆佐彌、比米加夫良八多婆左彌、宍待跡　吾居時爾、佐男鹿乃來立嘆久、頓爾吾可死。王爾吾仕牟
吾角者御笠乃波夜詩。吾耳者御墨坩。吾目良波眞墨乃鏡。吾爪者御弓之弓波受。吾毛等者御筆波夜斯。吾皮者御箱皮爾、吾宍者御奈麻須波夜志。吾伎毛母御奈麻須波夜之。吾美義波御膾乃波夜之。者矣奴。吾身一爾、七重花佐久　八重花生跡、白賞尼。白賞尼

右歌一首、爲鹿述痛作之也。

【音訓】　▼**虎云神乎**　とらとふかみを。とふと訓んだが、ちふとも訓める。▼**八頭**　やつ。意義から頭の字を書いたので、訓みには、八とあるのと變りはない。▼**與**　と。上にとがあつて、五月の下にとのないのは

律文では珍しくない。▼**問**　ほど。▼**二立**　ふたつたつ。なみたつ・ならびたつなど訓む方がよさ相だが、姑らく、普通の訓みに從ふ。▼**宍待跡**　しゝまつと。下の吾宍者共に流布本「完」、類聚古集「宍」。宍は肉である。肉の音を利用したのだ。又宍喰みする爲の野獸故、宍の字を宛てたか。▼**來立嘆久**　きたちなげかく。流布本「來立來嘆久」。「來たち、來なげかく」と訓むべきだが、恐らく下の來は衍字だらう。類聚古集「立來嘆久」。たちきなげかくで、都合はよいが、定めかねる。▼**頓爾**　にはかに。たゞちに又は、とみになど訓める。殊に「王爾吾仕牟」との意義の上の關係からは、とみにかたゞちにがよい樣だが、此亦、通例の訓によつて置く。▼**御墨坩**　坩は、瓦燒きの壺である。▼**御筆波夜斯**　みふではやし。のを挿んで訓んでもよいが、音調の變化から言へば、のを捨てる方がよい。必しも之・乃の有無に拘らないが。▼**美義**　みぎ。義の字げの音を用ゐて、みげと言ふ方がよいが、此でも、さしつかへぬから、みぎとして置く。▼**耆矣奴**　おいはてぬ。耆矣を耆いはつと意譯して、更に奴をつけて、はてぬを示したと見れば、無理とも言へぬが、尙おちつかぬ。耆矣は「老いぬるを」などで、奴の字は、下の吾と續けて「やつこ われが」と訓むことも出來さうだ。「身一爾」は、下の「やへ」「なゝへ」に、音調上、對應させてゐるものと見られぬこともない。即、「老いぬるを。奴わが、身のひとしへに」となる。だが橋本進吉氏の、耆は七十に當り、奴婢の朽齢に達したものを、「耆奴」と書いたのだと言ふ說は、極めておもしろいと思ふ。唯、矢の處分がつかぬ。▲**八重花生跡**　やへはなさくと。生をさくと訓むのは、七重花佐久と一つと見るのである。おふでもむすでも當らない。はゆと訓んで、榮ゆと見れば、……はやしと重ねて來た調子を反(ワサ)めることになつてよいが、これも試みに言ふだけだ。▼**白賞尼**　まをしたゝへね。賞

はははやすと訓める。はやさねである。

【口譯】　お懷しい檀那樣。お聽き下され。ぢつとして居て、用に行く物。なあに。碓(カラウス)の柄(カラ)。其韓の國の虎神と言ふ靈物を、生け捕りに捕つて、八匹まで持つて參り、其から、其皮を針で刺し縫うて疊に作り、其から其皮疊の幾重も重ねた結構な疊を、編(ヘ)るではないが、其又、平群(ヘグリ)の山で、四月と五月の頃ほひに、藥獵を勤めました際、その時は、めでたい詞で申さうなら、まづ此そばの山の上に、二本立つてる櫟の幹がくれに、梓の弓を八挺、小脇にかいこみ、祕密の鏑矢八本、手の股にかい挿み、弓を換へ矢を替へ、とっかけひっかけありだけ射てやらうと、出て來る鹿を待ち伏せしようと、私が隱れて居ました際、その時に、雄鹿が私の前にやつて來て、ため息づいて哀願してその語るのに、「死ねとなら、此場で死んでお目にかけませう。死んで、皇族のお役に立てませう。」

言ひ立て文句で申しませう。抑、私の角は、皇族樣のお笠の飾りとなりませう。又、私のこの耳は、お墨壺になりませう。この又私の目なんぞは、上等のお鏡となりませう。其又、私の爪は、お弓の弓弭となりませう。又々、私の毛なんぞは、御筆飾りとなりませう。扨又、私のこの皮は、大事のお箱の張り皮になつて、お役に立ちませう。まだある〳〵。私の肉は、皇族樣のお膾(ナマス)のまぜ物に役立てませうし、私の臟腑もお膾のまぜ物に役立てませうし、私の反吐(ヘド)は、鹽辛のまぜ物に役立てませう。私も、老いぼれました。さうしますれば、老いぼれた私のからだ一つの上に、

七重に花さき、八重に花が咲く。おめでたや」とおほめ申しませう。おほめ申しませう。

【言語】 ○いとこ いとこめ・いとこせなど用語例がある。従兄弟のいとこや、後のいとほし・いとしなどにも關係は、大小ともにある様だ。唯いとは勿論いとこも、もつと古い語根時代の俤を存した體言風な語である。思ふに、いつく（齋）――大切に仕へる――と同じ起源の語で、itok が體言としては、いとこ、用言としてはいつくになつたものと思ふ。「大切な」と言ふ風の用語例から、「親愛な」と言ふ方へ傾いたものらしい。**○なせの君** 組織も意味も、我兄・我兄と一つだ。汝で、お身なる兄よといふ義の熟語。汝姉・汝妹の類。奈良朝文獻には、「吾が汝兄」などもある。用語例の各自の分岐や、熟語の出來方によつて、輕重が出て來るので、我兄よりは、汝兄の方が敬意深く見える。「いとこなせの君」と「ほかひゞと」が、家あるじに最初言ふ呼びかけの詞である。此が、固定して、「ほかひ」・「ことほぎ」の常用文句になつたらう。此以下は、所謂祝言の言ひ立て文句である。まづ順序として、閲歴・經過などを述べる。更に其以下の文句も、固定し、合理化し、斷片化して、處々に、古い詞章の俤を殘してゐるのである。此よびかけの文句は、西洋の民間傳承にも同様の事があつて、ばらっどその他の巡遊藝人は、Dear my Rord 系統の語を先に据ゑて言ふ。地方々々の豪族の家に招かれて、藝を演ずる時の開口である。わが國でも同様だつたので、豪家のことほぎに行つたほかひゞとの文句が、これからはじめられたのだ。**○をり〳〵て** 居る動作を長く重ねる義で、動かないのである。ぢつとしてゐてと譯すのが適當

だ。をりは、すわりこんでゐることだ。倘考へるに、をりは、ある一つの狀態に止る意にとれるから、其を重ねて言へば、かうやつてゐて、さうしてその中、屢の義も出て來る。一方、をる（折）と言ふ同音義の語は、反復する意を持つてゐるから、二つの意識が重りあつて、をり〳〵と言ふ語が出來た痕も見える。本集中にも「をり〳〵」の例はある。時々ではなく、くり返し〳〵である。をり〳〵と言ふのと、をり〳〵てと言ふのと、語の出來る事情から言へば一つだ。**○もの**には、眞の名を避ける習慣から出て――其靈（モノ）をのみさす――、急速に觀念の纏らぬ時、婉曲を欲する時などに用ゐることになつた。通例「何に」「あれに」など譯する外はない。行くと言ふ語のついた句を作ると、大抵、用に出かけると言ふ語感を持つた様である。いゆくのいは、意味不明の接頭語。とは、「とては」「と言ふと」など解せられよう。だが、「をりをりて」と一續きに見ると、別の解釋をせねばならぬ様である。**○をり……いゆくとは** 前の説明のまゝ續いて來ると、かうした生活を續けてゐて、――或は、……その場合々々に、偶（タマ）、に用に出かけると言ふ義にとれる。が、よく考へて見ると、こゝの句法が變つてゐることに氣がつく。おなじ乞食者詠の蟹の方の歌の「今日々々暮跡 飛鳥爾到、雖立 置勿爾到、雖不策都久怒爾到」の條と形が一つである。つまり、謎の一種たる「ものは」遊びの古いものと見るべきだ。即、「しよっちゆう一處に定坐してゐて、ものしに行くものと言ふは……何」と言ふ設問に對して、からと應へた言語遊戯である。「いる時のいらぬものは……何。風呂の蓋」

などの類だ。碓は、柄臼で、舂くのに長い柄のついた杵を踏むからである。其柄の根は、定著してあつて動かない。而も柄頭は、往つたり來たりする。動かないで、使ひあるきするのである。柄と言ふだけでは、やゝ表現不十分の様に思はれようが、此「ものは」が周知の詞であつた上に、からだけで、からうすを聯想する程、杵柄が農民の口に馴れてゐたのであらう。からうすは韓渡來の臼ではなかつたが、さうした合理解もあつた様である。枕詞・序歌としては、多少様子のかはつた、通俗化したものであつたのだらう。**○から**　からは朝鮮の一部から、半島全體に擴げて用ゐて來たのである。平安朝になるともろこしの地までもこめて言ふ様になつた。海の彼方の生活狀態の違つた人の住んでゐる國と、言つた考へがあつたのだ。**○とらとふ神**　今も言ふ虎に變化はない様である。唯、虎を知つてゐたのでなく、海のあなたにさうした猛獸がゐて、農業の障りになる此土の惡獸・惡鳥を懲らしに、時々來るものと信じて、唱へ詞の中に入れてゐたのである。其がゝう言ふ風に唯、平群の山を起す序歌の一部に組み入れられる様になつたのだ。象・獅子・豹などを知らないで、きさ・しゝ・こまいぬ（説明略する）など言ふ名を言うてゐたのは、此爲である。而も早くから惡獸をよせつけぬ爲に、虎の皮が、渡來してもゐた。**とふ**　といふの複合した形で、いの脫落がとふ。といふの融合したのが、ちふである。このちふから、次の時代のてふが出て來た。とふ・ちふは、「といふ」の意義の明らかなのと、既に緩んだ「なる」「ところの」の用語例に變じたものとがある。**○かみ**は醇化しない以前の觀念に溯つて見ねば訣らない。

古代からかみは、一段高いものだとする考へと、かみ元來畏怖すべき靈物と言ふ義から分化して來たものとする考へと、二つに岐れるだらう。かみとおに、かみとものとに大體對照して言うてゐる例から見ると、靈物にも媚びたゝへる時、かみの稱號を以てした様に考へてよい様である。其で神話に現れた神で、人意を指導し、欲求を參酌してくれる神の外に、雷蛇・猛獸・生蕃の類までも、「かみ」の語を用ゐることになつたのだ。つまり、地上のもの（靈）をかみと言うたのである。**○疊に刺し**　刺して疊に作りと言ふこと。針を入れる事で、此處はたゝみに仕上げる意味に使つてゐる。たゝみは、近代の様な床のあるものでなく、ぐる〳〵巻き、たゝむからの名。卽、疊んで持ちはこんだので、材料から、こもと言うたのは、草疊の一種である。編み草にも種類がある。畢竟、常に敷き放してゐるのではない。臨時に、神座を設けるのである。其が尊貴は、常に神聖な座席に居られたので、其から疊の用途が廣まつたのだ。山の獸或は、海獸の皮疊があつたことも考へられる。此亦、神座か尊者の席である。**○やへだゝみ**　へ一音を起す枕詞。疊を幾重も重ね敷くことが、その座につく尊貴の程度を示す。此習慣から、八重疊と言ふ。韓國の虎神の皮疊を作り、その皮疊を更に八重に敷き、と莊重めかしく言うたのである。「とふの菅薦」などいふふは、へと關係がある。筵類の一目々々は、古くは、廣かつた。材料を編むのに、所謂へあみ（本集）と言ふ方法で、交錯しながら織るのが、ふである。其活用が、へである。だから、ふ・へには、「隔」・「經」の義があるらしい。扨、このへを起して、平群に續けるので、後にも引

く様に、同類の枕詞に「こもだゝみ」と言ふのもある。**○平群の山**　大和の西北隅。その後に更に生駒の山地を控へた丘陵地方。大和宮廷發祥以前の先住者の傳說を持つた處。郡名となつてゐた。元「龍田」を境として、宮廷領に對してゐる地の様な記憶があつた爲に、こゝの山獵りによつて、其地の精靈に服從を誓はせる形をとつたものと思はれる。必しも野獸が多かつた爲ではない。こゝに獵りをしたことの最古い例は、日本武尊の「たゝみこも平群の山の熊樫の葉を、髻華にさせ。その子」の歌である。山獵りに物忌みの插頭をつけたのは、懷古の神事だつたのである。**○藥獵**　五月五日の藥喰ひの爲に行ふ山獵り。推古天皇紀に既に端午の節供と混同した風が見えるが、元は此歌の様に、初夏の行事で、五月五日ときまらなかつたのである。宮廷は五月五日でも、民間には尙、卯月と皐月との交りに行うたものであらう。後代には、時期を冬季にして藥喰ひをする様になつた。**○あしびきの**　山の枕詞。やの一音を起すのが古いものらしい。其が、專やまに固定したものと見るべきだ。試みに言へば、葦葺きの屋ではないか。山の裾を曳いて居る様子から言うたとする說は、信じ難い。豐田八十代さんの、馬酔木の木から山を聯想したのだとする說は、參考すべき考へだ。此枕詞には、未だ問題がある。「あしびきの此傍山」などいふ言葉を出して來るのは、ほかひの唱へ詞だから、新室に關する常套文句を含んでゐる。大殿祭や山口祭の祝詞と一筋で、「奥山の大峽小峽に立てる木を」など言ふ言葉を、きまつて用ゐてゐた。卽、「此新室の木は、どこから持つて來た。……山から伐り出した木で……」など言ふ發想を自然變

化させてゐるのだ。**○かたやま**　自分の居る傍の山が傍山で、村落を中心として居るから言ふ。傍丘・傍山などいふ言葉の成立も、かうして見ると、村ぼめ・室ほぎの詞から出たものと考へてよい。**○ふたつたつ**　前述の通り、竝び立つ、或はなみ立つと訓まれた方がよい。が、此でも說ける。ふたもとの木のめでたさを、咒詞のうちに含んでゐたものゝ變化である。**○いちひがもとに**　所謂殼斗科の常綠のもの。又いちがし。古くは赤櫪の字など用ゐてゐる。もとは、元來幹のことだ。その根に近く太くなつた部分を、殊にもとと稱するやうになる。其で次第に、根元の義を持つ。こゝは幹のかげに身をひそめる様子だ。**○あづさ弓**　梓の木で作つた弓。恐らく、最神聖なものゝ用に用ゐられたもので、必しも常用でないが、古文學の上から慣れて、その様に見えたのだらう。梓の原の木に就いては、色々說もあり、方言に保存されてゐるものを見ても、一つの木を指してゐない。普通、紫葳科のきさゝげを指してゐる。此は、萬葉には楸に當るものらしく、後世あづさとするのは誤解であらう。又、大戟科のあかめかしはをあづさとする地方もある。此も不適當である。樺木科のうち、みづめをあづさだとも言ひ、同科同屬（あさだ屬）のよぐそみねばり、又は方言よぐそあづさ、或はおほばみねばりと稱するもの、とする說があり、白井光太郎博士は、此を梓として居られる。此木についての民間傳承・用途などから言ふと、信じていゝものゝ様に思はれる。但、みづめも略あづさとして考へられて居たらうと思はれる。葉が稍細く、樹皮が軟かなところから、やなぎあづさと稱してゐる地方もある。白井さん

の採集では、あづさをはんさと言ふ地方も廣いやうだ。が、同時に、あんさといふ名の分布も多い様だ。尙、白井博士は、あづさと支那の梓とは別木だと言はれてゐる。木質が堅くて石の様になるところから、特別の信仰を持たれて居つた様である。弦の響きの高いのを以て、咒法の效果多いものと見られる様になつた。尙、此木を神聖視するところから、宮廷の使ひの持つ杖を、梓で作つた。本集の所謂たまづさが、これだ。弓のほめ詞として使ふので、必しも眞の梓でなくとも言ふのだ。**○やつたばさみ**　數人が居つて、一つ宛手挟みかくれると見れば、後との照應がうまくないが、かうした文章としては、大まかに見てよい。併し同時に、「梓弓たばさみ」とだけ言ふところを、誇張したものとも見える。**○ひめかぶら**　普通、ひをもつて樋とし、鏑矢の鏑に設けた溝だと稱してゐる。卽、樋目鏑だとする。けれども、恐らくひめは祕目鏑――氷目矢などがあるから――卽、咒矢と見てよいだらう。後世の墓目の信仰を起すものであらう。此も、必しも常に此矢を射たのでなく、所謂上指の矢の類で、儀禮用の物だらう。矢ノ口祭りに要する矢だと思はれるから、「やつたばさみ」は前同様に解釋すべきものだ。が、此場合には、假に指の股に澤山挟んだと見られない事もない。**○しゝ**　食用肉、及び其用に供せられる山野の獸。主として、儀禮に關係ある猪・鹿の類を指してゐた。但、しゝは此以上語義は不明で、肉といふことではなかつたらしい。少くとも、人肉をしゝと稱することは轉用である。**○まつと**　所謂鹿道に射部たて射るので、通行の獸を邀すること。此にとといふ助辭がつくと――終止形＋と――所謂將然形

と同様の意味を持つ。卽待たんとして、待つとしてが同用語例になるのである。**○さをしか**　さは鍾愛を現す最小讃辭。鹿は、元めかに對する言葉。鹿の雄なるもの。しかが總てを掩ふやうになつてから、をしか・めしかなど言ふ。**○來たちなげかく**　くは體言化する職能を持つた語尾。だから、副詞を作り、又名詞を作る。歎くことには、歎くにはの意。動詞・形容詞・助動詞の第四變化につくのが常例で、動詞の場合は、音の末尾をあ列に變化させる。「來たち」も「たち來」も大體同じであるが、今日の語感を以て解釋すれば、自分の居るのを知つて、わざ〳〵來てが、「たち來」で「來立ち」は偶然獵人を見て立ち止つた風にとれる。なげくは、本集では普通、溜息づくことで、平安朝以來の抽象的なものは少い。但、これと語原からの順序は知れないが、愁訴・哀願する用語例も可なり古くからある。其場合、わぶと同義語。**○頓に**　自ら死ぬことや殺される事を悟つたのではない。今にも卽座に死んで見せようといふところである。だから、には、實は惡い訓だ。にはかに、「偶然と急に」と譯すべきものである。實は、とみに・たぢかには、「二つながら稍新しい訓であるが、此傾向から說くべきものと、さう訓んだ。**○わはしぬべし**　このべしは決心である。此と似た言ひ方の『死なむ命、にはかになりぬ』などとは違ふ樣である。同じ言ひ方を繰り返して、『大君にわは仕へむ』と重ねて、この四句で、大君の爲には、たちどころに死んで奉仕しようと、誓ひの形を見せたのである。この歌一首としては、第一次的には、『來たちなげかく』で切れてゐるものと見られる。其が「頓爾吾可死」の句に切れ目を移したのが、

第三段として、「大君にわは仕へむ」と言つた、重複した句法をつゝみ込んで、これ迄で一段。「わが角は」から二段としてゐる。

○おほきみ　皇族のすべてがおほきみ――王――である。村邑の君主をきみと言つたのに對して、此をおほきみとしたのだ。おほきみだけでは、天子・親王・王の區別が場合によつて分れるだけである。普通、稱號としてのおほきみは、大君の下位にある王を指す。それ以上のおほきみには、特別の制限がいる。譬へば「やすみしゝ吾がおほきみ」と言つた風である。この言葉があるからといふ一點によつてのみ、古人が夢寐にも皇室の事を忘れなかつたといふ結論に運んでは悪い。同時に、古い見方から、このほかひの歌が、宮廷に行はれた證據にも出來ない。謂はゞ、一種の誇張と見るべきものだ。**○つかへむ**　奉侍するの具體的な言ひ方と、なし奉るの抽象化した使ひ方とが既にある。此處は、つくり申す義のつかへむである。卽、「わが角は御笠のはやし」につかへむ・「わが爪は御弓のゆはず」につかへむ、といふのである。**○みかさ**　此ばかりでは、頭へ直に戴く笠か、或は華蓋（キヌガサ）か訣らない。かぶり笠とすれば、其頂に鹿の角をつけた事になるのであらうが、かうした遺物もなし、ありさうにも思へない。恐らく、華蓋を吊る柄の先に、鹿の角を付けた飾りがあつたのだらう。**○はやし**　動詞はゆを語根として再活用した動詞はやすの名詞形。普通、はえあらすものと云ふ風に說くが、其ならば飾りと言つてよからう。一方、はやすは物によつて、土地・生命・財産を祝福するもの丶義を持つてゐる。さうすれば、その義も兼ねて考へ

ねばなるまい。**○みすみのつぼ**　鹿・馬などの耳の形が、竹を殺いだやうに見え、又その中の毛が墨池の肉のやうに見えるところから見立てたとも見える。だが、この邊りは裝飾品の事を述べてゐるのだから、唯の墨斗ではなく、黛の容れ物と見る方が自然である。但、單なる墨か、或は其を溶した物を蓄へておく壺か訣らない。**○及（ラ）等**　所謂、含蓄を思はせる接尾語。本集では、其よりも更に習慣を轉用して、律文としての音數を補ふ爲に付けてゐる事が多い。同時に、稍親しみの感情を持つてゐる。**○ますみの鏡**　或はまそみのかゞみとも言ふ。このすむが果して澄むならば、ますみと熟して、後鏡を形容する訣で、語原的に見れば、稍無理である。若し、從來の語原說以外に考へなければならぬ點があるとすれば、鏡の光澤からして翠翡（ソヒミ）の羽色の聯想ではないか。普通、脫化して、まそかゞみ。此は、全くの目に關した譬喩である。二つ見立てを續けて、次は又實際の物を言ふ。**○ゆはず**　弓の兩端をさす言葉だが、普通、角・爪の類を付け添へたのであらう。**○みふではやし**　筆の毛そのものをかう言つたのか、筆の表面になる毛を言つたのか訣らないが、箋註倭名抄に引いた崔豹古今注に、「蒙恬之爲レ筆也、以二柘木一爲レ管、鹿毛爲レ柱、羊毛爲レ被、亦非レ謂二兎毫竹管一也」とある。此とは逆に、鹿毛を以て被毛とするものを言つた、と姑く定めておく。**○みはこの皮に**　はこは、古代ほど神聖なものと考へられてゐる。神靈の所在としてゞある。このはこも、恐らく、唯の物容れではなからう。はこの皮といふのは、はこを覆ふ爲に被せる皮かと思ふ。には、「吾が角は」以下皆名詞止めであるが、このにでもつて、「…

…に吾は仕へむ」といふ意であることを示してゐる。さうして、次では又一轉して、すべて名詞止めにしてゐる。にのある格と見てもよし、唯、「……なり……なり」といふ言ひ方になつてゐると見てもよい。**○しゝきも**……　この邊のはやしは、肉・臓腑を膾の中に入れることを示したので、あへ物・まぜ物など言ふ意味のものである。**○みぎ**　膾・胴・齢。美義の義は、此場合げと訓むべきかも知れない。卽みげ。此言葉はいろ〳〵あるが、大ていえ列になつてゐる。にれがむ・みけがむ・にけがむなど、皆草食獣の腹中の食物を反芻することを言ふ。此等の語根は、皆齢を意味する。其うち、鹿の齪を以て美食とした。洋の東西を問はず、是を用ゐて食用としたものだ。字では齢・齟。尙又胴など書く。**○みしほ**　鹽干。古くは又しゝびしほ。穀物と鹽と肉とをまぜて漬けるものである。みぎを醢（ヒシホ）に見立てたのか、みぎ其物に鹽をまじへて製したのか、其點知り難い。**○耆矣奴**　耆は七十である。橋本進吉さんの耆奴とする説に從へば、七十を過ぎた用にたゝぬ奴隷である。鹿自身が謙遜して言つたものだといふ事になる。此はよい説だが、矣の字に就いて、尙一考を要する。但、顯宗紀の「新室壽」の條に、顯宗天皇の謠に、「倭はそゝ茅原　あさぢ原　弟日僕是也（ウマ）」又、同じく「市部宮（ノニ）御宇天（アメヨロヅ）滿國（ニヨロヅオシ）滿押磐尊（ハノミコトノミアナスアヤツコラマ）御裔僕是也」など言ふ類の古い固定したほかひの詞が、合理化して用ゐられて居ると見ることが出來る。家主（イヘルジ）に對して、ほかひゞと自分がやつこと稱する言葉で終るのである。だが、音訓に述べた様に、奴と我とを接續して訓めば、「やつこわが・やつこわれが」と訓んで、一句を形作ると見ることも出來るので、

祝言者の傳襲的の詞が、鹿の感情を表すのに變形してゐるのだ。**○身のひとしへに**　ひとしへといふ言葉は、後には違つた用語例を持つ様になつたが、古くはひとへの義であつたらうと思はれる。老いぼれて了つてゐるのに、この奴隷なる自分の身一つに、と口譯通りに續くのだ。**○七重花さく　八重花さく**　七重の花、八重の花でなく、七重に、八重にといふ事であらう。此は恐らく、家屋の屋根を讃へるところから出た詞で、此も合理化せられて、鹿の體の光榮を言ふことに轉用したのだ。**○はゆと**　前述の通り、生をさくとするのが落ち付かないから、字の通りはゆと訓んで、花のさかんに咲く姿を言うたものとの考へを記しておく。**○まをしたゝへね**　まをすは下から上へ言ふこと。同時に、請願の意味も持つてゐる。たゝふは、四段活の方は水のはり滿ちてゐる有様で、下二段は、その狀態にする事だ。助辭ねは、普通の希望のねでなく、感動語尾なの音韻變化で、まをさなが本體である。意味はまをさむ、及び其元の形のまをさも——次の蟹の歌のをさめの詞——と一つである。**○鹿の爲に**……此左註は、歌の意味から推察して付け加へたものに過ぎない。鹿の代りに苦しみを述べたといふ趣きは見えない。まして、虐げられた民の叫びなどゝいふ事は出來ぬ。大體に、ほかひゞとがほかひを續けてゐる間にくづれて來て、更に新しく、かうした演劇狂言風の文句が分化して來たのである。鹿は猪をこめてしゝと言ふ如く、總ての野獸の代表者である。此を抑壓することが、農村の作始めの呪術であつた。其爲に、鹿が降服して奉仕を誓ふと言つた形を、ほ

かひぐとの立場をも交へて現したのである。村讃め・室壽ぎ・人稱へなど、皆不可分の行事である爲に、かうして、所謂「いとこなせの君」に對してうたひかける詞章となつたのだ。それは、次の「爲蟹述痛作」にも通じた事實で、水中から來る田其他の害物は、蟹を以て代表させたのである。蟹が苗代・苗田に來ると、はさみ切る、所謂蟹喰みの災ひをなしたものだ。其で、蟹も奉仕を誓ふ形をとつた。普通の祝詞系統のものでは、過去の征服或は其時の誓ひによつて、かうだといふ風に表現するのだが、此は、すべて現在で言つてゐる。其點、咒詞の歴史から見れば、奈良朝より古くて、而も新しみのある此歌も、古い姿を持つてゐるもの、と言ふことが出來る。

（三八八六）おしてるや　難波の小江に、廬造り　隱りてをる蘆蟹を、大君召すと。何せむに　吾を召すらめや。明らけく我が知ることを。歌人と　吾を召すらめや。笛吹きと　吾を召すらめや。琴引きと　吾を召すらめや。かもかくも、御言受けむと、今日今日と飛鳥に至り、立てれどもおきなに至り、つかねども　つく野に至り、東の中の御門ゆ參り來て、御言受くれば、馬にこそ鼻繩はくれ。あしびきの　この傍山のもむ楡を五百枝剌ぎ垂り、天照るや　日の日に干し、さひづるや碓につき、庭に立つ磴子につき、おしてるや　難波の小江のはつ垂りを　辛く垂り來て、陶人の作れる瓶を、今日行きて明日取り持ち來、吾が目らに鹽塗り給べと、

申し賞へも。申し賞へも

右の歌一首。蟹の爲に痛みを述べて作れるなり。

忍照八　難波乃小江爾、廬作、難麻理豆居葦河爾乎、王召跡。何爲牟爾　吾乎召良米夜。明久吾知事乎。歌人跡　和乎召良米夜。琴引跡　和乎召良米夜。彼毛此毛、命受牟等、今日今日跡飛鳥爾到、雖立置勿爾到、雖不策都久怒爾到、東中門由　參納來豆、命受例婆、馬爾已曾布毛太志可久物。牛爾已曾鼻繩波久例。』足引乃　此片山乃毛武爾禮乎五百枝波伎垂、天光夜　日乃異爾干、佐比豆留夜辛碓爾舂、庭立碓子爾舂、忍光八　難波乃小江乃始垂乎辛久垂來豆、陶人乃所作瓶乎、今日往明日取持來、吾目良爾鹽漆給、時賞毛。時賞毛。

右歌一首。爲蟹述痛作之也。

【音訓】▼**難麻理弖居**　なまりてをる。居訓、其上の四字音。代匠記に、彼の下に脫字あるか、或は「かれをしも」と考へ、萬葉考には「そこをも」。其ならば「そこをしも」と訓む方がよからう。略解に此毛の脫として、「かもかくも」と訓んでゐるのがよい。▼**命受牟等**　みことうけむと。類聚古集に命とある外、みな令。どちらでも訓は一つであらう。▼**置勿**　おきな。この訓は問題だ。この勿は物の略畫で、置物即ちおかとも思はれる。▼**雖不策**　つかねども。下のつくぬに關係のある言葉だから、つかねどもと訓んでもいゝが、此處は策の字をつゑと名詞に訓みたいところだ。が、つゑならねど・つゑせねどなど考へても落ちつかない。舊訓うたねどもとあるは、つゑの一用途だけれど、此處には

不適當。▼**東中門**　ひむがしのなかのみかど。門は敬語をつける習慣があるから、なかのみかどで差し支へない。▼**參納來弖**　まゐりきて。熟語を作る時には、り音脱略の習慣から假想して、入るの義の納とで意味を示したのだ。此場合、い音融合。假名はまゐりになる。▲**可久物**　かくも。或はかくものかも知れない。▼**波伎垂**　はきたり。たれと訓まぬ方が古風だ。▲**天光夜**　あまてるや。本集では照・光二字通用してゐる。共に、てるともひかるとも訓むやうだ。▼**日乃異爾**　ひのけに。本集記錄の時代、この言葉をかう理會して居たのである。▼**庭立**　にはにたつ。にはにたつと訓む類例は多い。「爾波爾多都あさでこぶすま」など書いたのもあるが、古くはにはたつではなかつたらうか。▼**碓子爾舂**　前のも此處のも、舊本多く春になつてゐるのは誤り。碓子。宣長碓子の誤りとしてゐるのは、理にあたつて居る樣だ。だが、その訓すりうすは從へない。唯、うすでよい。▼**忍光八**　おしてるや。忍をおしと訓むのは、古くからの慣例。▼**陶人**　すゑびと。陶器をすゑと訓む。その慣用略字。▼**漆給**　ぬりたべ。漆の字ぬりと訓むこと、漆部ぬりべ、漆君ぬりのきみなど訓むから、此に從ふ。或はひでかも知れない。▼**時賞毛**　まをしたゝへも。前の鹿の歌の例に從つて、假に訓んでおく。時賞をもちはやすと訓む說は古くからあつて、比較的よい。卽、時を持の誤りと見るのだ。或は時をとの假名と見て、其下に白若しくは申などの脫けたものと見るか。但、類聚古集には、時を腊につくつて、きたひと傍訓してゐる。尙、語釋に述べる。

【口譯】　難波の入り江に小屋をかまへて、ひつこもつてる、この葦蟹。この私を、天子樣がお呼びになる、と云ふことだ。何の爲に、私をお召しになつてゐるのだらうか。あゝ其は、はつきり私に訣つてゐることよ。歌うたひとして、およびなさるのだらうか。其とも、笛吹きとして、およびになるのだらうか。併し何にしても、仰せを承つて來ようと思つて、所謂今日か〳〵と、飛鳥について、其飛鳥のおきなと云ふ所に著き又、桃花鳥野と云ふ所に著いて、それから、御殿の東の中門から參入して、仰せをば承ると、まあどうだ。馬ならば鼻繩を通して、引くのも尤だが、此蟹をば嚴重にお縛りなされて、其上、近くの山の榆もみの皮を、幾枝も〳〵本から先へ剝ぎとつて、それを毎日々々、天日にお晒しなされて、一方、碓に入れて搗き、又其上に庭に据ゑた、挽き臼でつき、と云ふ風にして、難波の入り江の鹽の雫の最上垂れの、辛く垂れたのをば垂らして持つて來て、それを燒物作りがこさへた瓶に、所謂「今日行つて、明日直ぐ」と言つた風に持つて來て、その瓶に入れるとて其鹽汁をば、私の目なんぞに御塗り下され。御願ひこの通り、と御めでたやと、おほめ申しませう。おほめ申しませう。

【言語】　**○おしてるや**　おしてるとも言ふ。難波の枕詞。但、意味不明。本集中旣に、合理化して、「直越（タヾゴ）えのこの道にして、おしてるや　難波の海と、名づけゝらしも（卷六）」といふ歌がある。龍田山を越えると、日下江（クサカエ）以下中河內の沼澤地が難波の海まで續いて見えたから、といふ考へである。海の光がおし照つて居ると言ふのだ。おしてる說、不可。一人の人の歌を以て、其時代の使ひ方を決める事は出來ないのである。萬葉の用語例ばかりで、萬葉は注釋出來ない。萬葉は、長い時代に亙つて居るからである。**○難波の小江**　小江の小は最小美辭で、親しみの氣分が含ま

れる。こ・さなどゝ同様接頭語。難波の海でなく、淀川の入江で、難波近くにあつたからの名だ。江は、川又は海の一部分が、深く灣入してゐる處。こゝの江は、又難波入江と言ふ。大阪の丘陵地帯の東に集まる川々が、淀川に注ぐ所で、沼澤地をしてゐたのだ。**○なまりてをる**　なむ或はなぶの再活用、なまる・なばるは總てひつこんで、出ない様子だ。隠れて人に顔を合せない用語例が多い。女が男を避ける場合に多く用ゐた。**○蘆蟹**　蘆の中の蟹だが、蟹の一種の名と見てよからう。**○を**　蘆蟹よ、そのわれを、の意。だから、蘆蟹なるに、とも譯せる。唯、直に蘆蟹をばと說くのはよくない。**○おほきみ**　こゝのは、天子と說く方がよいが、尙一般的に皇族と譯して置く。**○召すと**　召すは、呼ぶの敬語。とは、と言ふの意義固定。殊に、歌などに關して、召人（メシビト）を定める例があるから、此召すがきいてゐる。後世の囚人を、めしうどと言ふのは、召して、ある期會まで足止めして置くからだ。**○何せむに**　何しに。又、何の爲にと譯する。何しように無駄だ、といつた解釋は、本集の用語例には當らない。卷五の「白金も黄金も玉も、何せむに優れる寶。子にしかめやも」も何とて子より優れる寶ならむやの意で、何にならうかではない。此長歌では、殊に用法が明らかだ。外のもの、或は事ではない、といふ義を含む。**○召すらめや**　此は反語の用法でなく、唯の想像である。呼んで入らつしやるが、それは、かうに違ひない、といふことだ。召すらめやを重ねて來たのは、聲樂上の單調な喜びの爲と、同時に、蟹が多藝を述べてゐる訣で、決して、一つ宛に就いて疑問をもつてゐるのではない。さうした幾つもの對句を竝

べて行くのが、もつと根本的に古い律文の癖である。**○明らけく我が知ることを**　わが明らけく知ることよの意で、その訣は、私にはつきり解つてゐる、と云ふことだ。或は、私がはつきり知つてゐることをさせよう爲、とも說けるが、其では表現不足だ。**○歌人**　令の規定では、治部省雅樂寮の所屬となつてゐる。恐らく本集に見える歌儛所に務めてゐたのだらう。卽、大歌謠ひである。此に對して、女歌を務めるものが、歌女だ。笛吹き・琴彈きも、蟹の動作から聯想して云ふので、必しもこの歌が初めて考へたのでなく、更に古くからの民間傳承と思はれる。殊に、其爪・足の擧動が笛吹き・琴彈きを思はせてゐる。**○笛吹き**　令には笛工としてゐる。蟹の泡を吹き、鋏を上げ下げする様子から、言ふのだらう。**○琴彈き**　横這ひしながら、爪を動かす様が、日本古樂の立琴を奏する様の聯想だらう。**○らめ**　現在完了想像、てるだらう。ばよい。**○と**　として・と思うて・……にする爲に、と譯すれ**かくも**　そこをしも、と訓むとすれば、その故にとなる。かもかくもは、ともかくと同じで、かかく・とかくなど云ふ對象的な兩端の言葉を擧げて、あゝにしても・かうにしても、あゝ云つても・かう云つても、あゝ思つても・かう思つてもなど云ふ形を表す。かゆきかくゆき・とゆきかくゆき、など無限にある。畢竟、何にしても、何れにしても、といふことになる。こゝでは歌人であらうと、笛吹きであらうと琴彈きであらうと、どちらにしても、といふことだ。**○御言受け む**　みことは御言。命令にもなる。受くは、信賴させることで、承知した趣を相手に、誓ふとこ

ろから承服・承諾の義が出る。**○今日々々と飛鳥**　又日が變つたと待ち望む心持ち。だが、同時に其を飛鳥――明日（アス）――を起す枕詞の様に使つたのだ。而し、之はやはり昔の言語遊戯の一つであつたのが、此處へ取り入れられたと思はれる。此歌の場合は、蟹が長旅を續けて來る様子にとりなされてゐる。

○飛鳥　大和高市郡。今、飛鳥村飛鳥が其中心である。此は飛鳥大神の鎭座地である爲に、特別に此名があるので、古くは、飛鳥の地は、狹くも廣くも、亦多少移動もしてゐる。藤原の都以前、長く宮地となつてゐた爲、都なる言葉と飛鳥と同内容であつた様に見える。後、藤原の都が榮え、更に寧樂に遷つてからは、舊飛鳥一帶を小墾田と云つた。藤原の都も、或期間は飛鳥の宮とも稱せられてゐたらしい。此點は喜田貞吉博士も述べられた。小墾田は飛鳥の一部分で、舊飛鳥の地よりは南にあつた。土地の汎稱の移る一例である。此歌の飛鳥も果して飛鳥の宮か、それとも藤原の宮の事か訣らない。「采女の　袖ふきかへす飛鳥風」（卷二）の歌も、藤原遷都の時の歌になつてゐるが、或は、寧樂へ遷つた時の作とも思はれる。それで、「都を遠み　いたづらに吹く」が訣ると思ふ。**○立てれども置勿**　例の言語遊戯から地名に續けたもので、此らは、此歌に限つた卽興と見られる。立てゝあるけれども、置いてある、と云つた洒落だ。此場合立てれは他動四段の、立つから出たものだ。**置勿**　おきな。此地名は書物にも、現在の地理にも證據立てるものがない。勢ひ確かな訓も下されぬ。すゑと訓んだのも、置く物だから据ゑ物、卽、陶器――すゑ

と考へて見たゞけである。何れにしても、飛鳥附近の地名であつたに違ひない。**○雖不策**　つくな・つくぬ。つくぬは桃花鳥野である。又つきのの同類の地名に桃花鳥坂・桃花鳥田がある。飛鳥の南方、岡・島ノ庄の南外れ、多武峯の西登り口の邊である。雖不策。此三字もやはり、つくぬに絡んだ言語遊戯であるが、つかねどもつく、といふよりは、今少し效果の多い訓み方があらう。卽、つくのは土地へつかれない、といつた内容なのだ。だから、杖ではないが、といふ風に訓めれば、一番よいのである。**○東の中の御門**　中の御門は、其用途から云へば、正門といふことになるが、正しくは、外垣の門を入つて、更に、主人の住む内圍ひに入る門を指す。卽、後世まで續いた中門だ。此歌で見ると、當時、東が宮殿の方角であつたと見える。時代が下ると、普通中門は東西にあることになつてゐる。外圍ひと内圍ひの間は、今日考へる程重大では無かつたのだ。單に飛鳥或は藤原宮が、東に正門を持つて居つたにも限らないのだ。**○ゆ**　をば。まゐりくるのと云つた進行動詞に先行する格のてにをはだ。凡て、ゆ・より・からは、何處をば通る・何處をば渡つてゐる。卽、御言受くれば馬にこそ……此蟹にふもだし懸け、鼻繩はけ給ふ、と云つた風になる文脈だ。だから口譯には、此はまあどうした事だ、といふ位に說いて置くべきだ。**○馬にこそふもだしかくも**　ふもだしは、後の褌であるが、古く分化して、ほだしといふ形も出來た。漢字絆をほだしと訓んでゐるが、此は脚を繫ぐ綱である。そして、此訓には、ある過程が略

せられてゐる。ある信仰上から、馬の荒れすさびないやうに、馬帯に結びつけて置くものが、總てふもだしであつた。馬の脚に繋ぐ以前は、馬の體に引き廻したもので、此家畜の魂を鎮ひ込める意味があつたらしい。後に絆は外に移り、身に附いたものは、かい（繋）と稱する様になつた。卽、面繋（オモガイ）或はおもづら、胸に著けるものが靹（ムナガイ）、臀にかけるのが鞦（シリガイ）であつた。此が古いほだしでありふもだしである。今も蟹に褌と云ふ部分がある。恐らく昔もさう言つた爲の聯想だらう。自分はふもだしはかけてゐるけれど、馬のものとは違ふ。それに馬にかけるふもだしを懸けたと抗辯する言ひ方だ。かくは他動四段。物はもの假名か、ものか、どちらでも訣るが、雙方とも落ち著かない。もは懸くることよ、それに、といふ義。ものもやはり、感動のものである。此句を文法的に解くと、「それは馬にならふもだしは懸けることだ。が、蟹には懸けるものでない。」と跳ね返るのである。**○牛にこそ鼻繩はくれ**　それは牛には鼻繩つけるのも尤だ。が併し、蟹には懸ける訣がない、と云ふ意味。鼻繩は、牛の鼻孔に通した繩、一方に結び玉を拵へた丈のもので あつたらう。後に木質・骨質、或は金屬の輪を用ゐることになつた。はくは他動下二段。併せて著ける、或は嵌め込む意。——此歌、こゝで第一段。

○もむ楡　楡に家楡（ヤニレ）・春楡・秋楡があるが、何れにも當らない。或は蟇のことをもみとも云ふから、ひきざくらかも知れない。但、唐檜（タウヒ）一名、楡樅（松科、唐檜屬）とも言つてゐるから、此木に當るだらう。今一種たけもみ・日光もみなど稱する樅屬の木を楡樅と云つてゐる。大體此中であら

う。楡の類は、其粘液を接合劑にしたり、葉を食ふ外、其白膚を食ふ。**○剝ぎ垂り**　逆剝ぎに皮をずつとむくことで、たらし剝ぎと云はゞ言へる。幾本となく皮を剝いだことを、五百枝…と云つたのだ。**○天照るや**　やは體言化する語尾。日の枕詞。**○日の日に**（ケ）　本集でも既に、けになる副詞を様子の變り行く狀態、卽、いよ〳〵・いやつのりになど譯すべき用語例を生じてゐたと見えて、音訓で述べた様な問題があり、其と共に内容にも、一日々々と・益、と云つた解釋をすべき處もある。此處は日に〳〵・毎日である。けはかと同じく、曆日の日を云ふ言葉。**○さひづる**　**や**　漢の枕詞。さへづるやとも言ふ。やは天照るやのやと同じ。聲樂の上の「詠」に對する「囀」の訓讀である。樂人が早くさうした譯語を用ゐたのだ。此歌の序に述べた様に、舞ひ乍ら謠ふ詠の中、意義不明な文句を謠ふことを云ふ術語。所謂蜑のさへづりも蜑の舞踊歌の意味不明のものを指したのだ。通常人語の感じのせぬ物言ひを云ふと解して、所謂南蕃鴃舌に聯想してゐるのは、其過程が缺けてゐる。此も恐らく漢人の雅樂、卽、左舞ひの囀の意味不明な部分を云うた言葉だらう。**○から**　漢人の意義を持つた略語。國土の漢は前の歌に說いた。**○碓**　前の歌の、「ものにゆくとは」の條に說いた。柄（カラ）を要件とする臼だから、からうす。最印象的な部分を云つたので、今の踏み臼である。**○庭に立つ**　卷十四に「爾波爾多都、あさでこぶすま…つまよしこせね…」と同様の卷四の歌、「庭立あさで（をとも）かりほし…」を見ると、あさの枕詞らしく思はれる。此場合は、臼の枕詞らしく見える。あさの枕詞とするのは、恐らく或原歌の誤解であさと續けた

のではないか。而も爾の助辭は、合理觀から入れ込んだもので、庭立つが古い形ではあるまいか。さすれば、此枕詞と見られるものゝ懸り方は違ふ。恐らく突發する・急に設ける、と云つた義らしく思ふ。此を普通に見れば、庭に立て据ゑた臼と云ふことで、祭場に神座として置く臼と見るべきだらう。**○磴子（ウス）につき**　必しも磴子と字を改めずとも、碓の字を臼又は磴子に通用したと見てよい。但、磴子ならば、挽く・磨ると云つて、舂くと云はない。又、新撰字鏡には、碓をうすと訓み、磴をからうすと訓んでゐる。だから、挽き臼にのみ片寄らずともよからう。恐らく碓で荒ごなしゝたものを、更に、臼で舂いたと見ればよからう。こゝでは、蟹は舂かないで、もむ檢だけを、こなすのであらう。**○おしてるや**　意識的でない繰り返しが、自然「詠」としての效果を增してゐる。**○はつ垂り**　鹽を作るには、海水を濾過して、飽和液を釜に入れて凝結させる。その液の最濃厚なものを、はつ垂りと云ふ。恐らく最初に垂れた垂れと云ふことでなく、ほつ、即、最上を意味する言葉の音韻變化と見るのがよからう。古語の所謂堅鹽ではなく、燒かない先の垂れ汁である。**○辛く垂り來て**　今一度、印象强く言つたもので、平易に言へば、辛く垂れた最上の辛鹽汁を垂し來ての意。垂りは他動四段。**○陶人**　陶器を作る人の意であるが、同時に陶器を作る里の人の義。和泉國泉北郡陶器莊、古く陶の邑と云ふ。陶器は据ゑ物であるからすゑと言ふのだ。今も古陶器を發掘することが多い。行基以來の傳承を說いてゐるが、此邊一帶に陵墓散列地であるから、起原はなほ古いものであらう。陶人は大和にも居つたが、此場合は和泉と見

てよからう。**○今日行きて明日取り持ち來**　かなりの距離がある所で、而も至急に往復することを意味してゐる。併し、唯大急ぎでと云ふだけでは、意味をなさないから、思ふにこれにも言語遊戲があるのであらう。此時代から、器用職人の約束を果さないこと、「紺屋の明後日」の樣であつた爲に、註文した翌日には、持ち歸ると考へ、おちの樣に云つて、陶人に聯想させて、笑はせる積りなのであらう。**○吾が目ら**　目は身かとも思はれるが、同時に顏の代表として、其顏の意に用ゐてゐるから、私の面に、と云ふ風に譯してよからう。**○鹽塗り給（タ）べ**　給は舊訓たべとある外多くは、たまふ・たまひと訓んでゐる。だが、こゝは蟹の感情を述べるのだから、誓約或は降服の積りで、食物になることを願つてゐる、と見なければ、結末にはならない。たぶはたまふの融合で古くから使つてゐる。**○時賞毛**　音訓にも述べた樣に、此處は諸說皆同感出來ぬ。姑く鹿の歌同樣に訓んで置く。但、類聚古集に、時を腊に作つて、きたひと訓んでゐるのは、此字の訓きたひなるが爲に、無反省に訓んだのか、意識して訓を下したのか訣らない。腊の字、鳥の乾肉で、ほじゝと同じ物である。唯、鳥と獸とを言ひ分けるだけだ。和名抄に岐太比とある。或は、膺懲を意味する、きたふ・きたむの假名に使つたものか。古代のことほぎの言葉に、精靈を歸服せしめる意味から、きたひたゝへもと云ふ句を以て囃したでもあらうか。若し、尙言ふことが出來れば、鳥のきたひ同樣、蟹の鹽干しをもきたひと言つたので、鹽塗りきたひ給ふとあつたのが、逆になつたのかも知れぬ。此句は、やはり訣らぬ。

【鑑賞その他】 前の歌では、鹿の身が、一物殘るところなく、用立つ事に興味を持つて歌つてゐるのに對して、此は蟹を文章の主人公として、其側から述べて行き、最後に、蟹の贄のことだけを述べてゐる。殊に前段では、蟹の動作の特徴を算み擧げてゐる點、類型的ではあるが、當時の觀客には、おもしろがられたらう。前の方は、其點は、唯鹿の叩頭する形に興味を持つた部分があるだけだ。そして「飛鳥に到り……中御門にの邊に」は、殿讃美の形を存してゐるらしい。鹿蟹共に對句を際限なく重ねてゐるのは、咒詞系統の修辭法で、主としては、其家貨讃美に屬する發想法である。古代に於て、蟹が、滑稽な小動物として、或は性欲を聯想せしめるものとして、又邪惡の象徴として見られてゐた爲に、かうした歌が出來た訣である。

（四）

卷第十三問答の歌

次の歌は、大歌（——宮廷詩）と小歌（——民謡）と藝謡（——ほかひ歌）とが、互に交流してをつた事實を、示すのだらうと思はれる一例である。卽、宮廷の大歌類似の歌が民間に行はれて行つて、それが宮廷にはひつたものか、或は更に、ほかひゞとの歌としてうたはれてをつた大歌系統のものが民謡となり、更に大歌に採用せられたか、その邊の事情は斷言出來かねるが、おほよそ前に言つた、三通りの歌としての過程を經てゐるものと考へる。

この歌には、長歌二首短歌二首一括せられて、一つの問答體のものになつてゐる。それに、歌の内容から見て、眞のかけあひでなく、藝謡としての一種の演劇味を含んでゐるものと考へることが出來る。

（三三一〇）こもりくの　泊瀬（ハツセ）の國に、さよばひに吾（ア）が來れば、たな曇り　雪は降り來ぬ。さ曇り　雨は降り來ぬ。野つ鳥雉子（キヾシ）はとよみ、家つ鳥雞（カケ）も鳴く。さ夜は明け、この夜は明けぬ。入りて且寢（カツ）む。この戸開かせ

反　歌

（三三一一）こもりくの　泊瀬小國（ヲグニ）に、つましあれは、石は踏めども、なほぞ來にける

隱口乃　泊瀬乃國爾、左結婚丹吾來者、棚雲利　雪者零來奴。左雲利　雨者落來。
野鳥雉動、家鳥可鷄毛鳴。左夜者明、此夜者旭奴。入而且將眠。此戸開爲

反　歌

隱來乃　泊瀬少國爾、妻有者、石者履友、猶來來

【音訓】 (一)▼**隱口**　こもりく。隱は訓。口は漢字口の音の次音か、訓くちのちを漢音の韻の樣に扱つて、脫略させた假名か、恐らく後者であらう。▼**左結婚**　さよばひ。結婚の長い過程の局部を云ふ言葉は多い。だから、此字だけでは判斷がつかぬ。類型の古歌（鑑賞參照）から見ると、おほよそ此訓が當りさうに思はれる。▼**零落**　ふり。此二字、本集常にふると訓むべき場合に置いてゐる。▼**落來**　ふりきぬ。上のきぬは

来奴を以て表して来てゐる。それで訓み方が訣ると考へて、奴を書かなかつたのかも知れぬ。其で、ぬ|を添へて訓んでおく。一方、此はふりけり|とも訓める。して、強ひてつ|を入れなかつたのだ。▼**雉**　きぎし。音韻の上から言へばきぎす|と同じであるが、古くもあり亦正しいものと考へられて居たらう。▼**動**　とよむ。と|は濁音でない。此字を宛てた例が多い。▼**可鶏**　かけ。可鶏どちらも音假名。而も表音文字としての一方、鶏でその本義を示してゐるのは、とりわけ東歌の方に多い書き方だが、外にも少くない。假名使用の上の一種の進歩である。▼**旭奴**　あけぬ。次の和せた歌にも、「ぬばたまの夜は昶去奴」とある。此處と其處とでは、普通あけ|に當る字を區別して書いてゐるが、古本では此二つが一致してゐるものと見てよい傾向がある。即、祖に歸する樣である。これを昶・旭と兩方に書いたものと見える。但、此字不明。更に何かの誤りかも知れぬ。だから、姑く此處も昶の字と見たい。昶の字はあきらかであるから、動詞あく|に宛てたものと見てよからう。昶の字を類聚古集には宛てゝゐる。疑ひなく昶に近いことを示すのだ。▼**且将眠**　かつねむ。旦ともなつてゐる。かつねむ・あさねむ|兩方に分れる。或はしましねむ|と訓むのかも知れない。

(二)　▼**隠来**　こもりく。来は訓。▼**少國**　をぐに。小・少は文字及び用字の上で通じてゐる。殊に、此時代のものには多い。▼**妻有者**　つまあれば。つまあれば|とも勿論訓めるが、或部分まで習慣的に見れば、此儀でつましあれば|と訓むことを豫期したものと言つてさし支へない。▼**石**　いし。いは|とも訓めるが、和せた歌の反歌「河の瀬の石迹渡」とあるのを見ると、やはりいし|がいゝ樣だ。▼**猶来来**　なほぞきにける。勿論、猶一字でなほぞ|と訓ませたものもあるが、助辭ぞ|の付く場合が多かつた。殊に、「なほぞある」から固定し

たなほざり|などを見ると、其關係が窺はれる。▼**来**　上の方は動詞、下は助動詞に用ゐた。

【口譯】　(一)泊瀬の國へ、求婚におれが來た時に、雪は空いつぱいに曇つて降つて來た。雨は、空が曇つて降つて來た。野に棲む雉子が、あたり響かして鳴き出したし、飼ひ鳥の鷄も鳴いてゐる。夜があけた、ほんに今夜は明けた。が、は入つて、ひと寢入りしようよ。この戸を御開けなさい。

(二)　泊瀬の路は、石を踏まねば行けぬ。その泊瀬の國に妻がをるので、石の上をば通るのだけれど、それに拘らず、おれはやつて來たことだ。

【言語】　(一)**○こもりくの泊瀬の國**　こもりく|のは、泊瀬の枕詞。泊瀬川流域の細長い河内を一つの地域と見做して、泊瀬の國と言つたのだ。古代の國の廣さは、おほよそ郡に對する考へに當る。或豪族が持つてゐるさうした土地は、くに|であつた。飛鳥・近江・藤原にかけて郡縣制度が確立して、小さな國が整理せられて郡となつた。併しながら、私には縣(アガタ)を稱してゐたものも多い。それでも古傳承によるところの歌詞(クタコトバ)では、國とも或は邑(ムラ)とも稱してゐた。だから、この泊瀬の國も、郡でも縣でも或は村でもない、曖昧な内容を持つてゐたのである。扨、それをこもりく|が修飾した理由は、泊瀬の國ぼめの詞である。國の形が山に圍まれてゐるのをよい地相と見て、讃へたのであらう。その上、こもる|といふ言葉に絡んだ聯想が働いてゐる。即、老い先長いと云つた讃美の意が見える。**○さよばひ**　さ|は最小美辭か、其外か訣らぬ接頭語。よばひ|はよばふ|の體言。名のり|の狀態から出た言葉で、高聲で相手の注意をひく事である。即、その魂を搖り動かす爲にし

たものだ。この言葉、後には民間語原が別の説明を作つてゐるが、唯、名のりと裏面になる言葉に過ぎない。後に引く大國主の歌にもある様に、つまゝぎと同義語の様に見えるが、これは家所を知つて、其處へ行つて名のること。彼は、探しに行くことである。**○たな曇り**　お列韻になると、とのぐもり・とのびくなど言ふ。又、たな知る・たな知れとあるから見れば、たなは全體・完全を意味する語根である。棚の宛て字に捉はれては悪い。**○さ曇り**　さは接頭語。内容に關係ない聲樂上の調和からかうした對句が出來、同じ理由で、接頭語さをつけたのである。**○ぬけり**　二つの句が同じぬで結ばれてゐるのは、對句としての效果はあるが、同時に均整を破つてぬ・けりとしたと見ても、一種の調和が出て來る。けりならば、降つた・降ることよなど譯すべきだ。**○降る**　降るは、古來降下する狀態か、降下してある狀態か、曖昧に用ゐられてゐる。明らかに降下を示す場合には、ながる・ながらふを以てしてゐる。譬へば、雪の場合ならば、降るは流らふと同じく下降を意味する場合と、地に積つてゐる様を主とする場合とある。だから、この言葉は、凡、氣分的な部分を多く含んでゐたものと見ねばならぬ。**○野つ鳥　家つ鳥**　此も類型を襲うた爲で、大國主命の沼河媛を訪うた時の歌と傳へるのも、やはり前型があつたのだ。必しも雉子を野鳥の代表としてゞはなく、偶然原歌にあつたものを襲いだゞけに過ぎないのだ。但、曉飛び立つものであるから、雉にしたのは、論がない。山つ鳥と言つてもよいところである。**○とよむ**　高い響きを立てること。振動すると譯してよい。かうした使ひ方は數多いが、多く自動四

段か他動下二段か、判斷がつかない。普通ならば下二段ととるべきだが、四段と見る方が古い發想であらう。「とよめ鳴く」の過程を含んで、自動のとよむになつて居るのだ。**○さ夜は明けこの夜は明けぬ**　謠ひ物としての様子を明らかに示してゐる。無内容の繰り返しで、自然或喜びの氣分を表したもの。この疊句が起させる氣分は——近代的かも知れぬが——切迫した焦慮を見せてゐる。「この夜」は、適切には譯出來ない。今の夜と言つた風に、目前の時をさして居るのだ。近代では、夜明けを遲く感じてゐる。中世迄は、眞のあかときは、一番鷄の鳴く時をさす。新撰字鏡にも、鷄鳴を丑刻としてゐる。雞鳴と同時に翌朝になると云ふことは、信仰に關係があつた。雞の聲と共に神があがり、祭りがすむのである。祭りの夜、神又は神に扮する神人が女と起き別れるのが此時刻で、後代迄も結婚以前の長期間此形をとつて、男が通つてゐたのである。**○且つ／＼**　全部でなく、一部分を表す。其が平安朝になると、半分といふ意に稍近づく。又、一方にといふ意味が出て來る。寢るべき時ではないが、と反省して、片方にかう思ふと云ふのだ。又、はつ・はつ／＼と共通する言葉を、氣分的に支へてゐる様だ。萬葉の用語例では、其點はつきりしない。此をあさと訓む時は、あさ—ぬと特別に言つたものと見なければならない。唯、いぬに對して、朝も愛人の所に寢てゐることをあさ—ねむと熟語に見なければ、不自然である。「しばし寢む」は、稍適切でない氣がする。此を語根から「しば寢む」の形があればよいが、其は考へられない。**(二)　○小國**　最小美辭から出た接頭語。**○つま**　配偶者。夫婦・愛人の片々から、いま一方をさ

す言葉。夫をも妻をも言ふ。**○石は踏めども**　ふむ。或物の上を足で通る義。近代の踏むより意味廣く、歩くの意を表す場合もある。今も方言には、は必要であり、其鑑賞にも微細な感覚が基礎になつてをらねばならない。**○なほぞ**　拘泥せず其儘に。即、直の義を持つてゐるのだ。にも拘らず、更になどの意も出て來る。これでよいのに其上にの意味もあつて、其から、此だけではもの足りない、といふ意を含んだ副詞にもなる。後の例だが、「天の下の色好みの歌にては（としては）、なほぞある（伊勢物語）」などある。

【鑑賞その他】　この歌の前型と見るべきものに、大國主ノ命が沼河媛に求婚（ヨバヒ）した時の歌、勾ノ大兄ノ皇子（安閑天皇）が大春日皇女（後、皇后）につまどひせられた時の御製と傳へられるものがある。その系統の歌の一變化で、この歌に和せた歌は、いま少し類型から離れてゐる様に見える。泊瀬の國を問題にしてゐる點は、泊瀬地方へ流れて行つて、其地に適切な形をとつたのか、或は雄略天皇が、第一講に言つた様に、をとめを訪はれた敍事詩の一つとして傳はつたものゝ斷片とも思はれる。民謡・藝謡としては、諸國に流布し、定住し、分化し、斷片化し、又或延長を加へて行くが、さうした傳播の外に、歴史的個性化が加はる場合も考へねばならない。大國主の婚姻に就いての敍事詩が、皇族の間に於ける恆久の様式として繰り返される様になつて、常に繰り返すうちに、その歌も或結婚の場合の創作の様に考へられる傾きを持つて來る。勾ノ大兄ノ皇子の歌も、大春日ノ皇女との結婚の儀禮の一部分としての舊傳承歌が用ゐられ、其が御製と考へられた

ものだ。其と同様に、さうした幾多の尊貴の婚姻が、みな此系統の歌を諷誦せられた事が考へられる。その一つの記憶の斷片が、泊瀬小國の歌となつたのである。かうした事情から、天子・皇后その他の御方の御事蹟と思はれるものが、考へ出されて來るのであつた。同じ巻の「こもりくの、泊瀬の川の上つ瀬に、齋杙をうち、下つ瀬に、眞杙をうち……」の如きは、輕皇太子の作と傳へられてゐる。其が本集には、民謡或は藝謡としての傳習の考へられる形で收められてゐる。此處にも、宮廷詩・民謡・藝謡の間の交互作用が窺はれる。普通の考へ方なる、宮廷のものとする傳へを先とする考へは、思ひ直さねばならぬ。

この反歌は、長歌が獨立して久しく行はれた後に、時代聲樂の要求から他の類型を迎つて、自然に附加して來たものと思はれる。この短歌の如きは殊に類型的で、更に新しく踏襲した作物を限りなく隨伴してゐるのだ。

以上(三)乞食者詠と(四)隱口長反歌は、改造社「短歌講座」第五巻執筆のまゝ——編者

（五）

藤原ノ宮ニ御宇天皇代　高天原廣野姫ノ天皇

皇子尊ノ宮ノ舍人等慟傷作歌　二十三首（巻二）

此巻の時代わけで、藤原宮御宇天皇代とあるのは、巻一よりは、稍不正確になつて、即持統・文

武兩天皇の代に亙つてゐる。註に、高天原廣野姫天皇とあるのは持統天皇のことで、例の追記である。持統天皇の時に、皇子尊（ミコノミコト）と稱せられた方は二方あつて、前の方は草壁ノ皇子、後の方は高市ノ皇子であつた。草壁ノ皇子はなくなられて後、尊んで日雙斯（ヒナメシ）と諡せられた。或は日竝知、略して日竝とも書いて居る。皆「ひなめし」である。しるの語尾を漢字同様に見て、しだけを訓ませる爲に、「知」の字を宛てたのだ。（前の續きと言ふのので、日竝知皇子尊と書くべき所を、省いたのであらう。尤、此あたりの歌の記錄の出來た頃、「後ノ皇子尊」なる高市皇子に對して、かう申すだけで疑ひを生じることもなかつたので、旁略してあつたのかも知れぬ。原文獻のまゝの書き方と見る方がよからう。）

皇子尊は、大體、皇太子に當る。日雙斯皇子尊は、皇子にして天皇に代つて政治をとられた、攝政でおありになつた。日本の昔は、皇太子を御決めになる必要はなく、「ひつぎのみこ」と稱する御子が數人おいでになつて、次代の天子たる資格を持つてゐられた。其が更に、女帝の在世中、攝政をなさる方を皇子尊と言ふ樣になつたらしい。此方が自然、皇太子の樣に見られて來る。遂には、皇太子草壁皇子尊薨（持統紀）と言ふ風にも記された。「みこのみこと」なる語は、「皇子（ミコ）」にして、「みこともち」なる方の義で——總論の中、みこともち參照——天子の御代理を行はれる皇子卽、攝政と言ふ稱へに當るのである。

皇子尊二方は、皇子の儘おかくれになつた。草壁皇子は、皇子尊として、殆、天子同樣政に攝つ

て居られた爲に、崗宮御宇天皇と申す御諡は、公式の宣命にすら用ゐられてゐる。（皇子尊　古代にも、此御稱號なく、後代にも絶えてゐる。凡飛鳥朝の頃、外來文化の盛んに這入つて來た頃、之に對して敏く日本語による表現の意欲が動き出して、新しい語が現れ、古語が復活せられた。皇子方の中のある方を、皇子ノ尊と稱へる宮廷風のはじまつたのも、皇子の中で特に貴い方と言ふ事ではなかつた。又、皇太子に恰もお當りにならせられて居ても、語自身は、皇太子の日本武尊樣と申すことは出來ぬ。皇太子が、卽攝政の任にお當りなされる時に、讃へ申した稱へと言へば當る。此事も古く書いて置いたが、今では少し意見に動搖が出來たから、簡單に記して置く。天皇を「すめらみこと」と申すことは、「すめら——極めて尊き——みこともち」の御義で、習慣として、みこともちは、特殊な場合の外は、みことと略稱して敬稱とすることになつて居た。普通みこともちで通るのは、宰・大夫などの字を宛てゝ訓ましてゐる。天皇の御詔（ミコト）を「傳達（モツ）」ことをする者の意義において、宮廷から命じ遣された執行官の事である。其が通用することになつてからは、高い意味のみこともち、宮廷の御代役として命を傳へ給ふ方又は、其義から出た地位の高い人々の敬稱に用ゐたみこともちは、皆凡別にみことと言ふ風が生じた。神代・古代の神々、貴人の名の語尾は皆其である。天の下中で、最尊い「みこともち」をなさる御方は、天皇でいらせられた。卽、天つ神の命を傳達して、此天の下に布かれるのだから。其で顯貴の神聖を示す爲の、「すめらみこともち」なる讃辭「すめらみこと」と申すことになつた。後代には、中宮と申

してゐる御稱へは、飛鳥・近江・藤原時代には、「中つすめらみこと」であつた。萬葉集に、中皇命と書き、又記錄・文獻には、中天皇とも記し奉つてゐる。絶對に尊い御方に竝ばせられて、又天つ神との中間に在して「みこともた」せ給ふからの義として、「中つすめらみこと」と申したのであつた。其頃、又皇太子として、女帝の御代に攝政遊ばす御方を、同じ意想を辿つて、「みこのみこともち」卽、「みこのみこと」と申すことが行はれ出したのである。

持統天皇の御代に攝政の御務めに當らせられたから、草壁皇子を皇子尊と申し、薨じて後、高市皇子を又、皇子尊と申したのである。前皇子尊は特に、日竝知皇子尊と言ふ日本宮廷風の新しい發想法によつた御名を諡られたのである。

此皇子尊は、文武天皇の御父に當らせられ、奈良朝第一代女帝の夫の君で在したので、奈良平安初期にも、高く御とり扱ひ遊ばされて居た。此皇子に關した傳說の歌の多いのも、理由のある事である。

（舍人　諸國の舊豪族――後に郡領階級――の子弟が召されて宮廷に仕へる。其中員數の剩るのは、初めから見越されてゐるので、宮廷に直屬して、聖躬に仕へる舍人の外は、――帳內・資人などゝ字は書くが、等しくとねりと總稱して――皇族又は貴族に事へしめられた。こゝの舍人は、帳內舍人である。）

大和中央平野の東南の隅にある丘陵が、飛鳥の岡で、此岡の下にある御殿を飛鳥ノ岡本宮と言ふ。

飛鳥時代には飛鳥のあちこちに宮があつた。日雙斯皇子尊の居られたのは島の宮で、飛鳥川の流れを利用した宮殿であつたところから、島の宮と言ひ、蘇我氏の舊邸宅の跡を、蘇我氏沒落の後に宮殿としたものであつた。蘇我馬子を島大臣と言うて居る。「しま」は、水を利用した處で、水を主としないものは、山齋と言うてゐる。何故、持統天皇が兩皇子尊が薨ぜられるまでも、久しい間、十一年もの間、位に居られたのかには、信仰上の理由があつたのである。皇太子は天子の御資格の御身に顯れるまで待つて居られたのである。

日竝知ノ皇子ノ尊の宮の舍人等の、慟傷して作つた歌。　二十三首

高光る　我が日の皇子の、萬代に國知らさまし島の宮はも

高光　我日皇子乃、萬代爾國所知麻之島宮婆毛　（一七一）

【音訓】 ▼**高光**　たかひかる。又「高照・高暉」とも書いてゐる。互にたかてらす又はたかひかると訓める訣である。姑く、たかひかると訓むことに定める。▼**我日皇子**　わがひのみこ。此處もあがと訓むべき明證がないから、通例に從つてわがと訓む。之・乃をさし插んでゐる例も多く、又同時代の文獻にもひのみこと訓むべきものがあるから、問題はない。▼**所知**　しろす。同じ時代にも、しらす・しろす兩用したことゝ思はれる。其うち、稍後者が古い。この歌などは、新しい氣持ちを持つてゐるから、しらすの方に從つておく。所は使役にも敬語にも、受け身にも使つてゐる。其習慣から、更に、所を單なるら又はるの假名に使つた例

もある。此處などは正確な使ひ方で、しらさと活用させてゐる。舊訓しられましと云ふなどは、時代文法からは不都合だが、訓む理由はある。▼**婆毛**　はも。異本類に波毛と書いたのも多いが、其に改める必要はない。外にも類例があり、その上、大體にば の假名ではあるが、清濁混合してゐる本集のことだから、さし支へない。

【口譯】　わたしの仕へる日の神の皇子樣が、いらつしやつたとしたら、こゝで萬年まで國をお治めになる筈だつたところの、島の宮はよ。

【言語】　**○高光る**　日の枕詞。類型を襲うた言葉と見えて、殆、すべてひのみこに續いた形で、ひのみかどと云ふのが例外の樣にあるだけだ。（**高光　高照**　二つ乍らたかひかる。記・紀によ る。日の枕詞。高く光つてる義である。日の讃美から日に續いたと見えるが、其には今すこし細やかな過程がある。日と言つても、「日の神」神聖なる神の義に多く考へて、かけて行つたらしい。萬葉に現存してゐる歌では、「日のみこ」に固定しようとする傾向が見えるが、尙「日のみかど」と宮廷の讃美にかゝつた例がある。雄略記には「日の宮びと」にかけたのもある。萬葉だけで見れば、後代ほど、顯貴の德を讃へる爲に、莊重な「たかひかる」を「日のみこ」の枕詞とする樣に傾いた事が察しられる。）**○我が日の皇子**　わたしの・うちのなど譯すべき言葉だが、わがせと云ふ形を參考すると、尊い方なるが故にわがみこと言ひ、又わがひのみこと、せよりも重い言葉に替へた形と考へつく。ひのみこ。歷代天皇を、日の神の皇孫と考へると同時に、日の

神直接の皇子とも信じた。日神の命を傳達傳へて、此國につぎ〳〵に現れる御方と考へたので、神道信仰の核心をなしてゐる。總て天子を示す言葉で、皇子を指すことはない。皇太子にすらも云はない。こゝに用ゐたのは、前に述べた通り、天子御同列に考へられた方だから、主として信仰の上から云つたのだ。（**我日皇子**　「わが」と申すのは、恐らく壽詞の舊風で、天皇に向ひ奉り、畏んでお呼びかけ申す形をとつたからで、單なる親しみの表現と思ふのでは足らない。**日皇子**　日之皇子・日之御子とも記す。天皇を申しあげる。但、稀に皇族の中極めて顯貴な御方をさして申した例もある。卽、此日竝知皇子尊、又此卷置始東人の歌に、弓削皇子の薨じた時「高光日之皇子」同じく人麻呂作卷三、新田部皇子八釣宮におはした時の歌に「高輝日之皇子」と言ふ風に用ゐてゐる。後々はさうした利用も出來たと說明出來るが、其根據は誤用ではなかつた。尊貴にして、天皇に代り奉つて、まつりごち給ふと言ふ樣な嚴肅感に充ちた時は、皇子をも直に「日のみこ」と申しあげたのである。古事記にも宮簀媛の歌に倭建命に「たかひかるひのみこ。やすみしわがおほきみ」とよびかけ申して居る。倭建命は、常陸風土記には倭武天皇とあるやうに、皇子の中にも殊に尊くいらつしやつた上に、天業を攝り行はれた所があつたから、かうした一つ表現をなし申しあげたのである。だが正式には何としても、天皇の御事である。弓削・新田部兩皇子をさう歌に申しあげたのも、歷史上又御系譜上に現れたやうに親王中とりわけ顯貴でおありなされたから、かうした詞章の歷史を踏まへて幾分强調して申しあげたのだと言ふべきである。日

竝知皇子尊は、後に岡宮天皇とも追謚申されたほど尊い御方であり、御在世中から皇子尊と尊敬せられたほどの御方だから、殆「日のみこ」と申して、申し過ぎる感じがしなかつたであらう。「日のみこ」は、「神聖なる神の御子」の義で、日の神のお代りとして此世界に臨ませられる方の義であつた。だから正確には、天皇を、祖宗に對して、申しあげる御稱へなのである。みことあ る爲に、今も相當な學者が誤つてゐることが多い。決して「ひつぎのみこ」と同意には用ゐ申さぬのである。唯、長い民族の詞章諷誦の歴史の間に、前に言つたやうに天神の御心を擴行遊す方を、深く讃へて申した例もある訣である。申さば、「日の神のみ子」の義で、代々此世界に御降りになる方として申すのである。）**○よ**　多く代・世などの字に囚はれて考へるが、時間の一區域を意味するのだから、一年でも一生・年齢にもいふ。又、漠然と年月をさす場合がある。**○に**　副詞の指辭だから、特別ににと譯すに及ばない。**○知らす**　知るの敬相。しるは、聞く・見るが、感覺から領有の意義を持つ場合がある如く、此はしるの內容を延長して、占有する・支配する意に用ゐた。唯、うしはくと對照的に考へ過ぎるのは悪い。ともかく、明淨な感じを與へる言葉だつたに違ひない。**○まし**　現實と反對な事を想像する助動詞。としたら……であつたらうにと云つた風に、必、空想的な條件を前提に含む言葉。律文では早く其條件を振り落して來てゐるけれども、散文式な文章には、「……ませば……まし」・「……ましかば……まし」・「（動詞第二變化）せば……まし」と云つた形を殘すのを正確としてゐるものが多い。但、ませば・ましかばに、時間

的區別があると考へるのは誤りだ。ませば・ましかば兩方とも、であらうならばと云つた將然的な意味を持つたものはなく、所謂已然的なもので、としたら・であつたならばと云ふ風に、過去と現實との對象を作ることに決つてゐる。この歌などは、生きて居られようならば、と今人は譯すところだが、古人の觀念では、現實に對して死の時を過去に据ゑてゐるのである。このましも、未來永遠に……だらうでなく、寧、「萬代に」が輕く插入せられたと見る方が、古風の文法である。このましの職能は、所謂連體風の發想で、島の宮に對して、上の句を修飾語にする形である。「であつたらうところの」である。（○後世よりも、目につくのは連體形のまし（終止のましも勿論使はれてゐる。）が、有力に働いてゐることだ。「……此間もあらまし柘（ツミ）の枝はも」（卷三）などの類だ。今で謂へば、「國知らさまくあるべき島の宮」と言ふ風に續く形である。其と同時に、まし一語に暗示せられてゐるのは、上に、「高光るわがみこのいましせば、わが日のみ子のよろづよに國しらさまし島の宮はも」と言ふ重複した表現になるのを避けたことである。だから、「高光るわが日のみこのいましせば、國しらさまし島の宮はも」となる方向を持つて居た歌だといふことが出來る。さうすると、第三首の歌にも似て來る。）**○島の宮**　日竝知ノ皇子ノ尊の條に書いたが、其位置は、今存する地名に信賴出來るならば、高市郡高市村岡の南に接した島の庄の地で、飛鳥川に臨んだ處であらう。尙、橘の島の宮と言ひ、「橘の島にしをれば」（卷七）など云ふのから見れば、對岸の橘にも接して居た處であらう。（○地名は移るのが普通だから、必しも、

そこと定めることは出來ぬが、「橘の島の宮」とあるのから思へば、さのみ現在の島の庄から遠い處とも思はれない。）○はも　はは格の助辭ではなく、感動の語尾だ。此が分化して、主格のはになつたのだ。更に感動のもと重つて、深い感動を現す。口譯すれば、はよ或は、はいである。

【鑑賞その他】　以下二十三首は、統一のない様で、大體組織立つてゐる。この一首は、まづ概括したものである。後代の文學の見地から見ると、感傷に過ぎないで、大まかに悲しんだところを褒むべきである。

この二十三首は、恐らく一人々々或は數人の舍人が作つたのではなく、或一人の代作者のものと見るのが適當らしい（總論參照）。この直前の同皇子の殯宮の時の柿本人麻呂作と同じく、是亦、人麻呂の物と考へてよからう。唯、彼は殯宮で宮人（舍人以上の人達を含む）等のうたふ爲の代作であるのに對して、此は墓所に於いて、舍人のうたふ料としての代作と見るべきで、二つながら人麻呂自身の感情を直接に現したものでない。從つて、人麻呂は草壁皇子の宮人・舍人でもなく、同様に高市皇子の殯宮の歌（殊にその反歌）によつて、高市皇子の舍人と定めることの謂の無いことも訣る。

（▼人麻呂調の歌とても、萬葉當時、幾人も同じ意想・似た感激・傳來の詞使ひをする者があつたことだらうから、結局今日は、人麻呂らしいと言ふ程度ほか、斷言出來ない。最近には、友人齋藤茂吉さんなども同じ意見で、其大著「柿本人麻呂」の最後に此歌々と、藤原奠都の際の長歌

とを添へて、解釋を加へられた。誠に穩當な企てゞあるし、私自身もみかたを得た氣がする。）

島の宮。上の池なる放ち鳥。荒びな行きそ。君まさずとも
島宮。上池有放鳥。荒備勿行。君不座十方　（一七二）

【音訓】　▼**上池**　神田本其他に池上となつてゐる。さすれば池の上であるが、上の池の方が良からう。直前の殯宮の歌の反歌に、島宮勾乃池之放鳥とあるのを見れば、尚問題がありさうだ。▼**不座**　いまさずでもよいが、かうした細部になると、當時の人の訓むに委せた後が見えるのである。▼**十方**　方は元來面である。その意味から方の字を宛てゝ、四方（ヨモ）・八方（ヤモ）・宮舍人方（モ）など、もの假名にしたのである。

【口譯】　島の宮のその傍の池にゐる放ち鳥よ。段々荒んで來な。たとひあの方が、いらつしやらないとしても。

【言語】　（○**島宮**　舊拙著「萬葉集辭典」は、改修を要する所は多いが、此部分はさのみ間違つて居なかつたと思ふ。參照を乞ふ。尚、阪口保氏「萬葉集地理辭典」奈良縣も御覽を願ふ。地圖すら持參しなかつた山の中での起稿だから、誤りを書きさうな所は避けたい。日本造庭術の歷史から注意すべき宮であつたらしい。此外にもあつたかも知れぬが、まづこゝが最初に庭に川水を利用して大がゝりに池を周らした「島」を造つた所らしい。「東のたぎの御門」とあるから思へば、東方から水を引いて宮地に落し、その取り入れ口に東門があつたのだらう。此が後代の東中門を

暗示するものと思ふ。此水は飛鳥川の水とするよりは、他の山川などゝ見る方が當つてゐるかも知れぬ。）**○上の池**　上は上方の意義にも、近邊の意義にも用ゐてゐる。こゝは後者である。此歌、島の宮の中の池と見る方が適切らしいから、池の上なる説も成り立つのだが、さうまで纖細に歌つたと見ない方がよい。（**○うへ**は、ほとり・あたり・そばであるが、今よりはもつと漠とした用法だから、島の宮の中の池のことも、島の宮の上の池と言つて不都合はない。但、恐らく島の宮の勾配の上部にあつたとは考へられない。）**○放ち鳥**　放ち飼ひにした鳥。だが、單に苑囿の觀賞物として飼ひ始めたのではないが、此頃は既にさうした意味も持つて來たであらう。鑑賞の條に詳しく述べるが、かうした鳥は、優れた靈魂を貴人に附著せしめる爲に飼つてゐたのである。**○荒びな行きそ**　にぎぶの對稱。人馴れせなくなるの義で、放ち鳥が荒まない間は、主人の魂も靜穩なのである。此鳥が野性を出すにつれて、人から魂が去る不安を感じてゐるのである。（**○荒備勿行**　鳥がすさんで野性を持つて來ることを嫌つたのである。こゝは寧「すさびなゆきそ」と訓む方が適してゐるかも知れない。把持してゐる靈魂の游離することが、すさぶ或は熟語としては、――さび・――さぶと言ふ形を採る。こゝは鳥が君の御魂を放散させてしまふ事に當る。あらびと訓んでも、細やかさはなくなるが、大體その意味にはなる。）**○とも**　假定の條件句を作る語。いらつしやらないとしても・いらつしやらなからうともなど譯するのが、本道だが、決定的な條件句を作るまさねどもと同じ用語例に用ゐる例は澤山ある。さうした場合は、多く此に應ず

る文句が想像で終つてゐる時で、條件を整頓する爲に無意識の文法觀念が、前提を動かしてともとするのだ。「さゝなみの　志賀の大灣淀むとも、昔の人に　またもあはめやも」（卷一）の類、次いでは、禁止の語が條件文に這入つてゐる場合、前提があれば、假定の形をとる。禁止は現狀を禁ずるのでなく、今より後の延長を止めるのだからである。（**○君不座十方**　文學としての一段階を上つてゐるのだから、鳥が荒びると御魂が失せるといふ舊信仰から、飛躍して新しい趣向らしいものゝ立つて來てゐることが見える。）

【鑑賞その他】　神代記に言代主が、美保の崎に鳥の遊遊をしたことが見えてゐる。あそびは元より鎭魂舞踊である。鳥に依つて身に靈力を邀へようとしたのである。水鳥殊に白鳥は靈魂をもち運ぶものとも、靈魂そのものゝ化顯だとも信じてゐたのだ。殊に出雲人は白鳥の玩物或は白鳥の生調（神賀詞）など唱へて、鳥を媒介として靈魂を附著させようとした。更に鵠（白鳥）の聲を聞いて物言ふ魂が這入つたこと（垂仁紀）、死んだ場合に靈魂が白鳥の形をとつて飛散した例（景行紀）など多くある。水鳥を見、又は身に觸れることによつて、常に新な威力を生ずるものとし、又死んだ場合には、其死の決定する期間、魂の鳥を飼つて、それに死者の魂を保留させようとする咒術があつたのだ、こゝの放ち鳥は、平常の玩物から、凶時鎭魂へ延長して用ゐられて居つたものなることは明らかである。「荒びな行きそ」と云つたのは、その靈魂が次第に鳥の身をすら離れて行かうとしたのを怖れたのである。これも、皇子尊鍾愛の鳥が、荒びて行くのを見て、鳥の

感情に同化して、自分の淋しさを表したものと見るのは、後世風である。

（放鳥　舊拙著「古代研究」に稍細かに述べた。今も其部分は改める必要を感じて居ない。御覽を願ふ。苑囿に鳥獸を養ふのは、支那宮廷の風である。其先進文化模倣の激しくならうとした時代の飛鳥の地である。さうした設けのあつたのは當然である。たゞ鳥を飼ふ風は、支那の風を移すより前からあつて、其と合成したものと思はれる。此は此舍人の歌では、大切な點だから、一言した。仁德天皇・武內宿禰の雁の卵問答の御製及び歌に關する物語が、記紀に大同小異の傳へを殘してゐる。常世の鳥なる雁についての奇蹟が、宮廷の行事として傳へられ、雁の卵でないものを雁に抱かして雁と稱し、天皇・皇親の御壽を賀したものと思はれる。平安の宮廷でも、鴨の類の卵をかりのこと言つて居た。鵠・雁・鴨その他の水鳥を飼うて顯貴の威靈を保持せしめると共に、其等に所謂かりのこを孵化せしめてゐたものと察せられる。其等の大鳥は、古代日本民族の信じてゐた人の靈魂を持ちはこぶ鳥だから、常は固より不豫の際には、とりわけ大切に飼つて顯貴の御魂を保たしめようとしたのである。「一五三」の御歌でも、天皇御大事に當つて、宮廷において、水鳥の行動に敏感にならせられた樣子が見える。「かりのこ」は、卵と見ずとも、既に孵化したものとしてもよい。さすれば、野鴨の類の雜種で、此も平安朝文獻に見える。）

高光る　わが日の皇子の　坐しせば、島の御門は、荒れざらましを

高光　吾日皇子乃　伊座世者、島御門者、不荒有益乎　（一七三）

【音訓】　▼**益乎**　ましを。舊本蓋。古本多く益になつてゐる。

【口譯】　こんなに、島の御所が荒れてゐる。私の仕へる日の神の皇子樣が、今もいらつしやつたとしたら、この島の御門は荒れずにあつたらうものを。……それに……。

【言語】　**○いましせば**　ませば・ましかばよりも強い條件を作る樣である。第二變化を受ける。此も下にましを伴ふものが多いが、時としては、ましを過程のうちに含めて、文章には表さないこともある。**○島の御門**　みかどは門の敬語、第一義。第二義では御門を代表とする住居、卽宮殿。殊に宮廷。第三義、おほやしまを主上のいらつしやる宮廷そのものと見て、其儘みかどと言ふ。本朝などいふ字があたる。その意味から異譯すれば、版圖。この第三義に第一義の反省の加はつたものに、「遠の御門」がある。宮廷の版圖で、而も遠方の入り口と云ふ意義だ。第四義、御門の主たる御方、卽、天皇。但、この用語例は、萬葉集では、これに傾いた一例のある外、まだ出て來ない。

【鑑賞その他】　この二十三首の歌、此より後の分は、なるべく要點だけを言つてゆきたい。この歌、ましの用法が、讀者の生活にはひる程になつてをらなければ、單調・無意味の樣に考へられる歌。他の要素は、總てましによつて整頓せられたものである。

外(ヨソ)に見し檀(マユミ)の岡も、君坐せば、常(トコ)つ御門と侍宿(トノヰ)するかも

外爾見之　檀乃岡毛、君座者、常都御門跡　侍宿爲鴨　（一七四）

【音訓】 ▼**外**　よそ。ほか・そと〻訓めない、多くの例がある。▼**君座者**　きみませば。此處は、或はいませばと古人も訓んでゐたかと思はれる程、ませばよりも效果がある。▼**侍宿**　とのゐ。他に訓み方があるかも知れぬが、まづ此でよからう。意を持つて書いてゐる。

【口譯】　何の縁もないものと見てをつた、檀のこの岡も、あの方が御いでになることになつたので、その永遠の宮廷と思うて、御伽ぎをしてゐることよ。

【言語】　**○外に**　脇から、脇のものとしてなどが當る。**○檀の岡**　高市郡坂合村眞弓の地。檜隈から北へ亙つてゐる檜隈の岡の一部。その佐太の地についた部分が、後に出る佐太の岡で、眞弓によつた方が檀の岡である。此邊、飛鳥宮の最廣かつた時代の西方の極限。**○常つ御門**　永久の宮廷。即絶對の讃美(ホメ)詞である。其を轉用して、永久に鎭座ますべき御墓山をさう見立てたのだ。墓讃美の一つ。**○とのゐ**　ゐるは、其用語例のうちに、寢ないで居ることを言うてゐる。殿で起きてゐることだ。恰、宿直にあたるのだ。**○かも**　か・も。感動の助辭を重ねたのだ。かがなと續いたのがかなで、意味は殆、同じである。唯、本集にはまだ發達してゐない。但、かなは感動ばかりであるに拘らず、かもには疑問の用語例もある。かゞ感動から疑問に移るからである。抵、その場合には、條件文の前提に位置をとる。

【鑑賞その他】　近代の人は、此を見て、直に墓に對して悲しみを述べてゐると感じるであらうが、出來た當時は、表面は何處までも宮ぼめの形である、それに、仄かに現實の悲しみを感じさせる程度に止めてゐた。屋敷ぼめは、同時に土地ぼめである。死人の居所なる塚山を一種の屋敷と見て、其を讃へる形で、墓の永久であるやう、墓主の魂が游離せぬやうにしたのである。尙、後に言ふ機會がある。

夢にだに見ざりしものを。鬱悒(オホ)しく宮出もするか。佐日の隈回(クマミ)を

夢爾谷不見在之物乎。鬱悒宮出毛爲鹿。作日之隅回乎　（一七五）

【音訓】 ▼**鬱悒**　此に久(ク)を添へたのもあり、更に鬱一字に之苦(シク)を加へたのもあるから、大體しく活形容詞に訓むのであらう。而も外に同義の用語例に、おほゝしく・おほゝしきが多いから、此もかう訓んでよい。唯二つのほは總てが清音か、總てが濁音か、或はおぼゝしと上を濁るか、其判斷は出來ない。私は、おぼつかなし・おぼろなど云ふ例が、總てのおほ系統の語のうち、これに近いから、其意識が、其發音を限定してゐたゞらうと考へて、おぼゝしを採つてゐる。▼**宮出**　此は宮いでよりも宮での方がよい。▼**佐日之隅回乎**　日は田の誤りとしてさだと訓むのもあるが、此儘でよからう。隅回　隅は隈に作つた古本もあるし、さうでなくても、此字自身くまである。▼**同**　萬葉に於ける總て此系統の同・廻・曲などをわと訓む舊來の說に對して、みと訓むと、まと訓むと二通りの說がある。三つの中みが最榮えてゐる。が、まを否定出來ない材料もある。尙、同類の用語例にみを證するものがあるとしても、其が周邊・含蓄を示す總ての曲・同・廻を限

定することが出來るかは問題だ。だから逆に廻・曲をみと訓まなければならない證據の擧つてくるのを待つ。

【口譯】 正氣では勿論、これまで夢の上ですら見なかつたものよ。それに、ぼうとして御所下りをして來ることよ。檜隈の岡の邊をよ。

【言語】 ○**見ざりしものを** 普通漠然と、かうした狀態を空想にも夢にも浮べなかつたと考へるだらうが、此歌の上では、檜隈の岡の附近の樣子を見なかつたといふので、もつと實際的に、夢想にも現れなかつたと云ふことに取るべきだ。○**鬱悒しく** 見當が立たないと云ふのが意義の中心だらう。或は、ぼんやりと・いゝかげんになどゝ云ふ風に延長した場合もある。其上に、此語と同類語のいぶかしに近づいて、憂鬱なといふ意義に於ての、ぼんやりとと譯さなければならぬ場合もある。言語は意義が、常に動搖してゐるものだから、こゝなども、それらを併せ思ふ必要がある。○**するか** かは、感動だが、幾分反省の意を含んでゐる。○**佐日の隈囘を** これも此歌一つとしては、餘りに突如とした新表現と見られよう。その爲さだと訓む說が出たのだ。だが、これは類型のある語に違ひない。時代の前後は知れないが、本集に「さひの隈 檜隈川に駒とめて」とあるのを見ると、檜隈の疊語式枕詞である。此風のものは枕詞が、卽、實際語となる。み吉野・ま熊野の例があるから、佐日の隈を、直に檜隈のことゝしたのだ。そして更に、其地名を丘陵の側にある爲に隈なる地形語が附いたものと感じて、直に檜隈の岡隈と云つた感じを、この語に表したものと思はれる。○**囘** 此がみであつても或は、び・まにしても、その周邊・含蓄を

示すことに變りはない、口譯する場合は、なるべくは「檜隈の隈を」と譯して、漠然と語以外にその周りを思はせた方がよい。

【鑑賞その他】 當代としては、此一聯に現れたおぼゝしくほど、新鮮で詩語らしい感じを持つたものは無い樣である。此歌、宮殿の宿直勤めての翌朝の退出の經驗を、現在の狀態と比較する氣が起つたのだ。此歌でも讀者は強く、古代人の墓と家とを同視した信仰を心に持つてかゝらねばならない。

○此から下は、一部分宛一括して說いて行く。其が作者の氣持ちを順調に傳へる方便でもあり、既にある目當ての御つきになつた方々にも 好都合であるからでもある。

天地と共に完(ヲ)へむと思ひつゝ 仕へまつりし情(コヽロ) 違(タガ)ひぬ
天地與共將終登念乍 奉仕之情 違奴 （一七六）

朝日照る 佐太の岡邊(ビ)に群れゐつゝ、我が哭(ナ)く涙 やむ時もなし
朝日乍流 佐太乃岡邊爾羣居乍、吾等哭涙 息時毛無 （一七七）

御立たしの島を見るとき、行潦(ニハタヅミ)ながるゝ涙 とめぞかねつる
御立爲之島乎見時、庭多泉流涙 止曾金鶴 （一七八）

橋の島の宮には飽かねかも、佐田の岡邊(ビ)に 侍宿(トノヰ)しに行く

橘之島宮爾者不飽鴨、佐田乃岡邊爾　侍宿爲爾往　（一七九）

御立たしの島をも　家と住む鳥も、荒びな行きそ。年かはるまで

御立爲之島乎母　家跡住鳥毛、荒備勿行。年替左右　（一八〇）

御立たしの島の荒巌（アリソ）を　今日見れば、生ひざりし草　生ひにけるかも

御立爲之島之荒磯乎　今見者、不生有之草　生爾來鴨　（一八一）

【音訓】㈠▼乍　つゝと訓む例が極めて多い。却つて、此をながらと訓んだ例がない。㈡▼岡邊　をかび。をかべでもよいが、古風にびと訓みたいと思ふ。▼吾等　わが。侍宿同樣、わがが舍人達の一人稱だから等を入れたのだ。用字の上に、漢文學的の意識の働いてゐる點を注意せねばならぬ。㈢▼御立爲之　みたゝしの。みたゝしゝと訓むのは悪い。舊訓みたちせし。寧、その方がよいくらゐだ。動詞或は動詞句に、名詞の接頭語なるみをつける例がない（三矢重松先生說）から、此四字のうち一部分を名詞として、殘りを動詞なり所有格の助辭なりに訓むがよからう。御立爲を名詞と見てみたゝし。之を助辭と見てのと私は訓む。尙、みたちせしと訓むならば、寧みたちしゝとする方が本格であらう。▼庭多泉　にはたづみ。にはたづみに宛てた本集の假名のうち、他は正確に訓める樣に書いてあるが、此は用字の上に合理化をして、泉の字を宛てゝ、如何にも語原めかしく書いたのだ。㈣▼不飽鴨　あかねかも。あかぬかもと訓めぬこともないが、文意からすれば、前の方がよい。㈤▼左右　まで。兩手を以てする時に、までと言ふ。左右・左右手・二手・諸手、と云ふ風に宛てゝゐる。㈥▼荒磯　ありそ。あらいその融合。當時の音聲學の知識を以て、かう讀ました事は察してよい。▼今　けふ。今日の略劃。いまと訓む場合も多いが、此處は其によらないものと見てよい。

【口譯】㈠　天地と共に、完全に續けてゆかうと、これまで思ひ〳〵して御仕へ申し上げてゐた自分の心が、はづれて了つた。

㈡　結構な佐田の岡に群（タム）つて居り〳〵して、わたしどもの泣く淚、それがやまる時もない。

㈢　御立ち場所の池の築山を見てゐる時、その池水ではないが、一時（イツトキ）の水溜りのそれの如く、流れて來る淚を、とめきれないでゐることよ。

㈣　一體わたしは、この橘の傍の島の宮では滿足出來なくなつたからか、それで佐田の岡のとこ ろへ、夜伽ぎに行くのだらうか。

㈤　御立ち場所の島、それをよ、家と感じて住んでゐる汝、鳥等も、段々荒んでゆくな。年が替るまでのあひだ。

㈥　御立ち場所の池の築山の荒い巖石を、今日氣がついて見るといふと、今迄生えたことのなかつた草が、生えてゐることよ。

【言語】㈠　**○天地と共に**　この言葉は、皇祖の咒詞以來のめでたい類型句で、此處にも其をとりこんだのである。だから、勢ひともの用語例も、本集時代よりは古い。このともには、と其儘・の如く、の義が含まれてゐるのだ。だから、一方、「卯の花のともにや來（コ）し」（卷第八・一四七二）と言つた用法すらあるのだ。**○完へむ**　完了する。圓滿に終結するの義だが、尙古くは終るの意でなく、唯完成するだけにも使つてゐる。此處は、其つもりの古用例から當代風になつて居たもの

と見るべきだらう。**○情違ふ**　それる。脇へゆく・思ひがけない結果になる。此處では、豫期した心にそれる意だ。ぬ　現在完了の助動詞。意義の上で終結に達した事象を、感情の上で、前からの連續を考へて表す場合に使ふ。だから、たにもてるにも當る。卽、現在完了の外に、現在存續態をも兼ねる訣だ。

(二)　**○朝日照る**　此も屋敷ぼめの詞で、南向きに位置を占めて、朝は朝日を受け、晝は南日をあび、昏れには西日にあたる、さうした高處に家造りするのが理想であり、咒詞の慣用修辭法であつた。其が、塚山のたゝへごとに多く用ゐられて、後世まで影響を殘した。寶埋藏傳說を伴ふ塚には、殆例外なく、「朝日さす夕日輝く」の句を据ゑてゐる。一例、「朝日さす夕日輝く木の下に、漆千ばい、朱千ばい」。だから、此言葉は歌の内容には關係ない、外形だけの讃め詞である。口譯には譯せずともよい。**○岡邊**　び・べなどは、邊（ホト）りといふより、……の處、と譯した方が適切だ。外廻りでなく、其物を中心として擴つた範圍を述べるのだ。**○やむ時もなし**　やむ時なけむと同じ樣にとれるが、實は現在の反省で、まだ今もやまないと云つた言ひ方なのだ。

(三)　**○御立たしの**　音訓參照。たゝす。敬語。たゝしに敬語みのついたもの。始終立つてみそなはす場所に島を用ゐたのだらう。この御立たしには、古代政治上、何かの意味があつたらしく思はれる。單に、庭を眺められた場處ではなからう。若し、みたちしゝが成り立つとすれば、やすみしゝと同じ組織の言葉である。みたちなる名詞に、せすを意味する敬語々尾、卽「爲（シ）なさる」

をつけたもので、後代の文法では、やすみせす・やすみさす或はやすみしすと云ふべき場合を、固定した句に爲立てる爲に、名詞感覺を與へるしの活用で固定したものである。さすれば、みたゝしゝは、御立ちなさるところの——島といふことになる。**○島**　草壁ノ皇子ノ尊の末段參照。**○行潦**　枕詞。多くは「流る」にかゝる。通常、雨の爲に急に出來る水溜りのことゝしてゐる。其には、には（ニハ）を「俄か」に聯想するのと、廣場（ニハ）に聯想するのと二通りあるのだ。その他、つみに就いても、泉の略とするものと、みを水と觀じるものとある。果して、さうした水溜りを言ふかどうかも疑問である。恐らく、今日では訣らなくなつたものであらう。豪雨とか夕立とか言つたものであるかも知れない。流るは雪・雨などの降る事でもあるから。**○かぬ**　……難くする。……敢（カ）てずなどの意味で、能力のないことを言ふ。今のかねるではない。**○つる**　現在完了助動詞。ぬに對するつの活用。やはり、た或はてると譯する。古文で見ると、ぬは文章的、つは口語的なところが見える。

(四)　**○橘**　高市郡高市村、橘附近。此頃から飛鳥川の西岸であつたらう。島の宮は川の東岸だと思はれるが、地が接近してゐる爲に、かうした表し方をするので、橘の區劃内の島の宮といふ事ではない。隣接した地名を竝べたのである。**○飽かねかも**　あくは腹に滿ち足ることで、十分に滿足しきるとに分化する。此は、滿足しきらないからかで、助辭ばを脫略した形だ。殊に動詞の第五變化に續くばを發音しない事が多い。この

文脈から見ると、「侍宿あかねかも」の意であらう。島の宮では、寢泊りしても滿足しないからかといふ意があるらしい。

(五) **○をも**　なるものを、それをと云ふ義である。元來、をももも感動から出て、疊用せられ、別の意義を生じたのだ。**○任む**　始終中そこに居る事で必しも、住みきりにして居なくてもいゝのである。此處では、さうした鳥の宿り場所を通用してゐるが、實は、飛び立つことの自由を失つた鳥なので、近代のすむには當つてゐても、この頃の用法としては間接である。**○年替はる**　年替へると用法に於いて違ひはない。兩方とも、元に戻る義だ。通常、貴人の陵墓に奉仕する人人は、一年間を經ると、愈その主を離れたことになつて退散するのである。元、正確に一年の物忌みはしなくて、年の替つて新しくなる迄居たのだらう。其が年を跨ぐところから一年とする樣になつたのであらう。**○まで**　この言葉、正確にはまでにと言ふ。早くから、語尾にを離しても言ふ樣になつた。距離の極限を指す意義から轉じて來たのである。

(六) **○島のありそ**　島の周圍、又は島の中にある岩石を指す。必しも粗剛なものでなくとも、さうした誇張をしたものと見てよい。そはしと同じく、磯・石の變形だ。普通言ふ岩濱の磯は、岩石のある海岸の義である。萬葉には、磯ばたと誤解されてゐる岩石のいそが多い。**○生ひざりし草**　今日氣のつく迄、岩の上に草のなかつた事を示すのか、見かけた事のない草を發見したといふのか。後者は稍理に勝つて聞えるが、前者の類型的なのを救ふ解釋になるかも知れない。だか

ら、「見れば」の見るに、多少の違つた意味が感ぜられる。世話をやく・監督する・手入れするなどに近いのではなからうか。

【鑑賞その他】　(一) 誄詞(シタビゴト)系統の類型を辿つた歌。單純で、強い氣魄はあるが、稍無反省に傾いたところが見える。其は、此頃の歌として爲方のないことだ。

(二) 此には、死者の靈をにぎはす爲の誇張のあることを看取せねばならぬ。三句以下が其である。更に、この「哭く」は、所謂發哀・奉哀・擧哀・發哭又は哭之など日本紀に書いて、みねたてまつると訓んでゐる儀禮で、慟哭の式を考へに入れて讀まねばならない。佐太の岡で、群臣が擧哀をしてゐる、其を直に內生活にとりなしたのである。

(三) この歌、行潦(ニハタヅミ)なる言葉が、必、島の聯想によつて出たものと見なければ、二句三句の移りが稍突然である。我々に解せられない連絡を持つてゐるのだらう。此も單純化出來たものゝ樣に見えるが、誇張と空虛がある。其はうたひものとして成立した爲であらう。

(四) この歌などは、實生活と音樂要素と挽歌に伴ふ誇張とが圓滿に結合してゐる。が、稍劇的な氣分がある。

(五) この表現法は、一等平安朝の挽歌の要素をなしてゐるものと言へよう。其だけ、行きとゞいた物言ひである。その纖細を救ふ爲に、おほまかな音覺が用ゐられてゐる。殊に、二・三句が其だ。

(六) 御墓仕へを專にするだけでなく、島の宮へも奉仕に來るのである。その間が長く隔つてゐるのではないのだらう。其によつて、此歌の類型的なのが救はれる。其意味に於いて、今日と訓むと日の接近を感じ、今と訓むと、却つて日數の隔つた感じがするのだ。今は現在の意味ではない。新しくといふ事であるから、「新しく見れば、生ひざりし草、新しく生ひにけるかも」といふのだ。

鳥塒立て飼ひし家鴨(カリノコ)。巢立ちなば、檀の岡に飛び反り來ね

鳥　立飼之雁乃兒。栖立去者、檀岡爾飛反來年　（一八二）

吾が御門(ミカド)、千代　常磐(トコトハ)に榮えむと、念(オモ)ひてありし　吾(ワレ)し悲しも

吾御門。千代　常登婆爾將榮等、念而有之　吾志悲毛　（一八三）

東の激湍(タギ)の御門(ミカド)に侍(サモラ)へど、昨日も　今日も、召すこともなし

東乃多藝能御門爾雖伺侍、昨日毛　今日毛、召言毛無　（一八四）

水傳ふ巖(イソ)の浦回(ワ)の　石躑躅(イハツヽジ)もく咲く道を、また見なむかも

水傳礒乃浦囘乃、石乍自木丘開道乎、又將見鴨　（一八五）

一日には千度(タビ)參入りし　ひむがしの激湍(タギ)の御門(ミカド)を　入り敢(カ)てぬかも

一日者千遍參入之　東乃大寸御門乎　入不勝鴨　（一八六）

交涉(ツレ)もなき佐太の岡邊に反りゐれば、島の御階(ミシ)に　誰か住まはむ

所由無佐太乃岡邊爾反居者、島御橋爾　誰加住舞無　（一八七）

【音訓】 (一)▼**鳥塒**　古本四種まで垣らしい字を書いてゐるから、其總てが塩の誤りとするよりは、垣の字の草體を誤り寫したものとする方が、正しさうだ。此塩の字を栖の誤とするよりは、鳥垣の方がよいと思ふ。和名抄鷄栖の條に、「垣を穿ちて鷄を棲ませるを塒と曰ふ」と云ふ切韻を引いてゐるのを見れば、鳥塒の樣子も訣り、同時に、鳥垣を以てとぐらと訓む理由もなり立つ訣だ。倭名抄の前の條に「和名止久良」とある。▼**栖立去者**　すだちいなばと動詞に訓んでもよいが、助動詞にしてなばと訓む方が、文法上、後の文と照應がいゝやうである。▼**來年**　來は訓。年は音假名。(二)▼**常登婆爾**　常、訓。登婆爾、音。この婆も濁音に訓む必要はあるまい。はの假名である。(三)▼**東**　ひむがし。東の古形ひむがしで、此から類推したのが、みむなみ・みゝなみだ。▼**多藝**　Gei の重母音が、いになることもある。本集では、ぎ・げ兩用してゐる。▼**伺侍**　さもらふ又はさぶらふ。同訓字を熟字にして竝べたのである。▼**召言**　言は、事の假名か、言そのものか。どちらにも說ける。(四)▼**石乍自**　石乍、訓。自、音。いそつゝじとも訓める。▼**木丘開**　木、音。K音脫落。丘、音。拗音を直音化して、くの音に用ゐたのだ。開、訓。▼**將見**　みてむ・みむとも訓める。みむの場合は、又もみむかもであらう。姑く、みなむに從つて置く。(五)▼**參入**　まゐるのら行音脫落の習慣で、まゐるといふ形と入とが融合して、まゐりに用ゐられたのだ。▼**大寸御門**　大寸二字は普通の清濁を逆用してゐる。大は多く濁音、寸は多く清音、こゝはたぎ。のに當る假名を略してゐる。その爲おほき御門と訓む說もある。本集には、大・多通用してゐる。だが、やはりこゝはたぎのであらう。▼**不勝**かてぬ。清音。下二段のかつに四段の勝の字を宛てた理由がある。此語、終止形を用ゐる事が多いから、其

場合、此宛字は不都合を感じなかつた。又古く、このかつが四段活であつたこともある。それに更に、此かつの意義が、勝の字の内容と似てゐる爲に用ゐられたのだ。一方同じ語を表すのに「難」を以て示してゐる場合もあるが、それは寫音の上ではよいとしても、意義の上では反對になる。(六)▼**所由無**　人麻呂作の殯宮の歌には、「由縁母無」としてゐる。更に大體似た用語例と思はれるところに、都禮毛奈吉・津禮毛無或は都禮無などの類例が相當にあるから、まづつれもなきでよいと思ふ。▼**反居者**　かへりゐば。萬葉古義に反を君として、きみませばとしたのは考へ過ぎだ。▼**任舞無**　舞をもつて、住ふの語幹・語尾まで表した注意すべき用字法。

【口譯】(一)　塒設けて、餌をやつて來た家鴨よ。お前が巢立ちをしたら、此檀の岡へ、も一度飛び戻つて來てくれ。

(二)　私の仕へる御所よ。それが千年更に云へば、永久に我等が祝福によつて榮えるだらう、と思つて居つた私が、いとしいことよ。

(三)　早瀬の側の東の御門、その控へ所に祇候申してゐるけれど、幾日もく、御呼びになる御言葉も下さらない。

(四)　いよ〳〵退散した後は、あの岩石のある島の入り込みの岩躑躅の花、それがみつしり咲いてゐる道を、も一度と見る時はあるまいことよ。

(五)　以前一日に就いて言へば、千返も參上した早瀬のある側の東の御門を、這入りきれないでゐることよ。

(六)　無關係だつた佐太の岡の處に、私が處を變へて居着いたら、この島の宮の階(キザハシ)に誰がぢつと伺候してゐようよ。

【言語】(一)　**○鳥塒**　今の塒(ネグラ)に當る。特に飼ひ鳥の塒をさすやうである。若し切韻の説明が、其儘國風にも當つてゐるものとすれば、恐らく壁などに穴をあけて棲ましたのであらう。かうした魂の鳥は家の中に飼つたものと見えて、「まくらづく　つまやの中に鳥座(トクラ)結ひ据ゑてぞわが飼ふ。眞白斑(シラフ)の鷹」(卷十九　家持)とある。こゝの家鴨は、まだ放ち鳥になつてゐないものを云ふのだ。**○立て**　設備する・擧行するなど、幾分ことを興すといつた感じを持つた語だから、設けてと譯するがよい。**○飼ふ**　物を食はせることを第一義として、食はせ置く卽、飼養の意味に多く用ゐる。こゝでは、飼ひしにやゝ不適當な感じがある。(次の項參照)　**○家鴨**　かりは常世卽、古代人の考へた理想國から來る鳥だ。魂の信仰から其鳥を止めて置く爲に、雁の卵を孵化せしめて養ふ習慣があつたらしい。かりのこは普通の用語例では雁の子鳥ではなく、其卵である。此歌には、雁の子に餌を飼つたのが巢立つたら、と云ふ樣に表現してゐるが、雁の卵が孵るまで長く注意した爲に、かりのこといふ語を用ゐたので、實は子鳥といふことになる。此文から云へば、さうしては意譯になり過ぎるのだ。雁が日本で卵を生むことは、殆、無いものとせられ、仁德天皇の代に河内又は攝津の水邊でこれを發見して、天皇を祝(ホ)福ぎ奉つた本宜歌の由來がある。さうした壽

命のことほぎをする爲に、常にかりのこから雁に育て上げて、飛び立たせる事は望まれないから、此卵は實は、家鴨の類の鳥の雜種の卵である。鴨の子とするのは、此風が平安朝に遺つてのことで、古くは鴨でない様だ。まして雁の字の點をとつて雁にしたもの、卽、たかのこと訓む說は、卷十九の歌が、完全に說明出來ない間は成り立たない。**○飛び反り來ね**　此反るは幾度も繰り返す義であるが、同時に、方向を反すといふ義もある。若し繰り返す意ならば、每年々々秋每に檀の岡へやつて來てくれ、といふことになる。でなければ、遠くへ飛ぶ方向を變へて、御墓へ來いと云つた風にとかねばならない。

(二)　**○御門**　御門に吾がを直接につけて、その間に親しみと敬意とを表してゐる。この御門は島の御所である。**○千代常磐**　常磐は常津磐（イハ）だと云ふが、感じだけは訣つて、語原を徹底して知り難い語だ。强ひて云ふなら、床つ磐でなければならぬ。常磐（トコハ）と同系統の詞である室讃美（ムロホメ）の詞が、常（トキハ）の聯想を加へて來たものだ。だから語は用ゐながら、意義は單に氣分的に感じて居つたゞけであらう。强ひて譯すれば、永久に・永遠にといふ程に感じたのだらう。**○榮えむ**　さくは上機嫌の有樣で、笑ふ貌・健康な貌などから、賑はひ、繁昌する意義に延長せられた語。だから、それらの過程を總て含んでゐる、讃美詞と見てよい。宮廷の建築は、いよ〳〵大きく擴り、主君はいよいよ健康になられ、その配下の人・國はその光榮に與る、といつた語である。卽、一句以後ここまでは、咒詞の固定した形である。（念ひてありし參照）　**○念ふ**　總論に述べた様に（思兼神參照）、かくが心に思ふと、口に出すと二樣の用語例を持つてゐると同じく、心の中のことゝする念ふも、古くは口にかけて唱へる意義があつたのだ。咒詞を唱へると云ふことになる。此歌では、明らかに「かく〳〵と唱へ言してをつたわれが」といふ意識は持つてゐまいけれど、語の聯絡から、過去の用語例が、自然に導かれ復活し來る適例と見てよい處だ。表面は思ひ信賴してゐた、と譯してよいが、輕くこの唱へ言を稱へことほぎしたといふ意味を感じてゐなければ、完全な解釋でない。**○し**　緊張の助辭。**○悲しも**　かなしの語根かなは小さいことを意味する語だ。それが、いとほしむ・かはいがる・きれいだなど云ふ意義を、形容詞かなしとして展開して來たのであるが、いたはる心から、悲傷し易い心持ちを述べるやうになつて來たのだ。中心意義はいとしいにある。こゝのかなしは、さうばかり信賴して居つた自分の心の失望を、勞はる氣持ちである。だから、「わが心し悲し」といふ風に說いてはわるい。

(三)　**○たぎ**　水の、傾斜を激して流れる樣を表す動詞。又、其場所。水のたぎつて流れる場所。つまり、早瀨である。音價流動してをつた爲に、清音にたきともいつて居つたらしい。其形が後世に遺つてたきとなつた。尤、そのたきに宛てる瀧の字も、實は瀧でなく、早瀨のことである。唐代の文學、譬へば、韓退之の文などには、瀧川と書いてゐる。だから、訓と古い用語例とは、合致して居つたのである。後、傾斜の程度に關係なく、すべてをたきといふ樣になつたらしい。萬葉の「たるみの邊（ウヘ）のさ蕨」など云ふ語に、多少疑問を挾む人もあるが、今日の分布廣い方言か

らみるも、たる・だるは確かに瀑布のことである。或はだるみとも云ふ。恐らく、地形を表すたぎが原の語であらうが、動詞たぐがあつたことは、想像される。この再活用がたぎつで、後代で言ふたぎると同じだ。たぎつせといふ語は、そのつが所有格の助辭と見られ易いが、全く動詞の連體形とも言ふべきものである。垂直的に落ちるものがたるみ、傾斜を以て流れるものがたぎ、或はたぎつせ。**○たぎの御門**　此はほかひゞとの詠にあつた様に、當時の宮廷では、東中門を正門としてゐた。その御門の所にたぎがあつたに違ひない。餘り適確な説明をする事は、却つて、事實を枉げるかも知れぬが、島の宮の位置から言ふと、多武峯・細川山其他から來る水が、導き込まれてをつたことも考へられるし、殊に大體に於て、此地形は傾斜地であるから、御所の東に落ちて來る様が思はれる。そして、此が、後世其起原不明な遣り水の形を作つたのかも知れない。私の考へでは、平安の宮殿造りの構造は、所謂神代の建築の考察をする前に、飛鳥以後の狀態を觀察する必要があると思ふ。單に唐風模倣では、片づかない點が極めて多くある。同時に此等の舍人が控へてゐた東中門廊の様式が、流れ落ちる水を、一つの要件とするところから、後世宮廷の瀧口の武士の形が、自然に導き出されたのだ。所謂瀧口所、又は瀧口の陣と稱するものは、一に瀧口の廊と呼んでゐる。其職分から判じると、舍人の役目を繼いだものが多かつたらしい。而も、これを宇多院天皇の時を初めとするのは間違ひで、事實は古くからあつたのだ。其爲事の一部に射藝に通じてゐることを資格としたのは、王朝の物語によつても訣る様に、弓の呪術に達し

てゐることを意味するのだ。又、壺前栽の栽植を司つてゐたことは、此歌などに見える舍人の職分が遺つてゐるのだ。第一に清涼殿の艮のみ溝水の落ち合ふ處に、その控所が在つたと云ふことは、清涼殿との關係上中門に當り、同時にたぎの御門の形式を存してゐた痕跡と見られる。**○さもらへど**　さもらふ。様子を覗つて待つ。必しも上長に對して言ふのではなく、波風の景色を覗ふ、或は、神の機嫌を覗ふなどの義が主であつたのだ。それから轉化して、お伽、或は祇候の意になつたのだ。後世の瀧口の職掌を見ると、夜に這入つて、宿直申しと云ふことがあつた。卽、夜半に呼び召されて、鳴弦の役を承つたのである。この事情を知れば、大體舍人の職分が訣り、この二十三首の背景もはつきりすることゝ思ふ。鎌倉以後中門に祇候するものを遠侍といふ。これを參考する必要がある。恐らくは、藏人及び藏人所なるものも、かうした舍人が段々に擴張せられて、一つの重要な役人・役所となつて來たものであらう。**○昨日も今日も**　かうは言つてゐるけれど、主として昨日の晩、今日の晩、といふことだと思ふがよい。かうした夜は、普通、前夜と接して午前零時以後のことを指すのだ。**○召すこともなし**　唯、用事を御言ひつけの爲に呼ばれるのでなく、鳴弦の役として奉仕せしめられるのだ。宿直申しの外に、名對面・問籍といふやうになつたのがそれだ。**○召す**　呼ぶの敬語。主として、舍人・采女などを遠國から呼ばれた時の用語例を延長して、宮廷に仕へて後も、此人々を呼ぶことを召すといつたのが、通用語になつたのであらう。

(四) **○みづゝたふ**　枕詞らしいが不明。磯に懸るか、浦囘を起すか亦不明。いろ〳〵說けるが恐らく、處々の岩を接續地として、水を渡つて行く意味であらう。それでなくては、つたふが完全でない。**○礒の浦囘**　浦の用語例が、少し違例である。此語は海岸線の一區域をなしてゐる間を言ふので、地物によつて、兩端を限定せられてゐる。本集にも稍延長して、川に用ゐてゐる例が無いでも無い。「三重の川原の礒の裏に」、かうした海岸の地形を轉用して、ほめ詞に使つた例は幾らもある。その意味に於て、こゝも島の宮の池及び島のことに云つたのだ。礒は例の通り岩石。濱に對する語。**○石躑躅**　岩壁或は磽确に生えた躑躅である。所謂山躑躅・赤躑躅とも云ふもの。人の健康の咒詞の上の譬喩として用ゐられる慣用のあつたもの。これが轉じて、さうした場合に列する舞人なる處女のほめ詞になつたのが、「躑躅花匂へる處女」、と云ふ風の詞だ。**○もく咲く道**　延喜式祝詞には、もくさかに或は、むくさかにと副詞に使つてゐる。だから、前期王朝の宣命・古祝詞・咒詞などにも使つてゐたに違ひない。それを擬古文の誤解からして、熟語動詞と考へて利用したものだらう。もくは密集してゐる意味の語根。さかは咲く（ほかひゞとの詠參照）の副詞的變化、新造語としてのもく咲く道は、一杯咲いてゐる道を云ふのだらう。**○また見なむかも**　またの字によつて意義が限定せられて、唯の見なむかもでなしに、見るときあらじの義になつてゐる。此歌は、忌明け退散の時期が迫つてゐる時分の歌で、而も、やがて躑躅花咲く晩春初夏の來向うてゐるのを心に持ち、其時期には、既に宮人として資格を失つてゐることを思うたの

である。

(五) **○一日には**　此は帳內舍人として、お召しによつて、控へ所なる東中門から、幾度も參上したことを思ひ出してゐるのだ。卽、一日として數へて見れば、と云ふ位が古意であらう。**○入り敢てぬかも**　入り敢へずすることよ・入り敢へずゐることよ・入り切れないことよ・入り得ぬことよ。云はゞ、遠侍に控へてゐる爲に、召しがなければ、中門以內に這入ることが出來なかつたことを見せてゐる。それを感情を掛けて云ふと、傷心の爲に參入する氣にならない、と云つた感じが出るのだ。此頃、既にさうした二重の發想をしてゐたのだらう。

(六) **○反りゐば**　居變る・住み變ると同じ語。**○島の御階**　島の宮廷の階段の意味だと思はれるが、又、島の宮の築山へ通ふ橋の樣にも見える。結局、當時の風習が知れないから、斷言出來ない。但、このはしは、その二つの意義に關係薄く、尊貴と人との間を繫ぐ所謂、間人（ハシビト）のはしに關係ある語で、それが中門廊――橋殿・長橋――に控へて居つたことを示すものではなからうか。さすれば、同時に、間人が舍人の職分の一つであつたと云へる。激湍の御門の內側御廊（ハシ）のことだらう。**○誰か住まはむ**　かは疑問でなく感動だ、と云はれてゐる。かうしたところから、疑問のか或はやが出るのである。誰が住まはうよの意だが、住むは常住通ふことで、誰とある以上は、一人もと云ふ風に、住む人を指定したのではない。我の外に、と云ふ意味だ。自分だけは來るけれども、外の誰が來ようか、と云ふ義だ。

【鑑賞その他】 ㈠魂の鳥が飛來すると、死者・假死者の身に魂が這入つて、復活するといつた信仰から、かうした連作歌が出來て、其仄かな記憶が、尙、かうした歌を作らせたのである。だから、單に御遺愛の鳥だから、とばかり解するのはいけない。それと共に云ふべきことは、平安朝にもさかんに雁の子のことを書いてゐる。或意味に於ては、玩具となつてゐる。一體われ〳〵の稱する玩具は、もと手に持ちならして、それによつて、鎭魂の效果を收めようとする目的のものであつた。だから、雁の子が雁の卵でなくとも、他の水鳥の卵を雁の子と稱して代用して居つたのである。

㈡ 此歌、咒詞の表現法を或點まで用ゐ乍ら、卒然轉換して、抒情詩にしたのである。かう云ふものをこそ、短歌發達の過程にある內容形式の問題を解決するものとして、味はふべきであらう。今日から見て、全體としての單純化は行はれてゐるが、部分的には複雜な感じを起させる。「千代常磐に」などいふ咒詞としての對句風の云ひ方がそれだ。

㈢ 此も當時の生活條件を知らないで見ると、主君無き宮殿の靜けさが、却つて、音となつて聞えて來る樣な氣がする。今の標準から云つて優れた歌であらう。其上咒詞風な發想法から、獨立した歌になつてゐる點を注意すべきだ。

㈣ 多少宴遊の頌歌式なところを持つてゐるが、部分的には複雜な感じを起させる。「千代であらう。此歌を以て皇子尊が、嘗て旅行せられた地方を回想した歌、と解することも出來るが、

やはり島の宮の內園ひに容易に入り難くなつた人が、更に退散後のことを考へたものと見ればよい。

㈤ いさゝか獨立性に乏しい所はあるが、所謂連作としては、避け難いことであらう。唯此歌の內容の曲折は、人を憂鬱ならしめる力がある。とり分け、皇子尊との交涉が、問題になつてゐる點に、注意せねばならぬ。

㈥ 交涉（ヅレ）もなき、と云ふ語を使つてゐる氣持ちは、宮殿・住所の移動によつて凶事のあつた場合に、咒詞によつて其結果を引き直さうとする方法が這入つてゐるので、既に、結著の著いた後までもさうした詞を唱へて、長い禍ひを消さうと試みるのである。人麻呂の近江の荒都で詠んだ、「たまたすき」の長歌に「……いかさまに思ほしめせか」などあるのと同じことである。此當時の人麻呂の長歌にも「……天つ水仰ぎて待つに、いかさまに思ほしめせか、由緣もなき檀の岡に宮柱太しきいまし」としてゐる。かう說かなければ、つれもなきが如何にも突然である。

且覆（アサグモリ）　日の入り去（ユ）けば、御立（ミ）たしの島に下りゐて、嘆きつるかも
　　且覆　日之入去者、御立之島爾下座而、嘆鶴鴨　（一八八）
朝日照る　島の御門に、おぼゝしく　人音もせねば、まうらがなしも
　　且日照　島乃御門爾、鬱悒　人音毛不爲者、眞浦悲毛　（一八九）

まきばしら　太き心はありしかど、この我が心　しづめかねつも

眞木柱　太心者有之香杼、此吾心　鎭目金津毛　（一九〇）

けごろもを　春冬片設（カタマ）けて　出でましゝ　宇陀の大野（オホノ）は、思ほえむかも

毛許呂裳遠　春冬片設而　幸之　宇陀乃大野者、所念武鴨　（一九一）

朝日照る　佐太の岡べに鳴く鳥の、夜鳴きかはらふ。この年ごろを

朝日照　佐太乃岡邊爾鳴鳥之、夜鳴變布。此年己呂乎　（一九二）

賤民（ヤッコ）らが夜晝（ヨルヒル）といはず　行く路を。我はこと〴〵　宮道（ミヤヂ）にぞする

八多籠良家夜晝登不云　行路乎。吾者皆悉　宮道叙爲　（一九三）

【音訓】 (一)▼**且覆**　あさぐもり。覆の字、異本みな此字を書くが、此儘では訓めさうもない。異訓あさぐもりとするのは、且を旦とする古本が多いからよいが、覆をくもりとすること、如何にも無理である。木村正辭先生が、且をたなの音假名として、たなぐもり（アカネサス）と訓まれたのは巧みだけれども、尙不足の點がある。鹿持雅澄は日の枕詞たる位置にあるものとして茜指の誤りとしてゐるのも、適切にして勇斷すぎる。橘守部のあさかへり說は、字を改めないからよいが、下の句との連續に飛躍がある。姑く、あさぐもりとして置くが、假に言へば、此句の覆の字は西に復るの合字、或は一字と誤解せられたものと見ることが出來る。上の字は日一たびの義か、或は日と覆の字との間に一を誤入したものとも思はれる。さすれば、日西に復るといふ書き方で、ゆふべに關聯した言葉を表すものかも知れない。音調上に難點はあるが、ゆふぐれになど訓むのが、

稍當を得てゐるかも知れない。▼**入去者**　いりゆけば。いりぬればとも訓める。(二)▼**且日**　旦日とする古本も多い。あさひである。(三)▼**之香杼**　しかど。之音、香訓、杼音 ziyo の次音。(四)▼**毛許呂裳遠**　けごろもを。毛・裳訓。許・呂・遠音。遠、古本に無いものが多い。四音でけごろもと言つたのかも知れない。▼**所念**　おもほゆ。受身のると誤解して、其に同じゆの意味に使つたのだ。(五)▼**變布**　かはらふ。類聚古集に戀に似た、下に心のある字を書いてゐる。さすれば、こほしきである。だが、尙かはらふがよからう。(六)▼**家**　此は、我の草體の誤りと見てもよいが、かうした家の用法も多い。其總てを誤りとすれば論はないが。▼**八多籠良**　やつこら。はたこら・やたこらなど、いろ〳〵訓む。但、やつこの音韻變化やたこといふ形があつたか、或は多が豆（眞淵）箇（守部）などの誤りで、つと見るべきか不明である。又、疇の古文彖が變形したものと見れば、ちうの次音つである。但、本集に其例は無いから、主張することが出來ない。▼**皆悉**　ことごと。みなからと訓む說を否定することは出來ない。▼**叙**　ぞ。zyo の次音 zo。

【口譯】 (一)　夜明けの曇りに、日がひつこんで行つた時に、かの御立ち場所の島に入りこんで、溜息づいてゐることよ。

(二)「この輝かしい」島の御所に、氣がぼうつとする程、人音も聞えて來ないので、何だか悲しい氣がすることよ。

(三)　眞木柱、それではないが、今迄は太い心は持つてゐたけれど、今では變つて、この我が心が鎭めきれないでゐることよ。

(四) 早春を一途に待つて御出かけなされた、あの宇陀の大野原のことは、今後何時までも、思ひ出されようよ。

(五) 佐太の岡のところに、何時も鳴く鳥の夜聲が變つてゐることよ。幾月このかたをば。

(六) 賤民部落の賤民たちが、夜と言はず晝と言はず通る路、それを私どもみんなは、御所への路としてゐることだ。

【言語】 (一) **○旦覆** 守部は朝、佐太の岡から島の家に歸り、夕べ佐太へ行く時のなごり惜しみの様に說いてゐる。其處に、初句と二句との間に過程の飛躍がありすぎる。唯、あさぐもり說をとるならば、「日の入りゆけば」迄を譬喩と見て、草壁皇子の薨去を暗示したと見れば、適切な氣がする。但、その場合、幾分譬喩なる日の隱れゆく氣分を感じなければ、成り立たない。尙、直前の長歌に、「あかねさす　日は照らせれど、ぬばたまの　夜わたる月の、隱らく惜しも」では、皇子を月に譬へてゐる。だから、稍不安がある。言葉としては不具な感はあるが、ゆふぐれに・ゆふべになど訓めば、第二句が完全に働いて來る。**○下りゐて** おりたつなどゝ同じく、其場所に自ら臨むのがおりである。即、入りこんで坐する事である。**○嘆きつる** なげくは溜息づくことと。其から擴つて、抽象的にも使ふ。だが大體に、溜息づく樣を誇張して言つてゐるものと思はれる。今ならば、思案投げ首、大息づくといふところである。つるは助動詞つの活用で、現在完了・現在存續體（プログレス）又は習慣を表す。本集に於いては、當時の人は場合々々によつて判斷したであら

うが、今はいづれにも解することが出來る。先、存續體と見るのが無事であらう。

(二) **○朝日照る　島の御門** 例の宮殿讃めの詞から出てゐる。而も、挽歌に此を用ゐた動機は、墓讃めの心持ちと交錯してゐるのだ。**○おぼゝしく** 前に述べた。唯、「人音もせねば」につくものか、「まうらがなし」について居るのかはつきりしない。後者の場合は、人音もせない時に、茫然として悲しむ心の起つた有樣を言ふのだ。**○人音** 人の動く氣配・響きで、必しも足音ばかりを言ふのでない。**○まうらがなし** 接頭語まは、「うらがなし」についたので、まうらではない。うらは用法廣くて、適切な譯語がない。要するに、本集時代には、意義の大部分を忘却して、接頭語に用ゐたのだ。通例心と譯するが、其ならば氣分とする方がよい。何となくと言つた譯の當る場合が多い。この言葉にも、かなしに重點を置くものと、全體として意義を感ずるものと二通りの使ひ方がある。後者は、心細いと云つた使ひ方が多い樣だ。

(三) **○まきばしら** まきは建築用材に用ゐられる喬木。檜を指すだけではない。後、所謂槇に固定した。この柱を言ふのは、殿讃めの詞。此場合、墓讃めの聯想から出たのである。其を枕詞として太きにかけ、更にその言語勢力が、しづむを言ふに至る迄續いたのである。**○太き心はありしかど** 此は、たゞ心がしつかりしたと言ふだけでなく、魂を鎭める力の源をこゝろと見て言ふので、魂の對象である。思ひがけない悲しみに逢つて、今は其こゝろがないの意を含んでゐる。**○この我が心** 前の句の「太き心」と此とは、別々と通常考へる樣だ。卽、必しも適切でないが、

意思と感情の二つを心で表したと見ることが出來る。だが、恐らく、今のこのわが心はの意で、太さを失つて、魂を鎭め難くしてゐるといふのらしい。卽、わが心が悲しみにうかれたつ魂を、と云ふことだ。

㈣ **○けごろもを**　枕詞。をは感動の助辭。この句などでは、幾分をばの意を生じてゐる。けごろもは褻ではなく、褻の衣である。祭時に著る晴れの衣に對して、日の衣を言ふらしい。衣の聯想からはるにかけたと見てよいが、尙疑問がある。**○春冬かたまけて**　此は春と冬ではなく、春にして冬の氣深く冴え返つた頃を言ふものでなくては、かたまくといふ言葉が不適當になる。かたまくのまくは所謂待ち設けるで、心づもりする・用意するの用語例を持つてゐる。かたは偏する義だから、一途に待つ義である。此が熟語を作つて、ゆふかたまくとなる。考へ方によれば、違つて考へられさうだが、專、夕べの景色になつての意である。**○宇陀の大野は**　宇陀高原のうち、その西邊をさす。卽、本集に見える阿騎野の邊である。多く、押坂から入り立つのである。推古紀十九年五月五日、菟陀野の藥獵りの條に、鷄鳴に藤原ノ池の邊りに會集して、その夜明けに行つた事が書いてある。此記事の地理も時間も相適つてゐる。此處に、「宇陀の大野」が主格の樣な形をとつてゐるが、實は出でましゝ人が主格で、此處のはは、をばに當るものだ。卽、草壁皇子を强く心に持つたが爲に、却つて文中には出なかつたのである。**○思ほゆ**　後、融合しておぼゆ。思はれる・感じる。此處では、思ひ出されるの意。或はまだ、口に繰り返すといふ義を含んでゐるかも知れぬ。

㈤ **○朝日照る**　此も墓讃めの詞。本文に關係がないから、夜鳴きなどに矛盾しないのだ。**○夜鳴きかはらふ**　鳥の夜鳴きの聲が、舍人達の御哭奉る聲に變るのを言ふ。**○この年ごろを**　ころは年月・日の稍久しい連續を漠然とさす言葉。だから、日頃と月頃とでは殆區別がない。をは感動のよに譯すべきものか、客語の助辭と見るべきか、恐らくは、この下の句全體が流動してゐると思はれる。卽、夜鳴き變れるこの年頃よ、と云つた意味から、この年頃を夜鳴き變らふに轉化する過程にあるものと見たがよい。

㈥ **○やつこら**　今日に於いては、想像も能はぬ過去の或事象を表して居るとすれば、せん方の無い訣だ。假にやつこと見ると、奴婢のことになる。殊に、其賤民の居る處が墓への道に當つて居たのか、それとも、陵墓に仕へる所謂陵戸、又はもりべの類の居る處をさしたのか、問題である。はたこと訓む說を採用すれば、旅行者の荷物の通る街道といふ事になるが、其はあまり後代風だ。姑く、賤民說を採る外はあるまい。但、八多を機の假名に使つた例もあるから、上帛を司る人を機子と見て言へば、新陵墓に機織りが關係することが多かつた爲かも知れない。**○夜晝と**
いはず　夜だからどう、晝だからどうと指定選擇することなく。**○吾者**　此處には第七の「吾等」と反對に書いてゐるが、やはり舍人全體を指すのである。**○ことゞ〳〵**　どれもこれも、誰も彼も。但、この訓み方には疑問のあること、音訓に述べた通りだ。**○宮路**　宮廷に通ふ大道。都城制を

採つてからの朱雀大路の如きである。單に、宮へ往く路の意ではない。其路を通らねばならぬ正門の路があつたのだ。

【鑑賞その他】 (一) 上一・二句の間が不明だけれど、それ以下は、近代の見方に煩はされることなく、古風に見ても、沈靜した氣分のうちに、強い悲しみが現れてゐる。「島に下りゐて」には、何か意味があるのかも知れない。

(二) 儀禮歌と抒情詩との間を行きながら、尚、最優れた歌である。古代及び中世に亙つて、貴族以上の古屋敷は其儘たち腐れに殘された形跡があるから、此はまだ一年に達しない間ながら、さうした事實を考へてかゝると強く感ぜられる。

(三) 讃へ歌の形式で、恐らく、無反省にうたつたものとしての表現不足を含んでゐるのだらう。其にも拘らず、歌としての價値は、その調子と單純な内容から生じてゐる。

(四) 「輕皇子宿二于安騎野一時、柿本朝臣人麻呂作歌」(卷一)と前後照應してゐるもので、日竝知ノ皇子が狩獵を好んでゐられた、その皇子の御伴をした時の事を思ひ起してゐる。

(五) 御哭奉ることは、この歌にある様に、毎夜した事ではあるまいが、其を誇張して言つたものだらう。皇子を思ひ出して、自然に哭くのではないが、既に此歌には、さうした舊習と新表現とが相交つてゐるのであらう。

(六) この歌も亦、舊表現のうちから新發想が現れようとしてゐるもので、半ばは御墓に仕へる實

情を述べながら、片方に、主を失つて退散の時を見かけた人々の境遇に對する反省が、出かゝつてゐるものと見るべきだらう。殊に末句に近づくに從つて、抒情氣分の整つて來るところを見ねばならぬ。

○「皇子尊宮舍人等慟傷作歌」の講義は昭和十三年九月號「短歌研究」の「萬葉集の綜合研究」所載の分もあるが、二十三首の口譯と、はじめ二首の語釋で終つてゐる。今「短歌講座」の方を本とし、二首の語釋の之に見えない部分だけを(○……)として補つた。　以下黒人の歌の講義まで、すべて「短歌講座」のまゝ。——編者

(六)

柿ノ本ノ朝臣人麻呂羇旅歌　八首　(卷三)

(二四九)　三津の崎。浪を恐(カシコ)み、隱(コモ)り江の船漕ぐ君が行くか野島に

三津埼。浪矣恐、隱江乃舟公宣奴島爾

【音訓】 ▼矣　訓。此字をを|と訓むのは、音ではない。漢文の終尾辭に施す直譯が、大體固定してゐたのを假名に用ゐたのだ。多く感動或は疑問として訓んだので、を|に焉・乎及び矣を宛てることが多い。此に對してやには也及び哉を用ゐ、又疑問の意味に耶を用ゐ、を|に焉(烏に誤つてゐる)、か|に又哉・歟を用ゐ、同時に疑問にも通用してゐる。乎も亦疑問のか|に使つた様である。つまり、古く字と訓とが固定してゐたこと

が知れる。▼**恐**　かしこみ。大體に於てまづ不都合のない訓法らしいが、隱江乃の訓が不安定だから、今後此が動かないとは限らない。▼**隱江乃**　此句最動きの無い樣に見え乍ら、却つて此ある爲に四句以下の訓が自由でなくなる。殊に乃が落ち著かないのだ。卷一の「旅にして物戀之伎乃」の乃をにに當る字の誤字とする說の中、木村正辭先生の乃にに|の音のあることを稱せられた說、竝びに「かび家が下乃鳴くかはづ」にも|を用ゐてゐるのを採用すれば、こゝも此儘に|と訓むことが出來る。こもりえにと訓めば、多少自由になる樣だ。▼**舟公宣**　此には枚擧するには堪へぬほど說はあるが、其中不自然でないものを擧げれば、宣長の「舟八景何時寄（フネハモイツカヨセム）」、岸本由豆流の「舟漕ぐ公が乘るか野島に」、荒木田久老「舟はも行かず（不通）野島の崎に」、加茂眞淵「舟令寄敏馬埼爾（フネハヨセナムミヌメノサキニ）」などあるが、やはり適切らしくもない。類聚古集・古葉略類聚鈔には、舟の下に爾の字があるけれど、此亦從うてよいかわからぬ。公の字は無い本もある。宣は總てのると訓んでゐるが、これも安定してゐない。井上通泰氏は、「隱り江に舟下而泊奴美奴馬爾（フネヲオロシテハテヌミヌメニ）」と訓む。三句と五句との訓は直感の銳さを見せてゐるが、「舟を下して泊てぬ」は萬葉調に似ない。▼**奴島爾**　古葉略類聚鈔には、奴の上に美の字がある。さすれば、奴の下に女のあつたのを字形の類似から、書き落したのかも知れぬ。さうすればみぬめの|と訓める。島の字を馬と見て埼を補へば、みぬめの崎と訓めるが、又みぬめの島と見れば自然である。尙本集二十に、さきもり|と訓む筈の處に島守の字を宛てゝある處を信じれば、その儘みぬめの崎に|となる。

【口譯】　三津の崎よ。そこに立つ浪の恐ろしさに、そこの深い入り江の中で船に……敏馬の島に……。

【言語】　**○三津の崎**　攝津國難波の御津を擁した砂洲の發達したものであらう。**○浪を恐み**　浪の恐しさにといふ風にとらねばならないのは、他動詞でありながら、一句としては自動詞句と同じ效果を表す爲である。**○隱り江**　此は地名と云ふよりも地形から出た通稱で、當時の稱へであらう。御津の崎の外側、西北方に當る處に在つたので、恐らく神崎川近くの入り江であらう。**○舟公宣**　訓をつけることが出來ぬから、勿論意味も知れぬが、唯見當を立てゝ見れば、隱り江に暫く隱れて、更に敏馬の島を指して船をやらうとする意ではあるまいか。**○野島**　淡路島の西北方。津名郡の中、凡、今の野島村附近。野島の崎も此處である。唯歌の趣きでは、三津の崎を離れて、直ぐ荒い海波を避けて這入つた入り江から、舟の目的（メド）とすべき土地としては、餘りに遠く又地物の障害があつて見える筈はない。だから、此附近で、此に適當な地としては、まづ敏馬が當るであらう。敏馬は攝津國武庫郡、今、御影町から神戸へかけての地名と思はれる。此地に就いては次の歌の條に說く。但、敏馬の崎ならば本集にも見えてゐるが、島は訣らない。唯、當時敏馬の浦附近に在つたものと考へることも出來る。

【鑑賞その他】　かうした歌だから云ふべきことはない。唯注意すべきは、人麻呂の歌或は人麻呂集の歌と稱するものには、かうした字を省き過ぎた爲に、結局細部に於ては、どう訓んでよいか訣らぬものがあることで、此は恐らく漢文風に表記した爲の弊であらう。

（二五〇）　たまもかる　敏馬（ミヌメ）を過ぎ、なつくさの　野島が崎に、舟近づきぬ

一本に云ふ。處女（ラトノ）を過ぎて、なつくさの　野島が崎に、廬（イホリ）す。我等（ワレ）は

珠藻苅　敏馬乎過、夏草之　野島之埼爾、舟近著奴

一本云。處女過而、夏草乃　野島埼爾、伊保里爲。吾等者

【音訓】▼**敏馬**　敏の南方音 min を母韻化してみぬ（ミヌ）とするのも、當時の音韻學の知識から出てゐる。▼**過すぎ**。すぎてとも訓めるが、すぎに從ふ。▼**處女**　敏馬に關聯した史實を辿れば、處女をみぬめと訓ませたとも思へるし、或はをとめとも同じ地名を呼びさうな理由も考へられるのだ（言語の條參照）。▼**伊保里爲**　**吾等者**　伊保里、音。爲、訓。吾等者は前の二十三首の用字例と同じく、一人でない場合のわれを示してゐる。者、訓。格のてにをはとして、訓を固定させなかつたのだ。

【口譯】　俺の舟は、もう敏馬の浦を通り過ぎて、野島が崎に俺の舟は接近したことだ。

一本の歌。俺の舟も處女（ラトメ）神のゐられる浦を通つて、野島の崎で俺達は、小屋掛けをしてゐることよ。

【言語】　**○たまもかる**　枕詞。海に關したものに廣く著いたらしい。本集の用例以外にも自由であつたと思はれる。唯それを陸上の水にも轉用して、「たまもかる堰（キテ）のしがらみ」（卷十一）と云ふのもある。**○敏馬**　浦を云ふか崎を云ふか明らかでない。但、浦は崎を西の限界として東に擴つてゐたらしい。說は樣々あるが、恐らく兵庫の和田岬を指すものと思はれる。平安中期には、大

輪田と稱してゐる。思ふに舟旅の行路では、海邊の有力な神の鎭座する所の前をよぎる時、殊に注意するのが常であつたから、こゝも敏馬の姬神のゐられる所の意味にとつてよからう。而も、さうした旅に歌を奉る海邊の社は、大抵岬にゐられるのだから、敏馬の崎と見るのがよからう。攝津武庫郡には、西部日本に分布の廣いみぬま・みつま・みぬめ・壬生など同系統の語で稱へる姬神の御在所が、水邊に多くあつた。元此神は水の女神として、尊貴の方々の沐浴に奉仕して、其御身の復活を掌つた、歷代の巫女の神格化したものである。此信仰が諸國へ傳播せられて、譬へば此處或は阿波の美馬郡——元みるまであらう——、筑後の三潴（ミツマ）などが、その有名な所在地で、根原地と見られるのは、丹後の國竹野郡比沼（ヒヌマ）——ひぢとするのはいけない——麻奈爲神社である。此姬神の信仰がある部分變つて、航海の舟の恐れ祈るといつた部分も出來たのだ。外國の使臣が來朝すると、此崎で住吉の神酒を飮ませる習慣になつてゐたと云ふ。海岸の障碍（ゲ）神であると同時に、住吉神の姬神であつた容子がよく訣る。この神水中より出現して、禊ぎをすゝめる處女神であつたが爲に、或は多少音韻の類似もあるから、をとめ神と云つたことも考へられなくない。

○なつぐさの　ぬの枕詞。又、しなゆにもかゝるところから、ぬを萎靡する義の語として此にかゝるものと考へてゐるが、寧、「なつぐさのあひねの濱」などある古歌を見れば、臥しなびく狀態らしい。卽、寢（ヌ）である。此意味でかゝつてゐるのか、又は草の名か、或は端的に夏草繁る野を指したのか決定は出來ない。尙試みに云へば、天武天皇の妃に蘇我赤兄の娘大蕤娘（オホヌ）がある。蕤を

珠の義と說いて來てゐるが、この字の訓ぬを珠の一種なるぬに、宛字したまでのことであらう。說文に草木華垂貌、周語に委蕤柔貌とある。皆草垂れて萎へる貌であつて、前述の寢に當るらしい。**○野島が崎**　分布の廣い地名。こゝのは前歌に述べた處で、今の野島よりも北へ廣く稱へたものらしく思はれる。但、淡路南方の海中にある沼島と混同せぬがよい。此崎は宿の鼻を指した趣に見えるが、野島附近は地形に變遷があつて、岬の崩れた傳へもあるから、何れにも定めかねる。**○舟近づきぬ**　近づく。つくにはその方に寄る・接するの意がある。**○廬す**　いほはもといへと同根。それを語根として動詞化したのがいほるである。その名詞がいほりだ。假小屋である。それにすの語尾が附くと、宿ると云ふよりは、小屋掛けをする動作になる。

【鑑賞その他】　如何にも長歌の斷片とも見るべき、人麻呂式の對句を竝べた歌だ。野島が崎の假屋で、宴を開いた時の卽興で、今日の行路を思ひかへさせるものである。一本の歌も同じく酒宴の歌で、假屋造りまでの心遣ひを相共に回想させたのである。思ふに明石海峽を西に離れた舟は、播州一帶舟泊りに便宜がない爲に、一先づ淡路の側に宿つたのであらう。

（二五一）　淡路の　野島が崎の濱風に、妹が結びし紐　吹き靡る
　粟路之　野島之前乃濱風爾、妹之結紐　吹返

【音訓】　▼**粟路**　あはぢ。淡路に宛てたのだ。▼**前**　さき。崎に代用すること、當代の習慣である。▼**妹之結紐**　いもがむすびし。過去の助動詞しを訓み添へる。▼**吹返**　ふきかへる。返の字、通例かへすと訓んでゐる。

【口譯】　淡路の野島が崎の濱吹く風に、可愛い女の結んだ紐を、吹き靡へさせてゐる。

【言語】　**○濱風**　濱から吹き起る風でなく、沖から濱へ吹く風であらう。作者は海岸にゐるのである。濱は岩石の無い砂地の海岸。磯の對。**○妹が結びし紐**　詳しくは、鑑賞の條に述べる。門出にあたつて、愛人又は妻が、帶その他に紐をつけるのが當時の民俗であつた。**○吹き靡る**　吹かれ飜る。これを、ふきかへすと訓むのも誤りではない。唯、吹きかへる儘にまかせるのを「吹きかへす」と言ふので、謂はゞ、吹きかへさしめる事になるのだ。

【鑑賞その他】　この歌に就いて、誤解のありさうな點だけを注意しておく。紐といふと、直に下紐の聯想をするのが常だ。だが、下紐そのものが既に下體部を覆ふものではなく、下袴につける紐のことだ。紐と言へば、上袴にも又、帶にもつけ、その外、袖・褄にもつける。一口に言へば、魂を結びこめる秘密の結び目を作つた緒である。この紐緒が取りつけてあると、魂は其人の身を離れないものと信じた。その魂は、元、外來の威力の源なるものであつたが、信仰分化の結果、女性の魂を男性の身に固著させる方法と考へられる樣になつた。卽男女相別れる時に、女は自分の魂を男につけてやるのである。我が國古代に於いては、愛人或は夫婦關係にある女としてゐたらしい。が、沖繩諸島現存の民俗に徵すると、親戚の女性、多くは妹・從妹などの毛髮——鬘——

—の一部と見做すのだ。毛髪を袋に納めて携帯することになつて居る。だから、我が國の紐結びの風も、必しも、前に述べた女性に限らぬかも知れない。唯、その民俗の起原は家の巫女としての女の魂を身につけることが、旅の平安を全うする方法だとしたものである。旅行者は、家の常座或は寢室に分割した魂を殘して來るので、かうして相補ふ訣である。此處の紐は、衣裳の表につけたものに違ひない。唯、紐を問題とするのは、性欲に關してゞはなく、旅行中なるが爲に、自然これを主題としたものに傾くのである。卽、紐を見れば、それを結へた妹を思ひ出す。それから他人の上へ及して、同樣の境遇にある同伴者の同感を促すやうに出來た宴歌である。

（二五二）　あらたへの　葛江の浦に鱸(スヽキ)釣る　海部民(アマベ)とか見らむ。旅行く我を

一本に云ふ。白栲(シロタヘ)の　葛江の浦にいざりする

荒栲　藤江之浦爾鈴寸釣　白水郎跡香将見。旅去吾乎

一本云。白栲乃　藤江能浦爾伊射里爲流

【音訓】▼**荒栲　白栲**　あらたへの。栲・栲をたへと訓むのは國字。又たくと言ふ字。▼**鈴寸**　すゞき。鱸の假名。▼**白水郎**　あま。又泉郎。早くから我が國の海部(アマベ)の民に宛てゝゐる。崑崙白水の郎子なるが爲に、此字を書くのだ。又、泉州の民だともしてゐる。其地の漁人の水によく潛くことから出たのである。▼**將見**　みらむ。この字面では、みむ・みてむ・みなむなど色々訓めるが、此場合はみらむが最適切だ。讀者の理會にまかせた書き方だ。▼**伊射里爲流**　いざりする。射は濁音に用ゐる。

【口譯】葛江の浦で鱸を釣つてゐる人は、海部民の一人と見てゐるだらうよ、旅行してゐる私を見ば。

【言語】○**あらたへの　しろたへの**　葛(フヂ)の枕詞。和栲(ニギタヘ)に對して粗製の衣、或は其を以て製した著物を云ふ言葉。庶民の服は荒栲の部類に入るべき葛の纖維を織つたものだから言ふ。卽、葛衣を思ひ浮べての枕詞だ。一本の歌に「しろたへの」としても葛の枕詞としたのは、葛衣が喪服の總稱と考へられた事が、平安朝以前既にあつたからで、その喪服に白栲を用ゐる樣になつてから、葛衣の枕詞としたのだ。卷二の挽歌に、「しろたへの　麻衣著て」又は卷十三の挽歌、「大殿をふりさけ見れば、しろたへに　かざりまつりて」などあるのを誤解して、白栲を直に喪服と見た奈良朝末の「しろたへに　衣とり著て（卷三）」・「しろたへに　舍人扮裝(ヨソヒ)ひて（家持）」など言ふ擬古文の間違ひから出たものと思はれる。挽歌ならば、「しろたへの麻衣」とでも言ふべきところなのだ。

○**葛江の浦**　播州明石郡。古く葛江鄕がある。今、林崎附近。江と稱してゐるが、單に地名で船がゝりすべき處でなかつたと思はれる。○**海部民**　日本民族の主流以外の一種族。主として海岸を移動したもの。元、南方から來て、日本の兩沿岸を東北へ上つた痕跡の見えるもので、大體、天孫族以前に同じ方向から來たものと思はれる。近代まで普通の良民とは一つに見られなかつたもの。古く海人部(アマベ)又海部、此を略してあまとも稱へてゐた。單に、漁業を職とするものを言ふの

ではない。後人の感ずるのと違つて、部落を異にし、交際もせぬ海岸漂流民である。**○……とか見らむ**　かは疑問でなく、感動である。稍古くは、「海部民とを見らむ」と言ふべきところだ。みらむ、みるらむの融合。現在完了想像。**○旅行く**　旅に行く・旅を行くなどゝ違つて、旅する意の熟語動詞である。**○……を**　感動のをから目的格のをに移る過程を、明らかに示してゐる用語例。をばの意味十分出て居りながら、尚、感動の氣分を存してゐる。**○いざりする**　いざるは沖漁すること。

【鑑賞その他】　自分の船を知らぬ人は、葛江の海部民と思つてゐるだらうと云ふ、人に知られないで、旅行を續けて行く寂しさに思ひ至つてゐるので、當代の歌としては新しみも深みもあつたものなのだ。而も、かうした歌が、海邊流謫の憂ひを詠んだ多くの歌の古い一つで、亦最すぐれたものである。「ほの〴〵と明石の浦」・「わくらばに訪ふ人あらば」・「わたの原やそしまかけて」などの歌は此から直接に出ないまでも、かうした歌が基礎となつてゐることは事實だ。文學意識の既に出た歌の例として人麻呂の羈旅歌八首を上げたが、此後四首及び最文學化したものと見てゐる高市連黒人の本集所載の歌全部をこれまでの方法を以てすれば、解釋し盡されない。以下はなほ簡略に從ひたいと思ふ。かういふ風にして古歌古文を見なければならないといふ方法をお見せしたのだから、それによつて、以下の歌竝びに本集の全體を見る態度として頂きたい。

（二五三）　印南野（イナビヌ）も行き過ぎ不敢（カテニ）　思へれば、心戀しき加古の島見ゆ　一に云ふ。川口（ミナト）見ゆ

稻日野毛去過勝爾　思有者、心戀敷可古能島所見　一云。潮見

【音訓・言語】▼**稻日野**　加古川の兩岸に擴つて海岸に沿うた曠原。いなみとも云ふ。▼**……勝爾**　此字義既に述べた。爾は副詞語尾のにではなく、否定助動詞ぬ（通常ず）の連用中止形。かてず……と云ふのと同じ。直譯すれば、「敢へずに」となる。（此にと關係はない。）▼**思有者**　字は意義に從つて書いてゐる。思ふの現在存續體。▼**心戀敷**　ものを求めんとするやるせなさを表す。▼**可古能島所見**　所は受身の助動詞ゆから轉じてゆの假名にした。加古島。加古川口から離れて海上にあつた島で、所謂本集その他に印南都麻（イナミノツマ）と稱するものであらう。▼**潮**　他にも類例ある如く、こゝも湖の字を書いたものが多い。みなとは水之門（ミナト）で、川口及びその内部の廣くなつたところである。その形あたかも鹹水湖と似てゐるところから宛てた字。

【口譯】　印南野、それを行き過ぎにくゝ思うて歩いて行つた時に、遙かにやるせなく氣にかゝる加古の島（加古川の川口）が見えて來た。

【鑑賞その他】　此歌恐らく歷史の知識が、現實の淋しさに重つて來てゐるのであらう。景行天皇が印南大郎女に求婚して、追ひ求めて遂に印南都麻の島で捕へて、望みを達せられた傳說があるからだ。此歌なほ家妻を心にもつて來た時に、加古の島を見て傷心した、とだけ說くべきものではなからう。今日から見れば、氣分的には優れた歌だが、細かい理會の屆かぬ點がある。

（二五四）　ともしびの　明石大門に入らむ日や、漕ぎ別れなむ。家のあたり見ず

留火之　明大門爾入日哉、榜將別。家當不見

【音訓・言語】 ▼**留火之**　留の字を誤字とする説もあるが、留と火と連書して自らともしびと訓ませる積りだったのだらう。明石の枕詞。▼**明大門**　門は狹門（セト）即、海峽。明石大海峽の義。▼**榜**　本集漕ぐに多く此字を用ゐてゐる。木に從ふものと、手に從ふものとあるが、手の方が動詞となる。

【口譯】　向うに見える明石の大狹門に漕ぎ入る日となれば、家のあたりの山も見えなく、漕ぎ別れることになるだらうよ。

【鑑賞その他】　漕ぎ別れなむは、その前に家或は家のあたりに、と置いて見るべきで、家のあたりは必しも家及び國を見ずとも云ふので、次の歌の京畿（ヤマト）地域（シマ）とあるのと同じことだ。意譯して山を出した訣だ。此歌後の大輪田の泊などで、遙かに見える京畿（ヤマト）境の山々に對して、別れの儀式を行つた時のものであらう。これも氣分に優れた歌で、とり分け四句に据わるべき句を五句に倒置したことは、心を深く動かす。

（二五五）　あまさかる　鄙の長路ゆ戀ひ來れば、明石の迫門（ト）より　京畿（ヤマトシマ）地域見ゆ

一本に云ふ。やどのあたり見ゆ

天離　夷之長道從戀來者、自明門　倭島所見　一本云、家門當見由

【音訓・言語】 ▼**天離**　あまさかる。日の枕詞。天に遠くある意。日からひなに使つたのが固定したのだ。▼**夷**　ひな。元蕃人及び蕃人の居る處の稱。後、意やはらいで、都遠い地方の用語例になる。大體、九州を暗示する言葉と見てよい。▼**從**　ゆ。前に述べた。進行の意の動詞の對象になる言葉につく。をばと譯する。▼**自明門**　あかしのとより。あかしのとゆと訓む説もあるが、上のゆと重るから、やはり、よりがよい。門（ト）は前の歌に説いた。▼**倭島**　やまとしま。淡路に屬した島の一つと説いてゐるが、誤り。宮廷直轄地として、畿内邊をさしたのだ。しまは水中の島でなく、宮廷領である。倭の畿内をさすことは、第一講に説いた。▼**家門當**　やどのあたり。「家のあたり」と字を改めて訓む説があり、又、當は古本、島となつたものもある。類例は見當らないが、やどのしまは古風に感ぜられる。此處の門の字は、前から續いて出て來る字の影響によつて、竄入せられたものではなからうか。

【口譯】　遠い地方から來る長い距離をば、焦れて來た時に、明石の迫門から、宮廷領の山が見えたことよ。

【鑑賞その他】　この歌では一轉して、西から明石海峽を過ぎようとしてゐるのである。だから、八首ながら同じ旅行の歌とは言へない。

（二五六）　けひの海の海面（ニ）よくあらし。かりごもの　亂れ出づ　見ゆ。海部民（アマ）の釣り船

一本に云ふ。武庫の海。ふなにはならし。いざりする海部民（アマ）の釣り船　浪の上ゆ見ゆ

飼飯海乃庭好有之。苅薦乃　亂出　所見。海人釣船

一本云。武庫乃海。船爾波有之。伊射里爲流海部乃釣船　浪上從所見

【音訓・言語】▼**飼飯**　けひ。近代慶野に作る。三原郡松帆村。▼**庭**　には。一本に船爾波とある。海面の意とし、或は其風いだ様を言ふともしてゐるが、船爾波ともあるから、民俗に關係ある一種の言葉と思はれる。いざりの行事を或時に限つて神事と見て、その行はれる場所がふなには或はには。その祭場に船を扱ふことを船乗りと言つたらしく見える（前に注意を述べた）。其が平常に迄延長せられて、にはと言ひ、いざりと言ひ、船乗りと言うたのだらう。▼**苅薦乃**　かりごもの。枕詞。多く、亂るにかゝる。▼**亂出**　みだれづ。見ゆに先行する用言は、終止形の形をとるのが古語の格である。卽、その動詞・助動詞以前の文は、見ゆの爲に動詞句化せられるのだ。「かしこき海に船出爲利所見（巻六）」・「海部民のいざりはともし安敝里見由（巻十五）」などが證據である。▼**武庫乃海**　むこのうみ。攝津武庫郡の沖あひ。▼**有之**　あらし。此處ではあらしと訓む樣に見えるが、他には幾らもあるをにあるの過程を含んだものとして、なら・なり・なるなれに通じて使つてゐる。ならしと訓んで差し支へない。▼**浪上從所見**　なみのうへゆみゆ。遠い水平線あたりにある物が、浪の上を通して見えると云ふことで、見ゆに見えて來るの過程を含んでゐるのである。

【口譯】　飼飯の海の船にはが、よく風いでゐるに違ひない。海部民の釣り船が、てん〳〵ばらばらに乘り出してゐる、それが見える。

【鑑賞その他】　複雜な情景を統一して感じさせる歌は、かうしたところから赤人に繼承せられてゐる。唯、一・二句が、其條件は訣つても氣分に觸れ難い爲に、後代の人の鑑賞に入りにくい。

或は、海部民の平常の生業を見ながら、いざりの神事と見立てたのか、當代の人には理會出來たのかも知れぬ。

いざりは、恐らく、海の彼方から來る神を迎へる祭りらしい。沖繩の久高島にいざいほうといふ行事があつて、島人はいざりの行事と解してゐる。武庫の海よ。其處はいま、船（フナ）にはの祭りが行はれてゐるに違ひない。沖漁してゐる海部民の釣り船が、浪の上を通して見渡される。

この方になると、沖の釣り船を見て、海の神事を思ひ浮べてゐる樣が、明らかに見えてゐる。但、單に感じたゞけか、かうした歌を作ることが、一種の咒術にでもなつたのか、今日では知る由もない。人麻呂の歌と稱するものは、傳承せられること廣く、又久しい爲に、樣々な附加や改竄が加つて、かうした異本を生ずるのである。

（七）

高市ノ黑人の歌

高市ノ古人感二傷近江ノ舊堵一作歌　二首　或書云（ク）高市連黑人　（巻一）

詞書の註は、例の通り後に加へたものである。歌の質から見れば、黑人に相違なからうと思ふ。古人（フルヒト）說もあるが、其理由は、此處に古人と書いてある、と云ふに過ぎない。其も、歌の最初に古人とあるから、

古人と見たと考へられる。歌から推定すると、詞書が違ふ。捉へ所がない。巻一・二の例を推して見ると、詞書と内容とのくひ違つた例だ。古人説は、何の據るべき理由もない。却つて、黒人と見る方が正しい。歌の第一句の古人から詞書を作つたと見る方がよいと思ふ。

古の人に我あれや、漣の古き宮處(ミヤコ)を見れば、悲しき

古人爾和禮有哉、樂浪乃故京乎見者、悲寸　(三二)

【音訓・言語】 ▼**古**　いにしへの。ふりにしでなくともよい。又、ふるひとと訓むのも、無理の様である。▼**有哉**　あればやか、あらめやか兩様にとれる。あればやとして、あるからかと口譯して見た。らめが融合してれになる類例から見ると、あらうかあるまい、と云ふ否定になる。今のところ、ある筈がないんだ、とする方に見てゐる。▼**樂浪**　さゝなみ。第二音は清む。さゞなみと訓まぬこと。近江の湖水の小浪に聯想して說く說が多いが、よくない。小浪はさゝれなみ或はさゝらなみである。此は近江の地名である。漣の國とでも云ふ所があつたので、滋賀と比良との中程邊に當る。樂浪は本集でも正確に書いた處は、神樂聲浪と書いてゐる。神遊びの寫聲か樂器の名か訣らぬが、こんな文字を遣つたのは、宮廷の樂人が、萬葉集の根本資料に關與してゐたからである。後には遣ひ慣れて、神を略し、聲を省いて、樂浪でも表せる様になつた。大津の宮を漣の宮とも云うたのだ。「漣の大津」と云ふと、隣接地名を出して來てゐるので、近江の國の漣に續いてゐる大津、と云ふことだ。大津は、近江に限らず處々にあつた。滋賀にも九州にもあるので、區別して隣接地の漣と共に言うてゐるのだ。▼**古き**　古びてゐる或はすさんでる様を云ふ。語根はふるで、平安朝になつても、尙、小野ノ小町の歌「わがみよにふる」と言ふ様に、相手にされなくなる事に使つてゐる。寂れて人も來ぬ、と云ふ位。▼**寸**　丈(タケ)・尺(サカ)・寸(キ)など舊尺度を表した語を以て、新尺度を飜譯したもの。

【口譯】 古の人で自分があるからか、沒交渉のやうな、さびれた漣の都の跡を見る時に、心が悲しいことよ。

漣の國つ御神のうらさびて、荒れたる宮處(ミヤコ)見れば　悲しも

樂浪乃國都美神乃浦佐備而、荒有京見者　悲毛　(三三)

【音訓・言語】 ▼**樂浪**　さゝなみ。前に述べた外、神樂浪・神樂波とも書く。其を略した形が此だ。▼**國都美神**　天つ神に對する國つ神、卽、土地の庶物の精靈の、所謂……つみ。其向上した國つ神と稍違つて、此は國魂である。漣の國を治める威力を持つ爲には、此魂の來觸を要する。國魂を社に祀ることもあるが、元は國つ神と別だつたのだ。▼**浦佐備而**　浦は假り字。此は靈魂の游離する狀態を云ふ。さびしい、及び、平安朝のさうざうしなど、皆心の空虛で、魂の身にそぐはないことだ。「國つ御神のうらさぶ」とは、國魂の游離した爲に——近江宮廷の主上から——此國を治める威力がなくなつたのである。▼**荒有**　ありに現在完了としての訓をもたせた例が多い。其威力の根元が御身を離れた爲に、其宮廷も荒れたのだ。▼**京**　本集には、都城と宮廷と二通りに遣ふが、宮廷の方が多い。

【口譯】 漣の國の國魂(クニタマ)の神が、游離せられた。其爲に荒廢してる宮處を見る時は、いとしいことよ。

【鑑賞その他】 既に述べた如く、此歌は精靈と其向上した神の信仰とが、まだ分れ切らない時代のものである。敍事脈は勝つてゐるが、所謂、詠史の形としては、古風でまた別樣な理會を以て述べてゐるところに、愛惜の情が見える。

高市連黑人近江舊都歌 一首 （卷三）

かく故に見じと言ふものを。漣の舊き宮處（ミヤコ）を見せつゝ、もとな

如是故爾不見跡云物乎。樂浪乃舊都乎令見乍、本名 （三〇五）

右歌、或本曰、小辨作也。未審此小辨者（トイフ）也。

これも、右二首と同じ題材であり、表現法が似てゐるので、黑人のものと傳へられてゐたのだらう。だから、一方小辨（セウベン）說もあつたのである。三首ながら人麻呂の「近江舊都之歌」とは、趣きが變つてゐる。口譯だけを添へよう。

こんな有樣なのだから、見ずに置かうと云つたものを。この漣の舊い宮どころを見せ〳〵して、氣のないことよ。

この逆說的な言ひ方が、やはり黑人らしい新しい言ひ方で、奈良朝には喜ばれたものと思はれる。この歌の促す氣分に於いては、卷三の刑部垂麻呂の、「馬ないたく打ちてな行きそ。日（ク）ならべて見ても我が行く 志賀ならなくに」と同樣である。いづれも漢文學の素養が、和歌の發想法を變化

させてゐると見るべきだ。

【言語】 是非解かなければならぬもとなに就いて述べる。副詞。もとなく・もとなしと言ふべきところを、總てもとなで表す。東歌に一つ、うらもとなくもがあるだけだ。從來、この言葉に對して適切な解釋がない。恐らく、平安朝のわりなしに當る言葉で、多くの場合、それに修飾せられるべき形容詞・動詞を略して、意味を深くならせるものと思はれる。語原は不明。尙これに就いては、一昨年の「奈良文化」に出た、山田孝雄博士の考へ、又昨年冬の「國語及び國文學」に見えた、小林好日（ヨシハル）氏の說は、必讀むべきものだ。

二年壬寅太上天皇幸（セル）二于參河國一時歌（ニ）（ノ） （卷一）

何處にか 舶泊てすらむ。安禮の崎。漕ぎ廻（タ）み行きし 枻（タナ）なし小舟

何所爾可 船泊爲良武。安禮乃埼。搒多味行之 枻無小舟 （五八）

【音訓・言語】 ▼**船泊爲良武** ふなはてすらむ。泊ははつである。到著或は著岸すること。船がゝりしてるだらう。上の可は感動。▼**安禮之埼** あれのさき。大寶二年三河御幸の時の歌だから、大體、尾張・三河の地名と見えるが、同時に出來た長ノ奥麻呂の歌は遠江引馬野の作であるから、此亦遠江のものとして、後の新居の邊だとしてゐる。其點に不安がある。▼**搒多味** こぎたみ。搒の字は既に述べた。たむは、曲線狀になること。廻る意。▼**枻無小舟** たなゝしをぶね。普通の船は龍骨（カハラ）の上にかじき、其上に重つてゐる枻との三

部分から出來てゐる。元來は、かはらの部分に當るものゝみから出來てゐた。卽、獨木舟の形だ。水跳ねを避け、悪魚の攻撃を防ぐ爲に設けた板が發達してかじきとなり、其上に兩側面につけた板が、更に舟邊となつて蜓と言はれた。だから、楫無しは、かはらだけの舟で、原始的な形に近いものだ。獨木舟でなければ、田舟の樣なものであつたらう。

【口譯】 今頃、何處に行つて、船がゝりしてゐるだらうよ。日のある頃、安禮の崎、其處を漕ぎ廻つて行つた楫なしの舟、それが。

【鑑賞その他】 晝間、立つてゐた前をよぎり去つた船の印象が、夜復活した、極めてかすかにして靜かな氣分を詠んだもの。かうした境地は、他の人に見られない。夜になると、鎭魂の呪術をする爲に、其に適ふかうした夜の歌が發達したのだ。かう言つた類型は數多く、而も優れたものが澤山ある。夜の瞑想の歌のうち、單純で圖抜けたものだ。

あともひて　漕ぎ行く船は、高島の安曇の水門に、泊てにけむかも　（卷九）

足利思代　撿行舟薄、高島之足速之水門爾、極爾監鴨　（一七一八）

この歌は、卷九に高市ノ歌一首とあるものだ。口譯だけして見ると、

澤山ひきつれて漕いで行つた船は、もう今頃、高島の郡の安曇の川口に、船がゝりしてしまつたらうよ。

前の歌と、大體似た傾向のもので、やはり夜の靜寂に思ひを潛めてゐるのだ。但、前の歌ほど特殊な處はなく、興味が普遍的である。

我が船は、比良の港に漕ぎ泊てむ。澳べなさかり。さ夜更けにけり　（卷三）

吾船者、枚乃湖爾撿將泊。奥部莫避。左夜深去來　（二七四）

何處にか我は宿らむ。高島の　勝野の原に、この日昏れなば

何處吾將宿。高島乃　勝野原爾、此日暮去者　（二七五）

夜の靜寂と夜の鎭魂の目的の相反映した歌として、尙二首ある。かいつまんで述べる。

【音訓・言語】 (一)**▼比良の港**　枚は片と同じくひらと訓む。比良川の川口。**▼澳べなさかり**　この部は方向を示す助詞へではない。澳べに、と譯すべきところだ。(二)**▼高島の勝野**　高島郡のうち高島鄕。今、湖水の西岸北部。鬱庭野を北の限りとして、安曇川の兩側に擴つた地域。勝野は、その南限。大溝村明神崎附近。**▼暮去者**　くれなば。去は時の助動詞の第一變化なに使つてゐる。が、語自身は將然・已然分岐以前の職能を殘してゐる。單なる音韻變化ではない。但、將然と見て說けぬ事はない。既に述べた通り、「我は宿らむ」の條件として、意味はぬればでも、形式はなばでなければならない點もある。

【口譯】 (一) おれの船は、あの比良川の川口に漕ぎ止めて、船がゝりしようよ。澳の方に離れて漕ぐな。夜が更けたことだ。

(二) 何處らに、おれは泊らうよ。この高島の勝野の曠原で、今日の日が昏くなつてしまつたとしたら。

【鑑賞その他】 後の歌は、羈旅の淋しさが、如何にも個性化せられて出てゐる。この點に於いて、最後の「婦負の野」の歌が、黒人のものとなつたと推定せられる理由かも知れない。

高市連黒人歌 二首 (巻三)

吾妹子に、猪名野は見せつ。名次山 角の松原。何時かしめさむ

吾妹兒二、猪名野者令見都。名次山 角松原。何時可將示 (二七九)

いざ子ども。大和へ早く。しらすがの眞野の榛原 手折りて行かむ

去來兒等。倭部早。白菅乃眞野乃榛原 手折而將歸 (二八〇)

黒人妻答歌 一首

しらすがの眞野の榛原。行くさ 來さ、君こそ見らめ。眞野の榛原

白菅乃眞野之榛原。往左 來左、君社見良目。眞野之榛原 (二八一)

旅中に愛人のことを言へば、直に紐を聯想する風な歌は、當代以後にも跨つてゐるが、其と變つて、既にかうした羈旅相聞の新しい形を持つてゐたことの例として擧げる。尚、此後に出す「二見の道」の二首など〻併せ見ると、或點まで黒人自身創作したもの〻様に思はれる。恐らく、黒

人家集があつたなら、さうした種々の試みの行はれた跡が見えるであらう。

【音訓・言語】 (一)▼**猪名野** 攝津國河邊郡猪名川の中流地方の曠野。池田・伊丹に亙る間と思はれてゐるが、古くは、尼ケ崎邊まで擴つて居たであらう。唯この歌によれば、奈良から二通りの道が思はれる。普通の猪名野を通るならば、山城の久世附近から川を渡つて、後世の西國海道線に沿うた道を來たと見える。又、猪名野を下流の神崎川邊まで考へれば、難波邊を經過して行つたものと思はれる。▼**名次山** 古語すくは、又しくとも言ふ。接續近似する意味。次・如・及など宛てる語である。西ノ宮の北西に連つてゐる丘陵。角の松原も、其に隣接した地であつたのだらう。倭名抄、津門鄕のあつた地が角であつたとして、今の西ノ宮東南から北東へ亙る地方だとしてゐる。(二)▼**いざ** 誘ひかける言葉。時々いでと混同することがある。▼**子ども** 多く從屬・部下の人たちに言ふ。但、旅行宴歌の類型として此句を使ふ習慣があつたから、おほよそ反省なく用ゐたものと見てよからう。▼**大和へ早く** 山上ノ憶良の「いざ子ども。早も倭へ。大伴の御津の濱松 待ち戀ひぬらむ」は、此歌の影響と見てもよい。文章の前後から見て、早く行かう、早く急げなどの意が出て來るのだ。▼**しらすがの眞野** しらすがも地名であらう。眞野・しらすが近接して居つた爲に、かう言ふのだらう。しらすがは、此歌によつて三河に考へる人もあるが、前後の關係から見れば、遠江でもよい訣だ。地名の永續を信ずる事が出來れば、後の白須賀を其と言ふことも出來よう。眞野は分布の廣い地名。單に野と云ふことではない。▼**榛原** 榛、この字ははりの木、卽はんの木である。此皮を煮て茶染めの汁を取るが、本集で、嚴重に木本のはりと考へられるものは尠い。同じく草本ではりがあつた。本草では王孫と書き、倭名ぬはり又はつちばりに當る。曇華科だんどくか或は百合科に屬するものらしく、花の汁は濃い鬱金色を捺

すことが出來る。榛原などゝあるのは、みな此だ。歌に、「榛に匂ひて行かむ」・「衣にすりけむ。眞野の榛原」など言ふのは、類型に類型を重ねた結果、榛原に行つて直に色のつく筈はないのだが、かうした空想的な表現が出來たのだ。さすがに黒人は、「手折りてゆかむ」と衣に摺る料にするつもりを述べてゐる。此等の歌、有名であつたと見えて、「古にありけむ人の求めつゝ衣にすりけむ。眞野の榛原（巻七）」・「白菅の眞野の榛原。心ゆも、思はぬ君が衣にすりつ（同じく寄木）」などある。殊に木と見た處から見ても、此等が奈良朝末の歌人家持輩をまつ迄もなく、傳襲模倣をうけたものである。㈢▼**行くさ來さ**　細部に於いては、尚不明である。が、大體、行きしな歸りしなといふことらしい。▼**君こそ見らめ**　社の字をこそと訓むこと、本集以前からもあつたらしく、神名・神社名にもついてゐる。通常、立願の趣の表れを、來そと祈るところから、社にこそその訓を付けたのだとなつてゐる。尚疑問である。貴方は見てゐられませう、と強く言ひ切るところから、餘勢が殘つて、が私は見てゐないの意が出て來るのだ。

【口譯】㈠　いとしいお前に、猪名の原は見せた。さて、わたしの今見てゐる名次山、其處の角の松原、それを何時、これだと見せようか。早く見せたいものだ。

㈡　さあ者どもよ。國へ早く急がうぢやないか。さて、このしらすがの傍の眞野の榛原。其處の榛を、暇がないから、折つて持つて行かうよ。

㈢　仰しやる通り、しらすがの眞野の榛原。行くといふては、歸るといふては、貴方は十分見ていらつしやるでせう。が、わたしのまだ知らぬ、その眞野の榛原よ。

【鑑賞その他】㈠　同じ旅行の歌か、それとも前回の旅を思うての歌か。先づ、「わが欲りし野島は見せつ。底ふかき　あごねの浦の珠ぞ　拾（ヒリ）はぬ」（巻一）といふ古い御製の今樣に現れたもので、歌は朗かなものである。但、旅宴の歌だから、かうした即興を述べたゞけで、飜案の興味を覺えさすに止めたものらしい。

㈡　榛染めは、小忌衣の捺染の料だ。さうした旅中の祭事の印象が、唯の羇旅宴歌にも、傳襲上現れて來るのだ。

㈢　二・五句繰り返しの形は、聲樂關係を十分に思はせる一種の古格であるが、歌の調を單純化する。宴歌として適切な、無内容な氣分を表現する。これも、妻の答へた形で黒人が作つて、同伴者全部の興味を唆つたのであらう。

妹も　我（ワレ）も、一つなれかも、三河なる　二見の道ゆ　別れかねつる　（巻三　羇旅）

一本に云ふ。　三河の二見の道ゆ別れなば、わが夫（セ）も我もひとりかも行かむ

妹母　我母、一有加母、三河有　二見自道　別不勝鶴　（二七六）

一本云。水河乃二見之自道別者、吾勢毛吾毛獨可毛將去

【音訓・言語】▼**二見自道**　三河寶飯郡御油を起點として、東へ海道が分岐して、濱名湖を渡る濱海道と、其を迂廻する姫海道の二つとなり、引馬（ヒクマ）・濱松邊で合つた。其姫海道を二見の道と說いてゐるが、成立から

見て、不都合である。二見は地名であらう。

【口譯】 いとしい女も俺も一つ身であるからか、三つ三河の、二つ二見の道をば、別れて行きかねてゐる。

三つ三河の、二つ二見の道を別れて行つたら、いとしい私の男も、私も一つ一人行かなければ、ならないだらうよ。

【鑑賞その他】 總論に述べた様に、新しい歌體論の標本として作つて見た歌で、單なる遊戯とばかりは見られない。一二三を正逆に言ひ變へて、二首の唱和を作つたもので、此亦、前歌の様に黒人一人の作である。別るといふのも、道に別れ進む義ではなく、唯行く者と歸る者ととつてよい。姫海道・濱海道の如き偶然の一致は、傳説・文學には、幾らもあることで、拘泥する必要はない。意味の理會なく、形の類似から、問答・相聞の歌の片方を一本とした例は、他にもある。類聚古集・古葉略類聚鈔の本文に、「一本云」がない。

旅にしてもの戀しきに、やましたの朱(アケ)のそぼ船、沖に漕ぐ見ゆ (巻三 羇旅)

客爲而物戀敷爾、山下赤曾保船、奥榜所見 (二七〇)

作良(サクラ)田へ鶴(タツ)鳴き渡る。愛知(アユチガタ)潟潮干にけらし。鶴鳴き渡る

櫻田部鶴鳴渡。年魚市方鹽干二家良之。鶴鳴渡 (二七一)

磯(シ)歯津山うち越え見れば、笠縫の島漕ぎ隱る、楫(タナ)なし小舟

四極山打越見者、笠縫之島榜隱、楫無小舟 (二七二)

磯の崎漕ぎ囘み行けば、近江の湖(ウミ)八十の港に、鵠(クヒ)さはに鳴く

礒前榜手囘行者、近江海八十之湊爾、鵠佐波二鳴 未詳 (二七三)

住の江の榎津(エナツ)に立ちて、見渡せば、武庫の泊(トマリ)ゆ 出づる船人 (巻三)

墨吉乃得名津爾立而、見渡者、六兒乃泊從 出流船人 (二八三)

黒人の羇旅の歌八首の中、類似の傾向のものの四首及び、同じ巻の「高市ノ連黒人ノ歌一首」とあるのを一括して云ふ事にする。現存の黒人の歌十八首の中、廣水面と其處を行く船の遠望を歌つて、更に、幽情を寓するものが、可なり有るのは、當時新手法と見られてゐたのだらう。

【音訓・言語】 (一)▼**山下** 赤埴の山の崖方に露出してゐるのをとつたから、とする説に從ふ。枕詞。▼**赤曾保舟** そぼは土の色、或は土の名。朱色である。赭土(ソボニ)・まそぼなどいふ。そび土を塗つた船が、そぼ船で、其赤いことを表す爲に、更に、あけので修飾したのだ。洋上を行く船のする呪術である。官船とする説もあるが、當時の一般の民俗であつたのだ。(二)▼**櫻田** 倭名抄、愛知郡佐良郷とある。熱田の西南に方る海岸。知多半島の咽喉部。佐良の低地部で、田を作るからの名。飛鳥田・衾田の類。▼**年魚市方** 年魚あゆに市を熟せしめて、あゆちと訓むこと本集以外にもある。愛知潟(アユチガタ)、熱田附近の遠淺の海。所謂宮の渡し、熱田を中心として愛知(アユチ)縣があつた。……縣(アガタ)の地方の潟と云つた聯想から轉じたこと、海上潟(ウナカミ)の海上縣に於ける例だ。

(三)▼**四極山**　極ははつの宛字。又磯齒津とも書く。大阪の南、住吉の北。丘陵の下に在つた津。古代には、此から倭への道があつた。▼**笠縫之島**　後代は陸地になつたゞらう。大阪灣の三角洲の一部か。今、深江を言ふのは誤り。▼**榜隱**　こぎかくる。自動四段。かくるゝと同じ。(四)▼**磯前**　いそのさき。磯崎と訓んで地名とするのは、わるい。▼**手回**　囘一字でたみ・たむであるのに、更に手(タ)を添へて、訓を確かにしたのか、それとも、手のたに對して、囘をみの假名に遣つたものか。▼**近江海**　「あふみのみ」と訓むのもあるが、すべて、「あふみのうみ」がよからう。近江の國の湖水。うみは廣い水面を云ふ。池・沼・湖水・海洋に通じて云ふ。▼**八十之湊**　野洲郡・野洲川の川口。やすともやそとも云ふ。▼**鵠**　たづ。白鳥(シラトリ)をたづと云つたのだ。鵠の字を書いても、必しも、くゞひとは定らない。字と訓を融通しあつたのだ。▼**未詳**　八十港所在不明の由を書き入れたのだ。(五)▼**墨吉**　又住ノ吉(スミエ)或は住ノ江(スミエ)。遠からずして住吉(スミヨシ)と直譯的に訓んだ。▼**得名津**　住吉に接した津があるが、多く其南方にあつたものと見てゐる。確には知れぬ。▼**六兒之泊**　武庫川々口、即、武庫の水門附近か。或は「泊」と云ふ地の性質上、和田岬の内側と見る方がよいか。不明。

【口譯】　(一)　旅に居つて、やるせなくさへあるのに、その時朱い丹塗りの舟が、沖で漕いでゐる。それが見える。

(二)　作良の低地へ鶴が鳴いて飛び渡る。それよ。愛知潟、そこでは、潮が引いて了つたに違ひない。あれ、鶴が鳴いて飛び渡る。

(三)　磯齒津山、それを越えて見た時に、向うにある笠縫の島かげに、這入つて行く枻なし小舟よ。

それが見える。

(四)　巖石の立つてゐる岬、それを漕ぎ廻つて行つた時に、近江の湖水、その野洲川の川口で、鵠が一ぱい鳴いてゐる。

(五)　住の江の脇の榎津の岸に立つて、ずつと眺めると、武庫の船泊(フナドマリ)をば、出離れる船人、その船が見える。

【鑑賞その他】　(一)　官船の都へ行くを羨む心持ちと考へなくてもよい。敍景詩として明確な意識で、朱のそぼ船を捉へた、と見ればよい。

(二)　赤人の「和歌の浦に潮みちくれば、潟をなみ、葦邊をさして、たづ鳴き渡る」は此摸倣だ。かの歌の趣向を持ち過ぎてゐるのに對して、此は單純なだけに優れてゐる。唯、例の通り二句五句重複する形が、聲樂としての單調と、論理的な遊戯感を含む。

(三)　此歌數多の類型歌を生じた。單純な趣好が、何時までももてはやされたのだ。古今集に「しはつやまぶり」として輯められたのを見れば、聲樂の上からも喜ばれたのだ。

(四)　此歌、やはり、聲樂として喧傳せられた爲か、「近江海　湖者(ミナト)八十(ヤソヂ)」(卷七)「近江のうみ泊八十有(トマリヤソアリ)。やそ島の島の崎々……」(卷十三)と云つた類型を生んだらしい。尤、泊八十有の方は、更に黑人の歌の前型でないとは云へぬ。

(五)　此歌などは、恐らく、敍景詩として非常に新味を以て迎へられたものであらう。唯、眞の寫

生でなく、空想を交へてゐる點は、餘り手に取る様に印象鮮明に、事實を枉げ過ぎた上に、其船の船人の擧動をまで表さうとした事である。けれども尙、こゝに船人を出して來たのには、今からは訣らない理由があるのかも知れない。

ふく來ても、見てましものを。山背の高槻の村　散りにけるかも　（卷三　羇旅）

速來而母、見手益物乎。山背高槻村　散去奚留鴨　（二七七）

【音訓・言語】 **○夙く來ても**　もつと以前にといふ意を含んでゐるのだから、はや來ても は不適當で、とく來てもの方が勝つてゐるが、訓み方が尙あるかも知れぬ。**○見てましものを**　ては時間を表すよりも、音調に關係がある。ましに、て置いたらよかつたものを、の意があるのだから。**○山背**　もと、奈良坂一帶の山彙の裏側の義から、木津川の南岸から北岸に擴げて言つたのを、更に山城一國に擴げたもの。その以前は、木津・淀兩川合流地を中心に、漠然と山背を稱したらしい。**○高槻**　攝津國三島郡高槻。汎稱としての山背に含まれたと見られる。又、所謂古い山背地方と隣接してゐる爲に、竝べ言ふ地名例をとつたのかも知れぬ。新訓萬葉集「たかきつきむら」と訓んでゐる。生田耕一氏は、山城綴喜郡大賀、高神社の所在地附近を言ふ地名とし、槻村を槻の樹林と考へて居られる。この說、今迄のうち最優れてゐる。

【口譯】 こんな事なら、もつと以前に來て見て置いたらよかつたことよ。山城附近の高槻の名に負ふ槻の林が、散つてしまつたことよ。(一)（……山城地方の多河の鄕の槻の林が……）——(二)

【鑑賞その他】 高槻の村の訓法竝びに解釋に就いては、いろ〳〵あつたが、近時は略、高槻の村の槻の葉或は口譯の様に說いて、「散りにけるかも」と、突如として言ひ續けたと解することから來る、力强い語調を古風だとしてゐた傾きがある。生田氏の說は、最當を得たやうに思ふ。併し、この歌に就いて持つ今人の聯想が棄て難くて、假に口譯(一)を試みた。

太上天皇、幸二于吉野宮一時、高市ノ連黑人ノ作歌　（卷一）

大和には　鳴きてか行らむ。呼子鳥。象の中山　よびぞ越ゆなる

倭爾者　鳴而歟來良武。呼兒鳥。象乃中山　呼曾越奈流　（七〇）

【音訓・言語】 **○呼子鳥**　諸說あるが、その鳴き聲のわこと聞えるところから付いた名で、恐らく郭公、即かんこ鳥のことであらう。**○象**　きさ。西域の歸化人などから得た傳說的知識であらうが、象をきさと名づけた訣は知れぬ。**○象の中山**　中山は道のよぎる丘陵で、後世の何々越えに當る。おほよそ、今の宮瀧の南岸に推定せられて居るが、訣らない。現存の地名喜佐谷も、古への象の中山の地に當るかどうか疑問である。

【口譯】 鳴いて、倭へは越えて行かうとしてゐるんだらうよ。あの呼子鳥。それが象の中山、其處を高聲に鳴いて越えることよ。

【鑑賞その他】 黑人の正式な宴遊の歌として存する唯一首である。此にも、後に類型が出來てゐる。「來らむ」を普通口譯の様に行くに解してゐるが、此處は普通の「來らむ」で說いてよくない

かと思ふ。

倭へは、この鳥が、いつも鳴いて來てるんだらうよ。あの呼子鳥、それが……。と譯すると、歌としての品位はおちるが、如何にも卽興歌らしいところが出て來る。而も、象山・象の小川等を吉野川の南岸とする說に多少の疑問が起る。吉野川の北岸にあつて、飛鳥・藤原への山越え道になつて居り、其邊から流れ出る川の名でもあつたと思はれるのである。此處に言ふ倭は、吉野の山地に對して云ふので、宮廷の在り場處なる高市・十市・磯城附近、狹く見れば、飛鳥・藤原地方を指すのである。——大寶の太上天皇は、持統天皇でいらせられる。

高市連黑人歌　一首　年月不審　（卷十七）

婦負（メヒ）の野の薄（スヽキ）押し靡（ナ）べ降る雪に、宿假（カ）る今日しかなしも

寶比能野能須々吉於之奈倍布流由伎爾、夜度加流家敷之　可奈之久於毛倍遊　（四〇一六）

右、傳ニ誦此歌一ニ三國ノ眞人五百國是也。

【音訓・言語】 ▼**寶比**　めひ。越中國婦負郡。歌では、婦負川の兩岸地方をさしてゐる。後にはねひと言うた。▼**夜度加流**　やどかる。宿を借りるのか、假り廬（カホ）を構へて假り泊りするのか、此言ひ方では訣らぬが、姑く泊めて貰ふ方にとつて置く。▼**可奈之久於毛倍遊**　かなしく思ほゆ。倍は、へ・ふと訓むから、ほゆで よい。今日がかなしい、と云ふのは、今日の今の自分がいとしい、と云ふことなのだ。けれども、尙當時のかなしなる語の用語例の一部を考へて見ると、魂が愛人の方へ游離してゐる狀態を言ふ義を殘してゐる。卽、

人を思ひ心の寂しく空しいあり樣なのである。

【口譯】 婦負川の曠野に生えてゐる薄。それを押し伏せて降る雪の中で、假り小屋を造つてゐる今日の今がいとしう感じられる。

【鑑賞その他】 心細いやうな、身が緊つて來る、いゝ感じのする歌だ。黑人が越中に旅した時に作つたものが、土地に傳承せられてゐたのであらう。大伴家持が、越中守として北國に行つた折に、此歌を採集した。家持は黑人を尊敬してゐたから、こんな歌が偶然にも出て來たのだ。黑人の歌は、此で打ち止めになつてゐる。

續萬葉集講義

昭和十年六月・昭和十一年一月「短歌研究」第四卷第六號・第五卷第一號

(一)　天武天皇の御製

天皇御製ノ歌

みよしぬの　みかの嶺(ネ)に、時なくぞ　雪はふりける。間なくぞ　雨はふりける。』

その雪の時なきが如、その雨の間なきが如、隈もおちず　思ひつゝ(コ)ぞ來し。』

その山道を　（二五）

天皇御製歌

三吉野之　耳我嶺爾、時無曾　雪者落家留。間無曾　雨者零計類。』其雪乃時無如、其雨乃間無如、隈毛不落　思乍叙來。』其山道乎

【音訓】▼**耳我嶺**　みかのね。「或本歌」に、耳我山とある。山峯の名が、「耳我」であつたのだ。守部は、前者には嶽を脫したものとし、後者には、嶺を脫したものと見て、「嶺」が卽ねを表し、みかねだとしてゐる。さうして、みかねの嶽・みかねの山など言ふ金御嶽(カネミタケ)に近い訓み方を附けようとした。巧である。此山名に關

するだけの事は、後に述べるが、山名をかねと言ふと見ない方がよいのではないか。仙覺の、「みか」と訓をおろした前後、すべて、みゝかであつた。みかと訓んだ根據不明。但、誤りではない樣だ。守部の說は之に誘導せられて出たのだ。固有名詞に領格の助辭「の」を入れたり、外したりすること、古くは自由であつた。みかね・みかのね・みかのやま、皆同一である。更にみかねゝ山と謂ふやうな呼び方も出て來る訣だ。だから山を意味するね・やまを外すと、名稱は「みか」であつた事が訣る。唯、みが・みがね・みかねなど、濁るかどうかは、疑問だ。萬葉の眞の用字例から見れば、「我」は濁らずともよいのだ。私は、みかと淸みたい。古く「みゝかね」「みゝかのみね」とあるが、此中には、「みゝが」と濁つて訓むつもりのがあつたに違ひない。近代多く、「みゝが」。みか・みかね二通りの外は、著しい誤訓。春滿の耳梨・耳成の誤字とする說も、地理不案內から出た臆說に過ぎない。▼**落家留**　**雫計類**　ふりける。落・雫をふるに宛てた例は、極めて多だ。▼**間無曾**　まなくぞ。間の字ひまにも使ふが、此處は、「ま」に定めてよからう。古義以前、大體「ひま」としてゐた。▼**時無如**　**間無如**　「……がごと」と讀むのが、普通であり、當時あつた用法だが、「……ごと」▼**思乍叙來**　叙は原音 Zyo、直音化して Zo、之を次音と言ふのも、太田全齋の方法だが、便利だから、利用する。

【口譯】この吉野のみかの峰には、時の差別もなく雪は、いつも降つてゐることだ。しつきりなく雨は、何時も降つてゐることだ。

おれは、あなたの事を考へて、その雪の時の差別もない様に、しよつちう、山道の曲り角毎に立ち戻り、ため息づく程、思ひ〳〵してやつて來たことだよ。そのみかの峰の山道をよ。

【言語】 **○みよしぬの**　吉野と地名を言ふのとおなじだ。之は、枕詞を示す一つの格となつてゐた。枕詞の格には、「の」を伴はない古格を傳承したものもあるが、後程「の」を盛んに使つた。「の」を以て、如く・ではないがなど譯してよい譬喩的な意義の轉換を含めてゐるのが常である。この「之」などは、其とは別だが、枕詞の格から言へば、意義の差こそあれ、大した區別は感じられない。「之」がある故に、三吉野と言ふ語の描寫力が輕くなるのだ。但、此場合などは、稍違ふ様に見える。「みよしぬのよしぬ」と言ふ枕詞的呼應において、「吉野」に對して、「みよしぬの」は、之を收約する様な姿を取つて了つて居る。同じ地名のくり返しなるところから、枕詞そのものが、描寫力を張つて、根部になる「よしぬ」を併呑したのである。「まくまぬ——眞熊野の熊野」「さひのくま檜隈（ヒノクマ）」の如き形は、恐らく同名異地の多かつた地名から、其本源地又は最著しい處を區別して表す爲に、採つたものらしい。其が慣用の結果、枕詞が根部に代る勢力を持つて來る約束によつて、「みよしぬ」「まくまぬ」で、直に地名を示す習慣を生じたのだ。だから、かうした枕詞出の地名は、必今一つ以前に「みよしぬの……」「まくまぬの……」と言つた形のあつた事を考へねばならない。**○みかのねに**　平安朝以來かねのみたけ或は單にみたけと言ふ。

又字を宛てゝ、金ノ御嶽、更に金峰山（キンブセン）など書く。此歌から見れば、みかが山の名であつたのだ。其に山を示す嶺（ネ）なる語が割り込んで、かねの方が重く見られ、みは接頭語・敬語の扱ひを受けて、脫落せられるやうにもなつた訣だ。從つて嶺と言ふ語が二重について來るやうにもなつた。古くはみかねとも、みかのねとも謂つた訣なのだ。**○ときなくぞ　まなくぞ**　對句に使つて居るのだから、殆同義語程近づいてゐるのである。「時なく」「間なく」の方は、何時と時に區別なく、常住など言ふ意。ある狀態が持續せられてゐる事を示す副詞である。「間なく」は、隙き間のない狀態を現す語で、「しきりなく」と譯するのが適切である。但、「ま」も亦、時を意味する語だから、空間の「ま」でなく、時間の上に言ふものと見て、「時なく」と正確に對句になつて居るものと見てよい。**○ふりける**　このけるは經驗又は現實を表さうとするものではない。ある事象を知識化して示す場合に使ふのである。だから、過去でも詠歎でもない。「以前から言はれてゐるところでは、……言ふ風であるのが、常である」と謂つた形なのだ。

○そのゆきの　そのあめの　で、今までの詞句を一擧に譬喩化するので、「その」は、さうした停頓の辭である。こゝに到つて、「みよしぬの……雨はふりける」の詞章は、序歌となるのである。但、最後の句に到つて、又關係が變化して來る。**○くまもおちず**　「も」は副詞句を作る語尾で、近代の感じでは、句の最後に移して考へればよい。くまおちずもである。隈は隅とおなじである。が、入り込んだかどに當る所。山のくま・河のくまなどがある。道が山の隈に行き當つた處が道

の隈である。其地點に到つて道は、屈折する。だから、曲り角と言ふ事にもなり、必しも山阿（ヤマクマ）に行きついた地形でなくとも言ふ。「おちず」は洩るゝ事なくで、「隈々すつかり」であり、「どの道の隈においても必」と言ふ事になる。**○おもひつゝぞこし**　此御製の中には、君とも、妹とも現れないが、此歌をお與へになつた意中の人があるのである。道の隈を曲る毎に山を高く登り、その人の家のあたりから遠ざかる思ひがするので、思ひ出されてならなかつたのである。隈毎に思ひ〳〵して來たと言ふのは、歌の類型的な表現である。「思ひつゝぞ來る」でもやはり、「來し」とおなじ過去表現と言ふことにとるのが、古意である。だが、「思ひ〳〵してやつて來てゐる」と意味にとることも、誤りだとは言へない。**○そのやまみちを**　この一句で、今まで序歌の一部のやうに感じられてゐた「みよしぬのみかのね……」が甦つて來て、意義根部に這入つて來る。「を」は「をば」でなく、「よ」であることは勿論だ。近代風の感じを尊重すれば、「……よ。それを」と言ふ風に見れば、全然古風に反く訣でもない。

【鑑賞その他】　この御製、元より眞に御製であつたか、どうか保證せられない。さやう信ぜられて久しいものだから、單に眞作と言ふよりも、歴史的價値は高まつて居る訣である。天皇と吉野との深い交渉や、其入山の動機を傳説的に知つてゐる世間からは、この歌を御製と定め、さうして如何にも、おいたはしい感じを導きとして感じたものと思はれる。かういふ歌は、さうした背景を心に持つてこそ、表現の隱微な、類型から來る倦怠感も救はれるので、古代歌謡の價値は、

多くさう言ふ點にかゝつて居たのではあるまいか。

ある本の歌

みよしぬの　みかの山に、ときじくぞ　雪はふるとふ。間なくぞ　雨はふるとふ。』
その雪のときじくが如（ゴト）、その雨の間なきが如、隈もおちず　思ひつゝぞ來し。」
その山道を　（二六）

右、句々に相換れり。因つて、此（コ）に重ねて載せたり。

或本歌

三芳野之　耳我山爾、時自久曾　雪者落等言。無間曾　雨者落等言。』其雪不時如、其雨無間
如、隈毛不墮　思乍叙來。」其山道乎

右句々相換。因此重載焉。

（ことわり書き）　或本歌については、尚相當に書かねばならぬものがある。近い月ごろに、之は別に書いて、この雜誌の卷末に附けて貰ふことにしたい。

天皇幸（セシ）二于吉野宮（ニ）一時御製（ノ）歌（ウタ）

よき人の　よしと　よく見て、よしと言ひし吉野　よく見よ。よき人よ。君　（二七）

紀に曰ふ。八年己卯五月、庚辰朔甲申の日、吉野ノ宮に幸したり。

洴人乃　良跡　吉見而、好常言師芳野　吉見與。良人四。來三

紀曰、八年己卯五月、庚辰朔甲申幸二于吉野宮一。

【序註】 ▼**天皇**　前の歌同樣、天武天皇である。幸二于吉野宮一時とあるのを、左註には日本紀を引いて、八年五月の行幸だらうと言ふ暗示を作つて居るが、當つて居るとは思はれぬ。上代の史實は、記錄に載せられなかつたものが多く、稀に記錄せられたものだけを、日本紀その他の史書が、資料としたのだから、正史にあるからと言つて、譬へばこの「行幸」の件の如く、何回となくあつたに違ひない吉野行幸を、一項の記事を以て規定するのは、却て誤つた方法である。殊にこの天子の樣に、卽位以前も吉野に御隱栖あり、その後も、屢お出遊された事が想像せられ、其宮廷の慣習から、持統天皇の頻繁な行幸があつたらしく思はれもするのだから、尙以て何時と定める事が出來ない。寧、吉野宮と言へば、この帝を思ひ浮べる所から、この歌が、この御代の御製と傳へられたのではないかと思はれる位である。吉野宮は、この帝御隱栖以來、皇室御領の一つとして、傳襲せられる樣になつてゐたのであらう。譬へば、蘇我氏の舊地島邸が、——恐らく——宮廷に沒收せられて、島宮として繼承せられた樣に。

【音訓】 ▼**洴人**　よきひと。淑の一態「洴」が、書き拗げられたものである。奈良朝以下、この形は屢見えてゐる。山田孝雄翁は旁の形は、「叔」の隷書「尗」から出て居るのだとせられた。諸家の說、大體よきひとに一致して居る樣だ。定說と見てよからう。淑は善であるが、日本における**よきひと**との內容は廣い。▼**良跡吉見而好常言師**　よしとよくみて。舊說に少しく「よしとよきくみて」「よしとよしみて」を採るのゝあるのが、異風な位だ。此も定說と見てさし支へはない。「常」を「と」と訓むこと、(二)の歌に述べた。和訓

「とこ」のこを脫却したのである。▼**吉見與**　よくみよ。よしみよとする舊訓の外は、古い異訓は凡、誤字であらう。▼**良人四來三**　よへひとと見える訓のある本は、「キ」の前型「ヽ」である。やはり「よきひと」だ。良人をよしとして、「よしとよくみて」をかへして、「よしとよくみつ」と亂めたのだとするのが、一等異風だ。**四來三**には、諸說がある。「よくみつ」「よくみよ」「よくみ」などあるが、現代では「よくみつ」に據る人が多く、殆定說の樣になりかけてゐる。美夫君志が採用して以來、荷田御風の說が有力になつて來たのだ。だが、私は最舊訓によつて、「よきひとよきみ」でなければならぬと考へてゐる。

【口譯】　昔居つたと言ふよい人が、よく思ひ見て、よい處だとして、あゝよいと言つた其から名の起つたこの吉野よ。よく思ひ見られよ。そのよい人と同じよい人なるあなたよ。

【言語】　**○よきひと**　淑人の字義は必しも適切に據つて居ない。淑人は君子と同義語だから、君子として見ても、凡は當るが、少し漢意が强きに過ぎるかと思ふ。尤、儒學・漢文學式の發想は多く採り入れられて居る萬葉集だが。字を宛てた人は、さう言ふ理會の下に、この御製を感じて居たのだらうが、歌自體は、そんな考へ方からは、自由であつたと見る方が、ほんとうだらう。之をうまひとと、訓んだ學者のあるのは、意義があるのは、意義がなく、社會的に顯貴として、肯ひ認められた階級の人々を言ふのがうまひとだが、其に近い意である。さうすると、淑人・君子にも、語義どほりに近よつて來るので、上流の人、大體に天子をさし奉る樣にも見える。「よしと言ひし」の項に述べるつもりであるが、其よりももつと、漠然とし

た意義に亙つてゐるのではないか。歴史上の天皇・偉人などの考への外、飛鳥朝には既に盛んに出て居た神仙などが這入つて來て居るのではないか。

歴史的に言へば、吉野に關係の深く入らせられる　雄略天皇などを斥すのでもあらう。又、この時代には、從來の山人或は山神に仕へた種族の人々に對する記憶が、神仙的の色彩を佩びて現れて居る。さうした民俗のあつた時代だ。殊に土地が吉野だけに、一層其が思はれるので、此「よきひと」は、神仙を斥すのではないかとも考へられる。大伴仙・久米仙・安曇仙など言ふ類のよき人と見ても、不都合は感じられない程だ。私の考へは、此側に傾いてゐるのだが、假りに、天子・偉人のその代表の方として、雄略帝を考へると、「みえしぬのをむろが岳に……（古事記）」「やまとのをむらの岳に……（日本紀）」の御製は、元來國見の歌としての成立を示してゐるのだから、追求して行くと、元は國ぼめなどの意義が深かつたのではないか。「からごろも著　奈良の里の島松に、玉をしつけむ　好人もがも（卷六）」「いもがひも　ゆふや川内を　いにしへの淑（？）人見きと、此を誰か知る（卷七）」「妹がりと　新漢ノ嶺に茂み立てるつま　松の木は、吉人見けむ（卷九）」の「よき人」と、「與伎比止乃現目に見けむ　み足痕すらを　我はえ見ずて、岩に彫りつく。珠にゐりつく（佛足石歌）」では、稍距離があるやうに見える。が、後の方も歴史的確實性よりも、傳說的な色彩を含んだ言ひ方と見た方がよい。凡、「よき人」は、神仙の樣なものを意義中心に据ゑて居る事が察せられる。

○よしとよくみて　よしと思ひて、よく見、さうしての意だから、かつきりと譯する爲には、「よく見てよしと思ひ」と逆に說いても同じである。此よし・よくには我々が考へるよりも含蓄がある。「よく見て」は熟々見てゞはない。心豐けく見てなど異譯した方が當るのだらう。枕詞の「みこゝろを　よしぬ」と言ふ呼應する形は、之を暗示してゐる。「御心よ。よしぬ……」で、國形を見ておいでになると、御心が和ぎ、豐かになる事を言ふ頌詞である。よしと言ふ語の讃美詞に使はれた趣きに推察出來る。宮廷の周圍の國形をほめる頌詞を、直に宮殿の名に結びつけて來たのが、あの枕詞である。傳說上の聖儒・神仙がこゝに來て、豐けき心になつて之を眺め、心和ぐ眺めかなと思うて、ほめことばを發したと言ふのだ。

○よしといひし　前述の讃美詞が、地名となり、更に宮號にもなつて行つた事を含んで居るのである。其地・其家に臨んだ人の讃美詞は、其地の運命を決定的に言ひ定めるものと信じられて居た。「よし」は讃美であると共に、豫言なのである。未來何時までも「よからむ」と言ふ意をも兼ねて居る。『速須佐之男命、宮つくるべき地を出雲國に求ぎ給ひき。爾に須賀の地に到りまして、詔り給はく、我が御心須賀々々斯と詔り給ひて、其地に宮作りましき。故其地は、今に須賀と言ふ（古事記）」又、丹後風土記逸文の奈具社の條「わが心なぐしくなりぬ」と言はれたとようかのめの神の詞によつて、奈具の地名が出來たと言ふのも、其である。結局「よしと言ひし」と言ふ事自體が、其地に命名したことにもなるのである。卽吉野の地名は、此事蹟から出たとする

物語があつたのだ。**○よくみよ**　昔居つた淑人同様、よく見られよと言ふ敬語發想を省いた形である。二句の「よしとよく見て……」に呼應するので、其は古人、此は今、君よ豐けく和しく見よと言ふので、其人を讃へる事になる。

○よきひとよ。きみ　「よき人よくみ」と訓むのと同じで、みの連用止めで、命令形になつて居るものと見るのである。連用命令形は、禁止の意を示す時には、著しく活動するものだが——勿行き・勿思ひ・勿距り——、溯れる限りの古文法で、連用形だけで完全に命令を示した時代の俤は薄れてゐる。「よく見」が、「よく見よ」の意だと定めるのは、無理である。「よき人よく見つ」の方は、一二句を少しく形を變へてくり返した事になる。さうすると、感受が單純になるから、古風に見えるが、五句の迫つた調子が、安心出來ない上に、「見つ」のつが、「見き」となければ、時間が適應しない氣がする。勿論、一文章における過去表現は、一箇處あれば、他の時間は現在完了でも、唯の無時間の用言で表しても、よい樣にもなつてゐるが、かう言ふ場合は無理である。「來三」を「きみ」と訓む例は珍しいが、意義から言へば、一等叶ふ樣である。「あしびきの山に行きけむ山人の、心も知らず。山人や誰（卷二十）」は、太上天皇を神仙と見做し、而も上皇御自身「あしびきの　山行きしかば、山人の、われにくれたる山づとぞ。是」と仰せられた其山人は、上皇を除いて外にあるべくもないのにと逆說風に言つて、神仙であると言ふ讃美を申し上げたのと、同一手段である。吉野の地名を命けた淑人と、同樣なる淑

人なる君よ。古への淑人のした樣に、吉野をよく見よ」と言ふので、結局、淑人——神仙としてとり扱つたのである。**○きみ**　この君は、誰をさしてゐるのだらう。序を信じれば、天皇が、從駕の人々、上は皇后、皇子から大臣以下の者の誰かを對象として、歌はれたものゝ樣に說かれてゐるが、尠くとも、皇后でなくは、皇族の中にも尊い方に仰せられたものと言はねばならぬ。だが、此序は、恐らく誤傳を信じて書いたものではないかと思はれる。此程の頌詞を天子から受けられる方は、從駕の人々の內にある訣はない。こゝに君と呼びかけられた對象なる方は、天子御自身で、作者は、尠くとも皇子以下の人々と思はねば訣らぬのである。天武天皇の吉野と關係深くおありになつた事から、直ちに御製と感じて傳へたものと見る方が正しさうである。

【鑑賞その他】　この歌、ありてれいしょんを意識的に用ゐたらしい例として引かれるものである。だが、其より寧、「よし」と言ふ語を疊みかけて行く興味から出來てゐると言ふべきである。其を極端につきつめて言へば、最後に今一つ、「四來……」とある方が適當らしくも思はれるが、「よき人よ。君」と、其格をはづしたところに、意表外に出た餘裕が感じられるのだ。だが、何にしても、此は單なる口拍子に乘つた偶然と見るよりも、一種「歌式」を意識した試みで、詩學の上の知識から出た學的遊戲と見るべきものゝ極めて古い一つでないかと思ふ。歌經標式卽、濱成式には、「みよしのをよしとよくみて……」として記載し、一つの標目と見做して居る。後に歌式に列したゞけでなく、初めから多少、學的色彩を持つたものと見るべきであらう。

(二)　藤原宮御宇天皇代　高天原廣野姫天皇

天皇御製歌

春過ぎて　夏來たるらし。白栲の衣乾したり。天香具山　（二八）

天皇御製歌

春過而　夏來良之。白妙能衣乾有。天之香來山

【序註】　**藤原宮**　持統・文武兩天子の宮廷。但、萬葉集に藤原宮とあるのは、持統天皇の御宇を斥すので、文武天皇の御代には、大寶の年號を記してゐる。だから、高天原廣野姫天皇と、持統天皇の國諡を記し奉つたのである。藤原宮の所在地については、阪口保氏の研究及び集錄以上の物はあるまい。「短歌研究」四月號「萬葉集大和地理辭典」を御覧願ひたい。

【音訓】　▼**來良之**　初めて「きたるらし」と訓んだのは代匠記であらう。「きにけらし」が、舊訓として通用してゐたが尚、元暦本及び、類聚古集には、「なつぞきぬらし」とある。「きぬらし」の方は、萬葉の風としてはあるべきことだが、「きにけらし」は、氣分訓みである。新古今集も此訓み方なのは、其以前の訓本に從つたのだらう。「百鳥の聲の繼しき波流岐多流良之（卷五）」は、同樣の表現である。來有・來在などせずに、「來」一字で「きたる」に宛てたらしい例は、相當にある。「墨江に還來而」「吾待ちし秋は來沼」「この月のこゝに來者」「ありつゝも春し來者」などは、「きたる」と讀むことに疑ひはない樣だ。尚半疑しいも

のは幾らもあるが、其中、「うちなびき春來良之」「寒過暖來良之」などは、發想法も用字法も似て居る。

▼**白妙能**　妙は「栲」の宛て字として、古くから用ゐられてゐるが、意義には没交渉である。▼**乾有**　「……來にけらし……ほすてふ……」と新古今にあるのは名高いが、由來は古いのだらう。「有」の字をてふに訓んだのは、來にけらしよりは、理由がある。元暦本一訓・古葉類聚抄に「ほしたり」以後「ほしたり」「ほしたる」説もないではなかつた。が、舊訓「さらせり」が行はれた樣である。唯「乾」をさらすに宛てた例もないし、近代の古典感には、適合しないと言ふところから棄てられた傾きもある樣だ。「かわかぬ」と訓む説も古くは、相當力があつた樣だが、此は、元暦本「かわかる」の系統であらう。「乾有」だから、强ひて訓めば、「かわかる」である。其を合理化して「かわかぬ」と直したものと思はれる。「てふ」も、「さらせる」も「ほしたる」も、皆天香具山へ連續するのだが、其では、意義が循環する。やはり「ほしたり」に從ふのが、當然だ。▼**天之香來山**　「あまのかぐやま」に馴れた向きもあるが、やはり「あめの……」でなければならぬ。此は一貫しては言へぬ言語の事だから、稀に除外例もあるが、領格「の」のつく場合は、「天」は名詞。「の」なくして、「天」が直に下の名詞と熟語を作る場合は、屈折して「あま」となる。「天比登都柱（アメヒトツハシラ）」などゝも書く。いづれも宛て字である。普通、「かぐやま」と濁音に定つてゐるが、清音「かくやま」かも知れない。

自レ比至レ都以レ音。訓レ天如レ天（記）」とあるのは、特例なるが故の註である。あまと屈折すべき場合だが、あめと訓めと指定したのだ。「天を訓ずること」と言ふのは、此天の字は……と訓むべしとの意だ。「天の如くす」とは、名詞としての「天」を言ふのであめと訓む事を知らしたのだ。香來山は、香具山・香久山・賀久山・香山・高山

【口譯】　春が行つてしまつて、夏がやつて來たにちがひないことよ。白栲の衣が乾してある。天香具山。そこに。

【言語】　○**春すぎて**　「すぐ」は、單に後世風に過ぐと感じるだけでは、割りきれないものが、古典を讀む上に殘る。「すぐ」に數義あつた時代だからである。どの場合にも等しく、此數義が强く現れて來るものとは言へないが、特に近似の意義として、此語を使ふ時に必隨伴して感じないでは居られぬ他義の聯想を、考へなくてはならない。「すぐ」は「つく（盡）」と語形に分化があつたに過ぎないと思はれる程、類義を持つてゐる。「經過する」「無くなる」「死ぬ」「盛りが過ぎる」などの義が、可なり常に交互に働きかけてゐる事を思はねばならない。「もみぢ葉の過去君が」「時ならず過去子らが」などは、死ぬることである。おなじ樣でも、「命周疑南」は、「盡きる」と同義・同原なる事が示されてゐる。「花橘の落過而」「思ひも未盡者」は、對句表現として、「盡きる」用語例である。「須宜可提爾息づく君を」「花橘を見ずか將過」は、經過し、暮すことである。「つぬさはふ石村も不過」「二人行けど去過難寸秋山を」などは、すつかり通つて了ふことである。いまだ磐余の間に居ることを意識して言つたのが、前例だ。「しきたへの袖交へし君　たまだれの越野に過去。またもあはめやも」の如きは、こゝを通つて行つて了つた事と、死んだことゝ聯想が離れて居ない。通り過ぎる意の「すぐ」は、全然行き離れた事を言ふのが、正しい用語例ら

しい。「春過ぎて」は、すつかり春が行つて了つたことになる。

○**なつ**　昔の人には、なつと言ふ語を聞くと共に、特殊な聯想が起つたのだらう。其が此御製には强く働きかけてゐるのでないかと思ふ。語原論をすることは、時によつては最低劣な學問化して了ふ。だから避けるが、なつは「撫で物」の「なづ」と深い關係があつて、穢れを落し去る祓への古法を修する季節の祭祀を、中心として出來た語であるらしい。だから、直に禊ぎ・祓への聯想が起るのであらう。此事は詳しく言はねば徹底すまい。唯、全體の意義に交渉のある點だけ觸れて置くにとゞめる。

○**きたるらし**　來にたりと言ふ時の助動詞現在完了——てる・た——が連結せられた形と言ふ說によれば、活用はら行變格と同樣にならねばならぬ。だが、四段活用に類した形を持つて居る所から、榮田猛猪氏は「來至る」の融合して出來た合成動詞とせられた。だから、「來てる」と譯するよりも、「屆く」「到著する」など言ふ風に言ふ方が近いのである。「み冬都藝春は吉多禮登、梅の花　君にしあらねば、をる人もなし（卷十七）」「都藝はつぎでなく、つきである。「春過ぎて夏きたる……」と同じ形である。「きたる」には、場處を明示する傾きがある。玆に來た、手もとに屆いたと言ふ風である。○**らし**　故三矢重松先生は、根據ある想像助動詞と言はれた。但、必しも一文中に「らし」の推定の原由になる證據があるとはきまつて居ない。「靭かくる伴緒ひろき大伴に、國榮えむと　月は照良思（卷七）」「こゝにありて、筑紫やいづこ。白雲のたなびく山の

方にしあるらし（巻四）」。此等は割りに自由な想像である。だが他の想像と違ふ點は、自信を以て言つてゐるのである。だから、「……に違ひない」と譯すれば當ると思ふ。此歌などでは、明らかに、想像の根據となる「白栲の衣乾したり」があるのである。かう言ふ形をとるのが、普通だと思はれるまで、此例の類型が多い。

○しろたへのころも　白栲と書くのが正しい。たへ又はたくとも言ふ。恐らくたふと言ふ形が中間にあつたものと想像せられる。紙質の木の纖維を引いて作つた織物。此木が古くたふと言つたのであらう。多く穀（かぞ・かうぞ）の木を使つた様だ。洗へば益白く曝れる所から好まれたのである。布の名でもあり、更に其から作つた衣服の名となり、習慣の結果、衣服はすべて、栲製の物でなくとも、「白栲の麻衣」など言ふ様にもなつた。たくは、萬葉には、既に固定した古典的な熟語として殘つて居たゞけで、たへを普通としたのだらう。尙たへ・たくには、その利用法から聲音分化によつて、區別を示したのだと思はれる痕も見える。之呂多倍・之路多倍・志路多倍・思路多倍・思漏多倍など書いてゐるから、しらたへでない事も訣る。こゝでは、明らかに「白栲の衣」と言つて居る。白栲衣は、常用の衣でなかつた。祭祀儀禮時の物忌みを示す齋服であつたことは、本集を見ても、すべて明らかに知れる。又たへに細布――略して細――を宛て字するのは、栲布を讃美したものである。

○ほしたり　たりは現在完了助動詞。强ひて譯すれば、……てある・てるなどに當るが、もつと

自由に見てよからう。詳しくは、「白栲の衣ほしたり。見ゆ」と言ふところである。衣を乾す事は、鑑賞の條に述べる。「ほすてふ」と新古今に訓んだのは、有をなると同視したので、「衣乾す」なる天香具山」と讀み換へて見ると、點者の意見のある所は訣る。なるは、氣分表現の語で、意義に關係がない。……ところの……と譯して、說くことが出來る。「衣乾すところの天香具山」の意と考へたので、古く之に當るてふ――とふ・ちふなどの稍新しい形、といふの融合形――を訓に用ゐたので、近代ならばなるで行くところである。**○あめのかぐやま**　大和中央平原鄕、奈良朝以前久しく都のあつた飛鳥地方の東北に立つて居て、後に連亙する山脈を背負つた様に見える端山であり、獨立丘でもある山。其で注意を牽くと共に、信仰を集めるやうになつた。山の名「天」を冠するのは、伊豫風土記逸文に天上の香具山が、地上に落ちて大和・伊豫兩國に分れ殘つたのだと言ふ。が、天墮來の故に「天――」と言つたとの考へは、後世的である。古代祭祀に、地上の祭りも、天上において行ふと同じ靈感を以てしたところから、之に關與する人も土地も悉く、其間は天上のものと見做されるのであつた。祭祀時の感激が久しく續いて、日常にも、神聖なる場處は、やはり、天上の地域の如く感じた。「天香具山」は、天上の其靈山と見做されて用ゐられた爲に、遂に其名がついたのである。今大和磯城郡、時代によつては十市郡にも屬してゐた。此等の事も、既に㈠の歌の解釋の條に說いた。

【鑑賞その他】　季候の推移に驚くと言つた類型の中の極めて古い一つで、其だけに注意もせられ、

人に喜ばれてゐる。あまり名高く、民族的知識の底にこびりついてゐる爲に、今更此歌の價値を判斷するに適しない雜物を聯想の中に交へてゐる氣がする。が、歌としては單純直截なものであらう。近代的の見方でよいと思へば名歌とも感じられるが、古歌として見れば、單なる文學として味ふだけで足れりとすべきではあるまい。

藤原の都を圍む大和三山の中、一番都に近く、東の宮門に迫つて立つてゐるやうに見えたであう。その山の上と見なくとも、近邊の村里にでも乾してあると見てよい樣に思はれる。が、又新にやはり山の中腹、或は上の方に見えると思はねばならぬかとも考へるのだ。其は、單に春夏交替の時期に行はれる更衣（コロモガヘ）の爲の曝衣（サラシギヌ）だと見られて來たのだが、さうばかりも思はれない。穗積忠君の考へと、私の考へと搗きまぜて述べさせて貰ふ。山ごもりする處女たちが、齋衣（ヲミゴロモ）を乾して置くのでないかとの推測である。穗積君は、南島の清水に關聯した島の巫女たちの舊傳承を思うての美しい聯想である。香具山で、禊ぎをする巫女が、其天羽衣（アメノハゴロモ）とも言ふべき聖衣を脫ぎかけて置くものとするのだ。さなくとも、此頃村の處女の野遊び・山行きの時季で、後代は一日だが、以前は幾日か山中に處女だけが籠つて、當年の田栽ゑの五月處女（サツキヲトメ）たるべき資格を得る爲の物忌みをする事になつて居た。春夏の交の村の此行事は、古代から行はれてゐて、比叡山の花摘社（ハナヅミヤシロ）の故事などもある。持統天皇、香具山の上邊に掛け連ねた白栲の齋服を望まれて、おなじ御女性としての思ひ推（オ）りを、山籠りの人々の上に走せられたと見るのは、或は正しいのでなかつたかと考へる。

(三)　藤原ノ宮の役民（エノタミ）の作れる歌

(五〇)やすみしゝ　わが大君　たかてらす　日の御子（ミコ）。あらたへの　藤原がうへに、食國（ヲスクニ）を　めし給はむと　都宮（ミヤコ）は高しらさむと　神（カム）ながら思ほすなべに、天地（アメツチ）もよりてあれこそ。いはゝしの　淡海（アフミ）の國の、ころもでの　田上山（タナカミ）の、まきさく　檜のつまでを。ものゝふの　やそ宇治川に、玉藻なす　浮べ流せれ。』其を操（ト）ると　集動（サワ）ぐ御民（ミタミ）も、家忘れ身も全（タナ）知らに、鴨じもの　水に漂（ウ）き居て。『新造（イマツク）る日の朝廷（ミカド）に、知らぬ國より』久世路（コセヂ）ゆ、『我が國は常世（トコヨ）にならむ　圖負（フミオ）へる靈（アヤ）しき龜も、新代（アラタヨ）と』泉（イヅミ）の川に、持ち越せる眞木のつまでを、もゝたらず　杼（イカダ）に作り、溯すらむ　勤（イソ）はく　見れば、神ながらならし

右、日本紀に曰ふ。朱鳥七年癸巳、秋八月、藤原ノ宮に遷居す。

藤原ノ宮に幸す。冬十二月庚戌朔乙卯、

八隅知之　吾大王　高照　日之皇子。荒妙乃　藤原我宇倍爾、食國乎賣之賜牟登　都宮者高所知武等　神長柄所念奈戸二、天地毛緣而有許曾。磐走　淡海乃國之、衣手能　田上山之、眞木佐苦　檜乃嬬手乎。物乃布能　八十氏河爾、玉藻成　浮倍流禮。』其乎取登　散和久御民毛、家忘　身毛多奈不知、鴨自物　水爾浮居而。『今吾作日之御門爾、不知國依』巨勢道從、『我國者常世爾成牟　圖負留神龜毛、新代登』泉乃河爾　持越流眞木乃都麻手乎。百不足　五十日太爾

作、泝須良牟　伊蘇波久　見者、神隨爾有之

右、日本紀曰。朱鳥七年癸巳秋八月幸二藤原宮地一。八年甲午、春正月、幸二藤原宮一。冬十二月庚戌朔乙卯、遷二居藤原宮一。

【口譯】　我が天子樣、日の神の御子なるおん方。その御方が、藤原の邊（アタリ）で、天つ神の御領土なるこの國をお治めなさらうと、宮殿をば莊嚴にお作りにならうと、尊い御意志を以て、お思ひ立ちなさると同時に、天の神・地の神も、協力し奉られるので、それで、神は、近江の國の田上山の檜の榑木（クレキ）を、宇治川に浮べ流し出された。その木を取り扱ふために、どや〳〵と働いてゐる天子のおん民も、家のことを念頭から離ち、身のこともすつかり訣らなくなつて、鴨のやうに水の上に漂流して居つて、『新造の日の神の宮廷に、今まで經驗したことのない國が寄つて來（ク）よといふめでたい名の』久世（コセ）道をば、『この我が國及びわが宮廷は、永久不變になるだらうといふ、そのめでたい模樣を背（セナ）に持つた不思議な龜も、結構な御代として、現れ出（イ）づるといふ、緣起のよい名の』泉川に運び越した、その眞木の榑木を、筏に作つて、あのやうに川を溯してゐるのだらう。その忠實にと立ち働いてゐるのを見ると、神の御意志によつて、かく現れるにちがひない、と思はれることよ。

【序註】　藤原宮之　本文の註に述べる。此は、藤原宮を造る時のゝ意である。▼役民　古本多く役となつてゐる。役の古躰である。役は元來名詞としては、えと謂はれ、賦役の義である。役に徵發する事を、「えだてるたみ」何れでもよい。唯、古姓に役君（エノキミ）・役首などある。衣君（エノキミ）などの借名でなければ、役民の部領者である。かうした獨立性もあつた語だから、役民（エノタミ）と訓むことにする。

▼此歌果して、藤原宮造營の時の役民の作歌か、どうかは頗疑問がある。その諸點は、後に述べるが、作者が別にあつて、役者の謠ふ所の詞章を與へたとも思はれるのである。又、藤原宮について、出來たものかどうかに、第一の疑惑がある。古代の歌、殊に、かうした咒詞に近い內容を持つた詞章には、特別の約束があつて、前代の詞章によつて、祝福せられた故事を重んじて、其を多く改める事なく、次代又次代に流用した。其處に種々なる矛盾が起つて來る。此歌の如きは、實に藤原宮役民歌と見るよりも、恭仁宮に關するものと見る方が、當るのである。而も、何の爲に、かうした形を採つたのか、又どうしてさう謂ふ詞章上の傳習が生じて來たかについても、敍述する積りで居る。萬葉集を讀むにも、單に語句以上にある約束を、考へに入れてかゝる必要があるのである。

【音訓】　▼八隅知之　やすみしゝ。「八隅」は、合理的な宛て字。德八荒に及ぶと言つた聯想である。「知」をしと訓ませるのは、語尾のるを漢子の子音同樣に考へて、これを省いて發音してもよいとの考へからだ。「日雙知」をひなめ（み）しと訓むのと同じ理由である。卽、「常」をとの表音假名とし、「苑」をそと宛てたりするのと同じで、誤解乍ら廣く用ゐられたらしい。「之」は音假名。▼高照　又、高光とも書く。たかひかると訓む說と、たかてらすと訓むのと、兩說ある。尙、一處、「高輝」ともある。どちらかに統一して訓まれねばならぬ筈である。近年、たかてらす說が有力になつて來てゐる。▼宇倍　うへ。「倍」は、こゝは

恐らく、清音に用ゐたのであらう。▼**都宮者**　みやこはと訓むのがよからう。舊訓みやこには、古訓みやこをば・とつみやはなどあり、新訓では、春滿おほみやは、眞淵みあらかは、近年、眞淵説が行はれてゐたが、今は、「都宮」でみやこと訓み、「者」をはと訓む説が、普通のやうだ。▼**高所知武**　「所」は用法の廣い漢助辭である。敬語に使つた例も、當代文獻に多い。こゝは「知」の敬相を示すのだ。卽高しらすで、其に武がついて、「しらさむ」と訓む事を表す。▼**神長柄**　かむながらで、かみながらではない。字はながゝらが融合してながらとなり、地名は勿論、器具にも通用したのであらう。本集には、「つまと言長柄」などある。隨神を宛てるが、本集は寧、神隨と音の順序に竝べてゐるのもある。▼**緣而有許曾**　よりてあれこそと訓んでゐるが、私は又、よして……と訓む考へをも持つてゐる。▼**磐走**　又、石走とも書く。「石走之」の例もある。これを名詞に訓んで、「瀨々ゆわたる石走もなし」「石走の間々に生ひたる顏花の」は石橋・石椅に通ずる。又、「石走激ち流るゝ」の如きは、「伊波婆之流たぎもとゞろに」と同樣の熟語動詞である。たぎ（タギミ）の例から見れば、垂水にかゝる「石走」も、いはゝしるだらうが、それは、いはゝしのと訓めないとも限らぬ。但、「石走遠き心」「石走甘南備山」などは、いはゝしと定めてよからう。たゞ、近江にかゝる枕詞の場合、單に、語原説を以て、訓み方を定める訣にもゆかぬ。甘南備山に石橋があつたやうに、近江といへば、聯想せられる石橋の考へられない今からは、結局、消極的に、水の激する意味のいはゞしるなる動詞が、近江にかゝる理由がないといふ位を根據にして、いはゝしの説を採るより爲樣がない。▼**田上山**　たなかみやま。近江栗太郡の地名。古くから、田上に宛てゝゐる。神功紀に、「淡海の海　瀨田の濟に潛く鳥　多那伽瀰須疑氏（タナカミスギテ）、宇治に捕へつ」とあるのや、雄

略紀に見えた、「谷上濱（タナカミノハマ）」、天孫本紀の「谷上刀婢（タナカミノトベ）」などに據つて、たなかみと訓んだことは訣る。▼**檜乃嬬手**　ひのつまで。この歌の末に、眞木乃都麻手とあるから、訓假名としてつまでと訓む。▼**浮倍流禮**　うかべながせれ。「倍」の字の無い古本も「流」の字の無い古本もあるが、揃つてゐる方がよい。玆は、うきてながるれかうかべながせれである。他の訓み方では、意が通らぬ。▼**散和久**　さわぐ。この「久」は濁音に訓む。尤、當時の發音は訣らない。▼**身毛多奈不知**　みもたなしらずを採る。▼**今作**　いまつくる。「今」は、意味から改めた。「吾」でも十分訣るが、かうした詞章では、「今」であるべき理由がある。▼**不知國依亙勢道從**　「しらぬくに、よりこせぢゆ」と五音六音に訓む。尤、調子の點以外はゆでもよりでもよいやうだ。▼**圖負留**　「圖」はふみ、「負留」はおへる。天平元年八月五日の詔にも、負圖龜一頭の字が見えて、ふみおへるかめひとつと訓んだらしく思はれる。▼**神龜**　古訓・舊訓、凡、あやしきかめに一致してゐる。惟・奇・靈・神、皆通じて、あやしである。その中、後の二つは、くすしきとも訓めさうである。姑らく、あやしきに從つておく。神龜の字面は、神龜元年二月の詔にも、天平元年八月の詔にも見えてゐる。▼**新代**　あらたよ。古訓・舊訓、「新」をあたら・にひなどゝしてゐるのは、宛らない。▼**百不足**　もゝたらずといふ例は、古くからある。▼**五十日太**　いかだ。「五十」も「五百」も皆、いである。日に熟して「五十日」は、いかと訓む。たの濁音を表記するのに、「太」を使つて、「筏」に當てたのである。▼**泝須艮牟**　のぼすらむ。泝は溯である。須の屬いた場合は、のぼすと訓むべきである。▼**神隨爾有之**　爾有はなら・なりを表す例である。卽、ならしである。かむながらは既出。

【言語】 **○やすみしゝ**　本集では、「安見知之」「八隅知之」に大體書き分けてゐる。八方をお治めになる義と、安らかにお治めになる（安治）と、君徳を祝福讃美したと言ふ風に、合理解を加へてゐたのである。だから、既に元の意義は決定出來なくなつてゐたことが訣る。采女に安見兒（ヤスミコ）あり、宮殿に安殿（ヤスミドノ）――大安殿・小安殿――のあることなどが、この語の起原を暗示してゐる様だ。御息所（ミヤスドコロ）は、皇子を生み奉つた婦人の名で、元はみやすみどころである。而も、安殿が大極殿に當る我が國古來の正寢であり、又祭日の夜、こゝに同床の儀あるを思へば、いこひの意味のやすみと通ずる處ある事は明らかである。別説に述べたが、此夜、神降臨の信仰のもとに、正寢に入らせられるのである。やすみの原義はそこにあつて、あもりますに近いものであらうと思ふ。その第二義以下に、正殿に一夜臥し給ふことを言ふ様になつたのであらう。しゝは、本集時代の標準的な敬語法から言へば、せすである。その一つ前は、さすである。更に溯れば、しすであつた。この三段の展開は、ほゞ本集によつても察しることが出來る。そのしす時代に於いて、やすみし（やすみせす・やすみさす）があり、その固定句を作る形が、「……しゝ」であつた。通常枕詞の格は、連用名詞句によつて示されるのであるから、やすみしゝがやすみせすこと（或はもの・ところ）などを意味することは訣る。卽、皇族を呼び申すに、おほきみの稱號をもつてしたが故に、その天子で在すことを示す爲に、特につけるやうになつた枕詞である。だが、慣用の久しき、遂に唯、おほきみにかゝる枕詞と思ふ様にすらなつた様である。而も尙、皇子尊（ミコノミコト）の様な尊い方を

言ふのは、古義を失ひきらなかつたのであらう。**○わが大君**　わがはおのが奉仕する御方なることを示す。多少誓約の義を殘してゐるのだらう。おほきみは、諸國の君（キミ）々と稱した舊國主族に對して、その上に臨ませられる尊貴なる御一族の稱呼となつた。骨（カバネ）と言へば畏いが、その考へ方で見るべき古代だから、大君は御族（ウカラ）全體の稱へであつた。故に、天子の御ことにもなり、皇子にも當り、又皇子の御子以下にして、大君の族（ウカラ）なる方々までもこめて言つた。だから、或場合には、諸王をおほきみと言ふこともある。尊貴族の御うち、最神聖なる御方を示す爲にやすみしゝを冠して、混じない様にしたのだ。**○たかてらす**　高光ると訓むにしても、義は一つである。日の枕詞。形容詞語根と動詞との熟語である。日が天高く輝いてゐる處から言ふ。而もこの枕詞が、日の皇子を頌し奉るに最ふさはしい聯想をおこさしたのであらう。**○日の皇子**　本集時代にも、末期には既に、神聖を表す爲の修飾或は譬喩の様に「日」の語を感じてゐたかも知れぬが、この語起原及び正格な用語例は、日の神の御子と申す處にある。而も、日の神の御子と言ふものにも、その尊貴を示す譬喩表現の様にも思ふ人があるのは違ふ。信仰的に、常にお一人づゝ替り〳〵に、この世に日神の御子下らせ給ふと信じてゐた。だから日神の御子孫と言ふ様な緩かな表現ではない。以上の對句が、天子の御資格を表現するので、古い形に從へば「やすみしゝ我が大君」一つだつたのが、延長せられたのだ。その句の後に、「その御方が」と言ふ位の語をもつて、下に續けて解けばよからう。**○あらたへの**　枕詞。藤をおこしてゐる。たへは「栲」であり、「栲布」であり、

又「栲布の衣」であつた。更に擴つては、總ての衣の稱ともなつた。あらたへは、にぎたへの對照で、精製しない布衣である。粗服である。ふぢは、まふぢである。其纖維を以て布を作る。今も山村には用ゐる。その布衣が、この語によつて聯想せられるからである。**○藤原がうへに**　藤原もと大和國高市郡飛鳥の丘陵によつて、大原と稱へた地。特に、その地に居住した一族の聖職の名と思はれる藤原といふ名を稱する様になつた。藤原は、必しも藤原氏の專有した稱號ではない。衣通姫を藤原琴節郎女と言つたのも、其一例だ。持統天皇の御代に至つて、飛鳥京を香具山の西、甘橿丘畝傍山の北、今の高市郡鴨公村を中心とした地に遷し、漢土の制に則つた都城を造られて、之を藤原の宮と稱せられた。宮號は飛鳥の地名を將來せられた訣だ。このこと次の「五十二」の長歌に、「藤井我原」に奠都せられた由を言ふのと矛盾する様だが、さうでない。飛鳥の藤原それ自身が、水の聖職に基く「藤井」の清水のあつたのと一つ理由の名であらう。此外又、飛鳥八釣（ヤヅリ）の地が、藤原にも移つてゐる。左註に引いた日本紀の本文の通り、朱鳥七年以前既に、四年十二月朔日にも記事がある。「天皇藤原に幸して宮地を觀る」とあり、其後四年を經て、八年十二月藤原の都に遷居せられた。昭和九年四月、藤原宮趾發掘研究の企てがあつて、物的證據も收められたから、大體に於いて、鴨公村高殿中心說は動かないものと言つてよい。尙、此歌については、阪口保氏著「萬葉集大和地理辭典」參照を乞ふ。**○うへに**　うへ・かみ共にほとりを意味する。こゝもほとりが、周圍を意味するだけでなく、その中を言ふのだ。**○食國（ヲスクニ）**　天子の御領土

と言つた意味に感ぜられてゐるが、元、食國は天神の御領で、そこに、神の食物（ヲシモノ）たる稻を作るものと、考へてゐた。その意味に於いて、後代からは飛躍した言ひ方に聞えるが、をす國といつたのだ。その天の直下の地へ、天神の御子が下つて食國の政をとり行はれるとの古代信仰が、遂に食國を神の御子なる天子の御料の地と言ふ風に、内容を擴充していつたのである。**○めし給はむと**　めすは、語原的にはみるの敬語。みるが種々の動詞の代用となるところから、めすの意義も範圍が廣い。こゝは、治める意味のみるの敬語である。卽、見、知ることである。これに近いみす・みしと言ふ形もある。見爲・見之など書く。相當の用語例を殘してゐる。見をもめす・めしと訓んで了ふのはわるい。めし給はむとの句は、四句を隔てた「思ほすなべに」に論理的に續くのである。同じく次の、二句も、「思ほすなべ」に續く。**○みやこは**　萬葉に於けるみやこは都城を意味するものよりも、宮地・宮殿の所在、或は宮殿を意味するものが多い。其が又古義なのだ。宮廷を圍む地をみやこの邑と見るからの轉義だ。だから「都宮」をみやこと訓んでも不都合はないと思ふ。意義から言へば、おほみやと言ひみあらかといつても不都合はないが、さう訓む根據が乏しい。尙次條參照。**○高しらさむと**　この語は、古代咒詞以來、常に宮殿のほめ詞に用ゐられて、次第に意義の理會を變じて來たと思はれる。語原的には、しるはいちじるしくあり・いちじるしくすると言つた風に考へられ、又慣用の對句から考へると、「宮柱太しきたて」のしくと同義のものとも考へられる。だが、對句としての慣用から、類音の語が次第に步みよる傾向をもつ

てゐるから、一概にさうも言へない。或は舊説の如く、天子の領治せられる意味のしるに、敬語としてたかの接頭語をつけたものと見る方が正しいかも知れぬ。尊貴の御方に關する語として、次第に意義を變じて、末には第一義に嵌らない多くの例をもつて來たと見られるのである。高しるの敬語高しらすの第一變化、高しらさむである。**○かむながら**　古代國語は、熟語を作る場合、上にある語の、屈折を生ずる例が多い。かみも亦かむ……と言ふ風に、音韻を變じるのである。この語に就いては、神道の本髄と考へられてゐるところから、神道者の意見が百出して收拾出來ないほどである。が第一に考へられねばならないのは、この語が昔どうして行はれたかといふことである。單に歌語として、又口語として世にあつたものでない。古代咒詞のうち、宮廷より下される最重い詔詞に、必附隨して居た語句だつたと思はれる。「このみ言は我が言ならず、天に坐す神のみことなり」と謂つた御ことわりの御詞だつたと思はれる。それが段々、天子の御言の尊重すべき御資格を示す語となつて、襲用せられてゐる間に、種々の聯想を加へて來たものだらう。だから後代から見れば、神そのもの・神としての・神のまゝに・神の心によつてなど、樣々に解ける程、意義が流動してゐたのだ。この語について考へなければならぬ第二の點は、天子御自身仰せられる詞であるのが、轉じて聖上の神聖なる御威力を、他から申し上げる語となつたことだ。第三に思ふべきは、神のうち、山川の靈の如き神にすら、その神みづからの行ひを示す場合の敬語として用ゐることである。だから、神自身行ふの義が、此語にあることが知れる。これは明ら

かに、古語の誤解であるが、本集、殊に奈良朝の作物には、それが見える。本集のかむながらは、正確に第一義に用ゐたものはない。この歌などは、第二義のうちに流動してゐるものと見られる。語原論者は、常にながらの解剖から、この語を理會しようとしてゐるが、錯誤に陷り易い。結局正確な使ひ方に於ける神ながらの示す神は天神であり、聖上と對立して考へられるが爲に、ながらといふ助辭をもつて、天子との御關係を示すのである。第一義第二義に亙つて支障のない用語例として、神の資格に於いて・神の資格なれば位に譯すれば、間違ひはなからう。總て、下に行ひ・思ひなどする意義の語が來るのが例である。即、かく思ふは神ながらなり・かくなすは神ながらなりの表示を含んでゐるからだ。だから、この歌の最後の「神ながらならし」は明らかに語句の省略がある。「神ながらかく現るゝならし」「神ながらかくふるまふならし」の意義である。**○思ほすなべに**　思ほすは思ふの敬語形。なべには語原的に言へば、竝べにであることは勿論だ。或事象に隨伴しておこる事象を言ふ語。これと似たものにしかすがにがあつて、常に前提に逆行することを述べる點が違ふ。語尾にを略して、なべとばかり言ふこともある。又、時としては、からに近いのもある。かう言ふ場合は、「思ほすなべに」を說いて、「神ながら」を譯しなくとも訣るのである。**○天地も**　靈的の存在としての天及び地、更に廣く天地間に在つて神靈の寓り得るやうな事物を斥す。これは、多少誇張を含んだ表現で、「三九」の反歌竝びに「三八」の長歌に見えた、「山川もよりて奉ふる」と言つた表現の方が、實感的なのだらう。だから、歌の内容も、

田上の山の靈、宇治・泉の川の靈、同時に御民らの心の内のものゝ發動を敍べてゐるのだ。**○よりてあれこそ**　「三八」・「三九」に「山川もよりてつかふる」とあるから見れば、「天地の靈も一つによつて」、協力してと譯してよい處だ。言ひ換へれば、一致してお仕へ申してゐるので、といふことになる。但、本集としては、これらの「よりて」（依・因・緣）をすべて、「よして」と考へても、訓・釋兩面倶に不都合はない。「山川もよして仕ふる」と言へば、山靈・川靈も、天子に物を寄與し奉仕する事になる。こゝは、天地の靈物も、それ〴〵の物を寄與し奉るからと譯することが出來る。私は寧此方が古風だと思うてゐる。**○あれこそ**　十句距てゝ、「浮べ流せれ」に呼應してゐる。あればこそのばの音脫である。

○いはゝしの　枕詞。近江にかゝる理由は訣らない。眞淵等の先覺の解說も、必然性が信ぜられない。又、古い枕詞ほど、さうした必然の動機らしいものを、振り落してゐるのだから、研究は困難な訣だ。いはゝしなるが故に、足とか踏むとかを聯想すると言つた說明は、始めから必然性のないものである。又、いはゝしると訓む側から見ても、それが、何故、近江の一部分の特徵をも表すことになるかゞ、考へることが出來ない。湖水の水の激湍になつた場處から出たのだとするのも、考へにくい。**○淡海の國**　近江の國。この歌としては、尙、湖水のある國の感じを持つてゐるだらう。あふみは、言ふ迄もなく、眞水の湖。多く、あふみで第一に聯想したのは、その東西の地方である。此以下、一句々々皆、枕詞を冠して進んでゐる。**○ころもでの**　枕詞。極め

て廣く用ゐられる。玆では、田上山の一部にかゝつてゐる。ころもではそでである。衣說はわるい。手にかゝるか、手上にかゝるか不明。尙、古義の手長說は木綿疊の枕詞のある點から見ると、手量の長さを言ふので、成り立ちさうである。かうした枕詞にも、それが、用ゐ始められた意義だと思はれる、供へ物としての、著物の感じを殘してゐる。さうして多少とも、田上山の讃美になるのであらう。**○田上山**　近江。栗太郡の南西の大部分を占めた山地の總稱。山を距てゝ、南は伊賀、西は、川を距てゝ、山城に對つてゐる。古く、「田上の杣」があつた。江州には杣山多く、その中、最山深く亦水利の便も持つてゐたので、重要視せられてゐたと見られる。山田孝雄博士は、正倉院文書によつて、「田上山作所」のあつた事を證してゐられ、田上は、杣山でなく、製材所であつたといふ說を出された。名說だが、杣のあつたことも事實である。**○まきさく**「ひ」の枕詞。記・紀に類例が二つまで見えるから、新しいやうに見えて舊いものなのだ。家讃めの語が、慣用の結果、枕詞となつたのだらう。さすれば、これのかゝる「ひ」といふ語は、やはり檜であらう。まきをさき祝つて作つた檜の……と言つた成立をもつてゐるのだ。さくは、木を拆く義に、幸福・歡笑・光榮の義をもつた、めでたい語意を兼ねさせた祝福だ。私は、以前、まきにさくの枕詞形式と考へてゐたが、それもいけない。尙、「ひ」の一音に、製材關係のてくに語義を求める說も、すべて、あたるまい。**○檜のつまでを**　檜はひのきである。つまで、古く、「爪木」の聯想から、契沖の、細やかに麗しい小材木を女の手に喩へた名だらうなどいふ說に

至つたのだが、眞淵の「冠辭考」以來、說が一轉して來て、守部に至つて、或完成を見た。眞淵の粗削りした材木は、角爪があるから、つまでだとし、ては語尾としてゐるに對して、守部は、その角をつけることを、つまどりするといふ。後世語を持つて來て、つまどりがつまで、つまでは、さうした材木だと說いてゐる。これらの說も、つまでといふ語が在つて言ふのでなく、柧といふ語からの想像であるから、信は措き難い。尙、山田博士は「古今韻會」を引いて、「木四方なるを棱と爲し、四棱なるを柧と爲す」とあるのから、「柧」の別體「柧」であらうとし、更に、其からつまなる國語の意義を窺はうとしてゐられる。字の說明は、感じるが、それが直ちにつまでの說明に役立つのは、多少考への餘地がある。而も却つてつまぎらしいものを、つまでといつてゐるのが方言にある。愛媛縣新居郡の林業者の間でつまでと言つてゐるのは、枯木の枝條又は灌木を薪材として採取せるもの（林業辭典）とある。方言は新しい聯想を加へて、變化することの多いものだから、爪木などの知識から、かうした語が出來たのかもしれない。が、結局、つまに關する古語は、神代紀に見えた柧津姬（ツマツヒメ）の御名だけである。其も果して眞淵以下の大材說に落ちつくともきまらない。瀨田川に流した神業の木だから、又、泉川で筏に造つた木だから、相當の材木でなければ、妥當感を缺くものと思つてゐるに過ぎない。以下の考へは、恐らく、空虛な說に歸して了ふだらうが、つまで及つまが、確かに材木を意味する證據がない限りは、つまぎのやうに考へて見てもよい。勿論、「玉藻なす」は、單なる枕詞で、つまぎなるが故に、玉藻のやうに見

えるといふ理由はないが、爪木として見れば、譬喩が適切だ。「今作（或は吾作）日の御門」といふ語は、既に造營せられた建物の存在を思はせてゐるのでないかといふ氣がせられる。そこへ搬ぶのだから必しも大材の意でないとも思へる。又、筏といふと、今日、材木を運ぶ爲の物とのみ考へるが、元は、さうした爲ばかりでなく、一時的に木の枝を組んで作つた、別の用途を目的とした物だつたかもしれない。さうして運んだ枝を新築の宮廷の何かの式事用に用ゐたとも考へられる。尙、思ふに、このつまでといふのは、材木を意味するのでなく、槫（クレ）をいふのでありさうだ。さすれば、檜・杉・樅等の槫木もあり、細いのも短いのも色々あつたし、ひのつまでともまきのつまでもと言ふに當る。又、槫とすれば、丸太を選りすぐつたものだから、先に引いた方言のつまでに近い內容をもつてゐる訣だ。ともかく、この語は、柱・梁等に用ゐる材を言ふものと思ふから間違ひを起すのではないか。此句は、三句越えて、「浮べ流せれ」とつゞくのだ。

○ものゝふの　正しく書けば、物部である。ものゝへが、音韻分化を起して、ものゝふとなつたので、元廣く汎稱であつたものゝへが、氏族の名となつたゝめに、更に、廣く內容をもつた物部は、ものゝふをもつて表すやうになつたと見るべきであらう。ものは靈（モノ）、それを驅使する民團なるが故に、ものゝへと稱した。主として、戰爭の精靈を取扱つたのだ。これらの多くの部曲の中から、宮廷に附屬する物部が、稱號を專らにするやうになつたのである。元々、宮廷に仕へた靈魂驅使團も多かつたし、國中には更に、多くのものゝへがあつたので、最大數を表現する「八十（ヤソ）」の語

で表したものである。ものゝふに八十氏あり、八十氏人があつた訣である。それで、「ものゝふの八十氏」といふ成句を利用して、宇治川のうぢの音を起したのである。もののふのやそが序歌である。**○玉藻なす**　このなすの語原は、夷歌に示されてゐる。なす・がす・のすの三様に用ゐられてゐるのは、その各が、所有格の語尾なることを示すので、同時に、「何の物」「何の事」の意味である。「の」の機能については、「玉藻の」「水鳥の」等の「の」を考へ合せれば、自ら理會がつく。此「の」の後につくすは、接頭語の縁によつて、狀態をなすの意をもつたものと思はれる。さうして、このなすは、ごときの義とごとくの義とをもつてゐる。その枕詞のつく語の、名詞であるか、動詞であるかによつて岐れる。玉藻は、本集時代に於て、喜び用ゐられた語で、殆、文學語に近いもの。普通、玉は讃め詞のやうに言つてゐるが、元、藻を呪術に用ゐたからで、靈的な・神聖なといふ意義である。この枕詞の發生は、この玉藻の示す象徴のやうに、かくの如くなるだらうと言つた呪言が、次第に一つの修辞的な類型となつて、用ゐられる事になつたのだ。なびく・よるなどにかゝるのがそれで、こゝのやうな例は、既に枕詞として、意義が轉じてゐる訣だ。**○浮べ流せれ**　田上山の神が、宇治川に流し浮べたと見るのである。だが、同時に、川の神の力も添うてゐるものと、考へてもよい。こゝで、大きな一段に切れてゐる。天地山川の靈も協力して居るので……田上山の檜のつまでを宇治川に浮べ流してゐる、或は、浮べ流したとなる。**○其(ソ)をとると**　「其(ソ)を」は、多く句或は文章の句切を受けて言ふ時に使ふ。「それを」といふよりは、尚、調子の切迫してゐる場合のやうである。「とる」は、とりあつかふである。或は、牧集の義と見てもよい。「と」は、として・と思ひてである。取らむとしてである。**○集(サツ)動ぐ**　職につ いてのみ言ふのでなく、動く様をも言ふ語。集動の字を宛てればよい。本集には、「散動」を宛てゐる。散で音を表し、動で意味を示したのであらう。**○御民**　こゝでは、作者が傍觀した態度で言つてゐるので、「御民われ」の義ではない。御民は、天子の民としてつけた敬語である。宮廷の御所有たる民といふ意である。併し、元々、天つ神の御田を作る人の義であつた。たみはたべ（田部）とする説は、その意味に於て成立する。**○家忘れ**　忘るは、忘却する義の上に、心に浮んで來ないこと、或は目にちらつかないことをも含んでゐる。古風な用語例になると、さうした解釋によらねばならぬものがある。こゝに、對句として次の句を竝べたのである。**○身もたなし らに**　たなしるを否定して、たなしらずにと言つたのだ。たなは、全部を意味する。たな曇りは、全體が曇ること。たなびくは、全體にかゝるのだ。たなしる・たなしれは、十分辨へよ、全體の事情をよく知れである。身もたな知らずでもたな知らにでも、變りはない。たゞ、次の句への粘著力を思つて、知らにを採つた。（此稿未完）

相聞歌概説

——殊に萬葉集卷二に就いて——

この卷の見わたし

相聞の歌に絡んだ問題は頗多い。こゝには卷二の前半を持つた其歌群の上に現れた事情を見てゆくつもりである。まづ言ふべきことは、此部類に見えた體裁である。「仁徳天皇朝」の磐姫皇后御作歌と傳へた四首を最初に、藤原宮——持統天皇——の柿本人麻呂が石見から上京する時の長歌・短歌及び、其事に關聯のあると見られる其妻依羅娘子の歌一首を、最後とした一團である。萬葉集卷二の相聞がどうして、さう言ふ形をとつて居るのだらう。偶然であらうか。相聞に限るものなら偶然と言ふよりも、何の意義もないことゝ見られよう。だが、其他の大きな萬葉式の部類に渉つて、此事實が見られるとしたら、一應考へて見ねばならぬと思ふ。

私の見方からすれば、正に卷一の雜歌も、人麻呂關係の歌で綴(トヂ)めてゐる。卷二の今一半の挽歌も、人麻呂歌群で終つてゐることになるのである。

昭和十三年一月「短歌研究」第七卷第一號

その後半の挽歌の起しは、齊明天皇朝の有馬皇子の作として傳承せられた、磐白のむすび松の歌及び其に關聯した後人の歌四首が、時代の區劃を離れた追記の形で竝べられてゐる。殊に大寶元年云々の詞書ある人麻呂歌集の歌の如きは、意吉麻呂・憶良の作物よりは、前に出るのが、原則に叶うた記載法だと思ふ。

奥麻呂・憶良は、人麻呂と同時代の人であり、殊に前者は大寶元年の行幸にはお伴してゐるのだし、片方は人麻呂作でも「集」の方だから、かう言ふ記載法を採つたのだと見ることも出來る。が、順序とすれば、人麻呂集のものを先にしさうなものと思はれる。そこでまづ考へられるのは、右二人の三首は、早くから本文有馬皇子の歌の左註——とも謂へぬが——式に竝べられて居たらうが、大寶元年——(傳、人麻呂)の分は、書き込み——(又は、截り込み)を思はせてゐる。第二次の編纂の時に這入つたものらしい。

此姿は此卷の末にも見えるのだ。「寧良宮」と標出して、和銅四年河邊宮人姫島松原の歌二首、靈龜元年の笠金村に關聯した志貴親王葬送の作三首——其外に或本の歌二首ある——とある五首が、其である。此形は卷二其自體の上において大きな飛躍があることを思はせてゐるのであつて、奈良朝以前に年號がなくば知らぬこと、事實がさうでない以上、これに複雜な説明が加へられねばすまないのである。以上、齊明天皇卽位の年、從來大化・白雉と年號を建てゝ來たのを廢せられ、三十年後朱鳥と建元せられるまでは、表面年號を稱へなかつた。其舊事に則つて「天皇朝」を以

て時期を示したものと見られぬでもない。だが其なら、持統天皇朝は其まゝで、文武天皇朝の作物になつて、元號を掲げる訣は、ちと合點が行きにくい。

殊に、藤原宮は持統・文武二聖の宮廷である。其を前期を藤原宮と言ひ、後期になつて大寶某年で表すのは、訣つた様で訣らぬことだと思ふ。等しく、藤原宮では、區別がつかぬと言ふので、後期をさうしたと言ふ考へは、私も久しく持つて來たことだつた。だが、今考へると、其なら前期も朱鳥何年で製作年月を示して行きさうなものである。其にしても此は、どうとでも考へなすことは出來る。だが若し、元來の編纂が、宮廷號を以て排列して行つたのか、年號をも交へる事を考へて行つたのかをきめることによつて、又問題が起つて來る。

「寧良宮」とあるのは、一應形式に叶つてゐるが、其中に又小別けをして年號を配つて行つてゐる。此事については、私ばかりでなく、既に澤瀉さんも書かれたし、其前に品田太吉老もお書きになつた様である。私も長く問題にしてつい書かずに居たが、此機會に少々書かぬのも殘念だから、記しつける訣である。

大寶前の歌

卷一が、やはり同じ式である。藤原宮の中、人麻呂の長・短歌で了ひになつて、其後に、人麻呂に關係あるらしい藤原宮の兒歌二章を列ねて居る。其二首の長歌の間に、志貴皇子の藤原奠都後

の歌——歌の意から見て、奈良遷都後のものかと思はれる。此は、喜田貞吉さんも同説で、夙くに書かれてゐる。——を插んで居る。さうして、大寶元年以下和銅五年に到る三十首が竝んで、其又後に、寧良宮と標記して、長皇子の作一首を据ゑてゐる。卷一の體裁を此まゝに見ると、文武天皇朝以下の作物は、二重に區劃せられてゐることになる。

大寶元年、太上天皇紀伊行幸の時の歌以下、大行天皇吉野の御製までが、文武天皇のもの——大行天皇は文武帝で、從つて大寶の歌以下は、元明天皇御宇に集められたものと言ふことが出來る。併し此は女帝の場合には、特殊の考へ方が、古くはあつたと言ふ事實を考へに入れて見ると、聖武天皇の時に出來たものとも思はれぬのではない。續日本紀宣命の中には、さうした論理の立て方が見えてゐるのだ。

大寶元年以下三十首は、和銅五年が止りになつて居るから、早く撰(ソク)られても、元明朝と言ふことになる。併しさうした事も、實は不自然なので、或はもつと遲れて居るかも知れぬ。而も、其後に出て來る一首は、「寧良宮」としてある。此を何かの誤りと見ることなしに說明すれば、寧良宮は元正天皇朝を意味すると言ふ理由も立つ。其は、平城京奠都は、和銅三年だが、此後初めて平城京に卽位なされたのが、元正天皇だから、嚴密には寧良宮は、此帝の宮廷からと言ふことが出來る。だが、卷二には「寧良宮」に和銅四年の歌二首を含んで居る。之を錯誤と見ることは、卷一の和銅元年以下八首の歌を、寧良宮の標記より後に廻すよりも、自然らしいが、さうした考

へ方は、結局首鼠兩端で無意味である。

其處で私は思ふ。和銅時代の歌までを、ともかく第一次のものと見れば大體にさし支へはない。

さうして後、何かの事情があつて、寧良宮の歌と思(おぼ)しいものを一首（卷一）、又五首(卷二)を追記したものとするのである。其が單なる空想に終らない様に、一つの考へ方を用意してゐる。

桓武天皇の父帝は、光仁天皇であらせられ、其帝の父親王は、志貴皇子である。平安京の宮廷から申せば、光仁天皇・志貴皇子は最大切な御方である。だから、志貴皇子に關した御歌を傳へることは、桓武・平城の諸帝から申せば、大切な意義ある事である。其で、萬葉集編纂の際、從來形の整はなかつた點を修めると共に、既にある完成をなして居た卷々に追補をしたものと考へてよい。私は昔から萬葉集の大成せられた眞の編纂時期を、平城天皇朝——若し、誤つても桓武天皇朝——であるとして來てゐる。

光仁天皇も志貴皇子も、田原東西の陵に鎭つて居られる。直系の御父祖は一つ皇統の御中でも、殊に尊崇遊したから、荷前使を進られた田原東陵も、光仁朝頃からの爲來りで、光孝天皇の御代までは近陵と定められてゐた訣である。卽、志貴皇子の御墓なのである。其で、平安遷都後直前の宮廷としての、光仁天皇朝に關するものを收める爲に、特に「寧良宮」との區劃を立てたのであらう。卽、其處に田原天皇の——志貴親王の追謚——の葬送の歌と、佐紀宮の歌とを、挽歌と雜歌とに收めたと見ることが出來る。

かう考へると、寧良宮といふ名目の立て方は、其以前の宮廷の名目の含む所と、意味が違つて居ることが知れる。唯、卷二の「和銅四年、河邊宮人の歌二首」が、其區劃に這入つてゐるのは、單なる誤記か、其とも、志貴皇子と特殊の關係があつての爲か、判然しない。

大寶以後・寧良宮

さうすると、大寶以後の歌と、寧良宮の歌とが、追加せられたといふ兩度の手入れが思はれて來る。其でまづ、「寧良宮」の分と、其から大寶以後の歌とを除いて考へると、卷一・卷二とも、雜歌・相聞・挽歌に涉つて、柿本人麻呂關係の物で綴めて居ることが明らかに見えて來る。人麻呂集は別として。此說明は、相聞の歌が、磐姬皇后からはじまり、雜歌が雄略天皇から起つて居る事の說明を遂げた上でないと解決は出來ない。

此事は既に、私は書いた事があるから詳しくは述べない。唯、お二方の男女の貴人が、鎭魂に關した名高い方々であられたと言ふことが知られねばならぬ。雄略天皇は屢お怒りになり、其都度、歌の持つ鎭魂の咒力によつて憤りを銷散せられてゐる。三重采女・葛城山で猪を避けた舍人・木工猪名部眞根(ダクミノナベノマヒネ)、此等は皆其獻つた歌によつて御心鎭り、御躬ら亦御製を詠じて罪を免して居られる。歌の靈力を說明するのに、此帝の舊事を說いた事が明らかである。

神代におけるすせり媛同樣、人王の御代になつて、女性の怒りを最激しく表された御方として傳

るのは、磐姫皇后である。其「うはなりねたみ」に關する傳へも、最後に折れて居られること、亦すせり媛の歌の如きである。口子臣（クヂコノオミ）――又、口持臣（クヂモチノオミ）――の妹の歌が、咒力を發するに到つて、漸層的に發した怒りが鎭つて行つたのである。此亦女性の怒りの鎭魂咒力を、歌が持つたと考へたからである。必しも怒りに限らず、鎭魂の威力あるものとして、此古い撰集――必しも欽定と言はず――の一・二の卷のはじめに、由來正しい歌を据ゑた訣だ。

萬葉集卷一・二の標準時代は、舒明天皇以後である。其から遙かに遠い昔の二尊貴の御歌を、各最初に置いた事は歌集としての舊事に從つたものであらう。今一つの大きな部類になつて居る挽歌にも、昔の歌を据ゑさうなものだが、卷二としては既に舊事歌を出した。此には唯、萬葉時代に這入つてゐる孝徳天皇の御子有馬皇子の歌を、齊明天皇時代のものとして、置いたゞけであらうが、此歌には特別の咒力があつたと考へられた點もありさうだ。歌意に副うて、別に在る起死回生の咒力を考へてゐたのであらう。「磐白の濱松が枝をひきむすび、まさきくあらば、またかへりみむ」。靈魂の遊離した肉身に結（ムス）びつく魂の信仰が含まれて居るらしい。其でこそ、此歌、後世までも傳へられたのである。ところが、もつと著しい事は、一・二と成立事情の稍異るらしい卷三の挽歌に、やはり標準時代に在る大津皇子の作を最古いものとして据ゑ、其上に一首、上宮聖徳皇子の龍田山で死人を見られた時の御歌が載せられて居る。「家ならば妹が手枕かむ。くさまくら　旅にこやれる、この旅人あはれ。」此には、表面蘇生の咒力に關した意義は出て居ない。が、

やはり其を考へられて居たのだらう。法王帝説の「斑鳩の富の井の水　活かなくに。たげてまし」もの。富の井の水」があり、又お薨れの後、亘勢三枝の作つたといふ「斑鳩の富（トミ）のを川（カハ）の斷えばこそ、わが皇族（オホキミ）の御名忘らえめ」がある。いづれも、蘇生・招魂の義を含んで居る。三枝の歌は、後代、其餓ゑた人の首をあげて和（アハ）せまつゝた歌と言ふ事になつて居る。つまり太子の歌の靈力によつて、復活したものと傳へたのである。

磐姫御歌と傳へるものが、左註にあるとほり、古事記や古歌集に、別人の作のやうに傳つて居ても、其から、何れが正しいと言ふ答への出て來るものと考へてはならない。尠くとも萬葉集の成立した時代に廣い範圍に渉つて、さうも考へて居たのである。此が萬葉集としての眞實である。同様な事が譬へば古事記・日本紀に出て來ても、萬葉集所傳の價値を破る訣にはいかないのである。記・紀は記・紀、萬葉は萬葉として、別々の傳來の權威を把持して行くのである。萬葉一・二に記載せられた歌としては、上に述べたとほり、飛鳥朝のものが古いものとなつて居る、と見てよいのだから、相聞の場合は、近江大津宮朝の天皇・鏡王女の唱和の歌が第一のものと見るべきである。其から第二次飛鳥朝の歌、即、清御原天皇・藤原夫人唱和の歌、藤原宮御宇の歌と排列せられてゐる。

さうして其末に、柿本人麻呂關係の歌が來るのである。既に言つたやうな姿が、一・二の卷からとり出されるのだから、人麻呂に屬した歌群も、單に歌の時代を人麻呂代に限つたものとだけで

は説明にならない。雑歌の部類で、宴遊・羇旅・祝福其他の意義における呪力を、特に人麻呂の歌に考へる様になつた時代の編纂なのだらう。又挽歌で見ても、人麻呂の死の前後の自他の歌で見ても、ある幽暗な神祕なものが漂うて居る事を感じる。相聞ひとり唯文學作品に近い興味を以て載せられたものとは思はれない。此にもやはりある靈力を、人麻呂作歌に考へたことを思ふべきであらう。

かうして見ると、萬葉集一・二の歌は、前後に呪力ある歌を控へて居る宮廷詩の蒐集である。さうして、其にも亦呪力を持つもの、或は、其舊事を伴ふものと信じられたのだらう。さうして又其徑路を經て殘つたものと言ふことが出來よう。

相聞の用語例一つでないこと

其ならば、相聞歌は全體に、どう言ふ目的を持つて居るのかといふ事が考へられて來る。ひと口に言へば、かけあひの歌である。かけあひの歌は表現上の習慣として、戀愛發想に傾く。其理由は唯一つ。男女對立して物諍(アラソ)ひをするのが、日本古代の祭儀の一部だつたからである。異性間の唱和・問答が、常に採る方法は、性的屈服を強ひるか、又は之を彈ね返さうとする外にないのは考へるまでもない。だから、戀愛或は性欲の衝動なくとも、さうした樣式は出來て行くのである——此言ひ方は實は荒つぽい——。其上祭儀の附屬行事として、神として、巫女としての

男女の語らひが、續く事が多かつたのだから、益かけあひは相手(アヒテ)すぐりの手段になつて行つた。だから極めて稀に行はれたらしい同性間のかけあひを見ると、戀愛發想を採らないで居る。即、其場合は語(コトバ)いどみが行はれ、戰ひの前提になる。平群鮪を歌垣の相手とした貴人——古事記は、顯宗天皇、日本紀は、武烈天皇——の場合は、其例である。此例に入るものも決して尠くはない。此が次第に「惡態(アクタイ)」を發生して行く。萬葉集だけについて言へば、「嗤笑歌」と謂ふべき類のものが、其である。

併し都會・邑落における祭儀が、多く男女贈答の形を條件とする樣になつて居り、漸く歌垣・踏歌式の形が完成するので、かけあひは此方に發達しないでは居られない。即、相聞は原義が萬葉自身にも「古來相聞往來歌類（十一・十二）」とあるやうに、互に問ひ交す義から出て居ることは明らかであつて、山田孝雄さんの「相聞考」に書かれたのは、其まゝ受け入れてよいお說である。往來存問の義で、信書・消息の意味にもなることは勿論である。だが本集の用語例は、古い意義に近いと思はれる若干の戀愛動機のないものゝ外は、殆皆後の戀歌である。而も唱和といふ根本義を忘れてしまつて居るものさへ、極めて多い。つまりかけあひの歌として發達したものが、優れた唱、或は和の片方が傳つて、他は忘れ去られた事が多かつたのだ。

さうした歌は、必しも一人に一人でなく、一人に對して數人でかける事もある。其間に有名な辯口に長けた作家が出て來るのである。

祭儀の場合のかけあひから、求婚・懸想（ケサウ）の表白としての途が開かれて來た。此側では最、相聞往來の義が明らかに出るのである。萬葉には、かうして出來た唱和の一對を多く殘してゐるが、又多く其一方を失つた片方のみのものもあるのだ。

一つの場所に相對して卽席問答を行ふ事から、場所を異にして、往復の時間の餘裕を置いた贈答が行はれて來る訣である。——此にも懸想・消息の發生を說かねば、話が屆かない。我々の想像では、唯一人遂げられざる思ひに歎息した歌も、多からうやうに思はれる。さうして、事實萬葉集にも、さう見られるものが多くあるが、大抵其等は、自分の心に止めておかれたのではなくて、思ひ人の處へ傳達せられたのである。卽、相聞歌である。極めて稀には、人の見ることを豫期せぬ詠歎・述懷の歌もあつたらうといふことは、後期萬葉びとが、文學としての作品を、意識して作つた事實からも考へられる。

だから、相聞と言つても、萬葉自身において、色々の用語例を持つて居ると見るが正しい。

戀と相聞と

かけあひを本義として、相聞の字面を借りて書き、其音を借りて通用言語としたのだが、かけあひに初つて、戀歌に到るまでの變化を、本集一部の中にも示されて居る訣である。だから、原義に卽し過ぎて說くのは、却て誤りになることが多い。謂はゞ言語の用語例を語原に膠著して置か

うといふことになるのだ。唯、戀歌と言はなかつたらうと思はれるのは、かけあひと、稍方法を異にするものに、「こひ」及び「こひうた」があつたからだらうと思ふ。「こひ」は相手の返答を豫想して居るものではない。言語のみならず、色々な行事によつて、他所にある魂をとり迎へようとする咒術が、「こふ」の古意であつた。

磐姫皇后の「かくばかりこひつゝあらずは」は、原義の「こふ」に譯すると共に、數次の變展を重ねた「戀に焦れる」義の「こふ」の側からしても、意義全體が說いて行ける。此御歌は、「わが思ふ人は死んで奥山の石の槨（カラト）に枕してゐる。こんなに招魂法を行つても〳〵かひのない位なら、かの人の許に行つて、其石を枕の死骸となつて横つてしまつた方がよかつたのに」と言ふのが、本義であらう。其が、早く別義に解せられて、戀に苦しむものが寧、死を希うたものと思はれ、さうした側に多くの類型を生じて來た。前の譯からすれば挽歌のやうに見える。だが、古い意味における「こひうた」と見るべきだらう。其が變化して、はじめて相聞——此こそ戀歌——の歌と考へられるやうになる。卷二卷頭の「君が行きけ長くなりぬ」も亦同樣である。山尋ねは「山たづの」の變化したものと考へる人の方が多いかも知れぬが、却て「山たづの」と枕詞に見る方が、合理化せられ、單純化せられて來たのだと思ふ。「山たづね」は靈魂が逸して山中にあると信じ、其を迎へる方法のあつた事を示してゐるのだ。山路をたづね行くと、魂を迎へ出す事も出來、魂を失つた人も活き返るものと考へた咒術なのだ。人の死を旅の如くに考へて、君が行きを日長

くなつたとするのである。其を山尋ねの呪術で呼び迎へようか、どうせうかと迷つて居る心である。此場合、聲を立てゝ死者の魂を「こひ」迎へるのであらう。氣絶したものも、喪心したものも、危篤の病ひに居る者も、かうした方法で救ふことが出來ると考へるのである。併し、之を挽歌と考へる人はない。だが、挽歌と考へつめるのも、考へ足らない。つまりは「こひうた」としてゞある。

「こひうた」は、此意義において相聞の部に這入るものもあり、挽歌の部に這入るものもあつた訣だ。戀も、招魂（ヨビ）——魂（タマ）よばひ——から來た一つ精神の分化なのだから。

かうして見ると、卷二が、近似した相聞と挽歌との二部類を、一卷の中に立てゝゐる理由も訣る。古人は此關係を知つてゐたのだ。其は相聞・挽歌の字義說からは出ない。民間に行はれた風俗式な歌などでは、かうした理由から挽歌が相聞になり、相聞が挽歌になり、色々な合理解によつて、本義が轉換して考へられてゐたことは察せられる。

相聞歌の排列

卷二には、相聞の字義に近い姿を持つたものが多かつた。其次の「近江天皇御製と鏡王女の奉和歌」、「藤原鎌足と鏡王女との唱和」、其次に「采女安見兒を娶つた時の歌一首」を插んで、「久米禪師・石川郎女の唱和」同じく「大伴安麻呂と巨勢郎女との贈答」、更に清見原宮廷代に入つて、

「天皇と藤原夫人の唱和」、藤原宮では、「大津皇子・大伯皇女」、「大津皇子・石川郎女」の一對の歌々があり、其後へ、大津皇子の「津守の占にのらむとは」の歌、日竝皇子尊の「大名兒ををちかた野べに刈る萱の」と言ふ二首、兩方ともに石川郎女の和（アヘ）せた歌は出さずに、單獨に載せてあるが、郎女の和せ歌のあつたことは察せられる。

其次が「弓削皇子と額田王との、吉野宮を中心にした唱和三首」である。此は普通單なる唱和の歌と見られ、相聞が直に戀歌を意味せないことの例に當るものである。尤、此頃額田女王は相當に傾いた年に達してゐるのであらうが、必しも戀愛相聞でないとは言へない。又、實は古人の考へから見て近親ではない。併し何よりも考へてよい事が一つある。山の時鳥を「魂ごひ」する靈鳥——魂を呼び出す鳥聲の信仰は深く保たれた——と聞きなして、其を直に額田王に推し當てたのが弓削皇子の歌で、額田王の和せ歌もまた「吾が戀ふる如」と兩方から「こふ」を持つてゐる所から見れば、戀歌でないまでも、魂ごひ歌、卽古い意義における「こひうた」らしい俤は備へてゐるのだ。

次が、「但馬皇女を中心にした情史の歌物語から出たと思はれる三首」で、必しも穗積皇子との唱和を其まゝ傳へて居ないが、大體に、片方づゝが殘されたものと見える。其から、「舍人皇子と舍人娘子の唱和」、其後が詞書では、「弓削皇子作四首」となつて、和せ歌を亡つた樣に見えるが、一一九・一二一は紀皇女作と見れば、各一對と見られぬでもない。其から、「三方沙彌と園生羽臣

の女との唱和歌の中三首」、之に次いで、支那小説を學んだ様な引を持つ「大伴田主・石川女郎の贈答三首」、大伴集の編纂方法を思はせてゐるものである。又「同人の大伴宿奈麻呂に與へた歌を次に置いてゐる。此も男の和せた歌を記さなかつたと言ふまでゞあらう。其から「長皇子與皇弟御歌一首」。皇弟といふ字面不正確であるが、此は戀愛の歌ではなさゝうに見えるが、内容からは戀歌と擇ぶ所がない。歌柄から見て、魂に關した「こひうた」なることは察せられる。恐らく皇弟――弓削皇子か――から達した病氣平癒を祈るやうな魂ごひ歌の答へらしく思はれる。扱最後に、「柿本人麻呂の歌群」である。「石見國から妻に別れて上京する時の長歌・短歌」、「或本の歌」の末に、其に和せたらしい「妻依羅娘子の歌」――この妻の住み處については、種々議論も立つ。又此娘子に關しては、齋藤茂吉兄の名説がある。其も述べたいが今はあきらめる。――が出て、相聞の部は終つてゐる。此は和せ歌として見ると、今日の感じでは、稍不穩當らしいが、よく見ると、長歌の「なつくさの　思ひしなえてしぬぶらむ妹……」「我がふる袖を妹見つらむか」などに、妹に思ふ女と言ふ義のあることが古代人の考へ方としては含まれて居り、其に關して述べられた和せ歌と見てよい。併し全然別な他の歌に合せたものと見ても、固よりさし支へはない。――（未完）――

相聞歌

昭和十二年七月、鑑賞短歌大系「萬葉戀愛歌讀本」解説

萬葉集に、戀歌といふ部類はない。戀歌といふ名は古今集から始まつてゐる。併し、戀歌といふものは、古今集以前にもあつたには相違ないが、ずつと昔に溯ると、戀歌の意味が違つて來る。其は戀愛歌といふ意味ではなかつた。

こひ歌といふことは、相手の魂をひきつけること、たま迎への歌といふことだ。その手段にも目的にもいろ〳〵とある。人が死んだ時もこひ歌があるし、勿論生きてゐる人に對しても、また、女なら女を靡かせようとする時も、女の魂を引きよせる爲のこひ歌がある。だから、こひ歌とは、結局魂乞ひの魂が脱落したことになる。古今集で戀歌からで、萬葉集で戀歌といふことを使へば、きつと、今集に到る、凡百年位の間に、いつかこひ歌が、戀愛の意味を表すことになつたと見てよい。

古今集でいふ戀歌を、萬葉集で求めると、所謂、相聞、或は相聞歌と書いてある部分にあるもの

が、之に當るらしい。けれども中には、當らぬものがある。其は相聞といふ部立（ブタテ）の意味からして、戀愛とは違ふからだ。昔の戀歌の、古今集の戀歌に近いものは、掛合（カケアヒ）の歌、またはその約束で發達して來たものとみた方がよい。つまり、男と女との掛合ひの歌だ。だから、正確に戀歌に這入らないものがある。處が、此掛合ひが、支那の相聞往來――とりかはせ――に當る訣だ。お互に問ひ交はすことが相聞である。しかし日本の掛合ひ歌には約束がある。問ひ掛ければ、當然、答へなくてはならぬが、問答は初めから答へがあるけれども、掛合ひは、答へを豫期しないものもあつたので、ちやうど、掛合ひといふことゝ、相聞とがよく似て來る。

つまり、問ひ交はしと日本の掛合ひと、ちよつと意味が似て來るので、相聞といふ字を用ゐたのである。だから、相聞の部には男女の掛合ひでない歌もある。また、全然、戀愛歌でないと見られてゐるものでも、何處かにその形跡をもつてゐるのもあり、どうしても戀愛歌でないものもある。相聞の部にはさういふ類の歌がある。これらは戀愛歌としては、むしろ除外してよいものである。

その時分は戀は魂乞ひであるから、戀歌といふ部を立てなかつた。で、萬葉集では、先程言ふやうに、相聞は掛合ひだから、問ひと答へがある筈だが、答へがなくとも、戀愛的の氣分のあるものなら獨白でも掛合ひと言へる。これは、考へなければならぬ事だが、一首だけあつたからとて、

初めから一首だけの歌ではないと言ふことだ。二首ならず、數首に亙る場合もあらう。譬へば宴會の時とか、春秋のどちらがよいかといふ、澤山の人が作つても、其時の有名な歌だけ殘つてゐると、其だけだと思ふ樣になる。同時に、一首の相聞、つまり、初めから一首だけの、答へを伴はぬ歌もある。萬葉時代に文學的の意識も生じて來るから、文學作品として作つてゐるもの、相手から言うて來るのでなく、一人で嘆息するといつた歌もあるのだ。新しいものには、明らかにこれがみえる。かういふ訣で、相聞の中のもの、必しも相聞と、簡單に言ひ切れない。

譬喩歌（ひゆか）といふものが、おほよそは宴歌である。掛合ひは、祭りに行はれる男女の歌だから、戀愛みたいに見えるけれども、譬喩歌も殆、戀愛歌である。萬葉の分類の原則に從へば、雜歌・相聞・挽歌の三つがある。處が出來た動機によつて、其に對して違つた、內容的な分類を行うたものが、譬喩歌である。普通の抒情詩は正述心緒（せいじゅつしんしょ）歌、其に對しての寄物陳思（きぶつちんし）歌と、同じ抒情詩でも二つの分類を作つてゐる。譬喩歌は、中には賀歌で祝福を目的としたものがある。これは、宴會などで歌ふからであらうが、多くは戀愛歌である。

又、卷に依ると春雜歌・春相聞・夏雜歌・夏相聞といふ風に、雜歌・相聞を四季に分けてある。春の雜歌は普通の自然描寫、春相聞は譬喩的におもひをのべてゐる。支那の言葉でいふと興體と

いふ。別のものをいうてゐるうち、ひよつと戀愛の想ひを表してゆくといふ様なのが、四季の相聞に多い。

處が、いま一つ言ひ殘してゐる挽歌といふのは、人が死んだことを中心にしてゐる歌だが、先程言つた様に、その一つの形が戀歌である。死んだ人の魂を呼びよせることが忘れられると、挽歌も戀歌の様に見られて來る。だから、歌の出來た場合を知らずにゐると、戀愛歌であるか、實の處訣らない。たとへば卷二の、

かくばかり戀ひつゝあらずは、高山の岩根しまきて　死なましものを　（八六）

これは立派に相聞の歌として殘つてゐる。高山の、岩の枕をまいてゐる人がある。其人に對して言うてゐるので、「人を高山の石根（カラト）――石槨――に送つてしまつた。こんなに焦れてゐる位なら、あの人と一處に死んだらよかつた」といふのである。後の人からみると、死の考へを拔いて、「こんなことなら、いつそ死んでしまへばよかつた」と自分の希望の樣にとる。挽歌とも相聞とも、どちらにでもとれるが、これは挽歌だと思ふ。萬葉集もその事情を忘れてゐるのだ。實は、これは死者への慰めなのである。この歌は磐姫皇后の御歌と傳へられてゐるけれども、その傳へを離れて考へるのである。

君がゆき　け長くなりぬ。山尋ね迎へかゆかむ。待ちにか待たむ　（八五）

古事記の方では、輕大郎女（カルノオホイラツメ）の歌になつてゐる。どちらにしても、「あまり戀しいから、その人の

來さうな道を進んでいつて探しに行かうか」といふ心で、磐姫の御歌と、輕郎女の歌とは多少變つた處があり、今では輕郎女の「山たづの迎へをゆかむ。待つにはまたじ」の方が正しい、少くとも單純化したものと思つてゐるが、何方が本道かはわからない。たゞ、「山尋ね」は魂のありかを、つきとめに行くことを言つてゐるのだ。山たづは接骨木のこと、迎へるの枕詞で、たとひ山尋ねではなくとも「その魂をむかひに行かう。待つてゐても到底まちきれぬ」といふ意味は考へられる。かう考へると、挽歌と相聞との間は、ほんのちよつとの差があるにすぎないことが知れよう。戀しい〳〵といふ死者に對する慰め、その中から死といふことを取り除けば、戀愛歌となる。

戀愛歌にしても、相手の魂を引き寄せようとするのだから、どうしても誇張が必要である。また、譬へば卷三の挽歌、

岩戸破る手力もがも。手弱（タヨワ）き女（ナミナ）にしあれば、すべの知らなく　（四一九）

河内王を葬る時、手持女王の作られた歌で、その境遇が傳つてゐるから、挽歌となつてゐる。非常に強烈なものとして推賞されてゐる。こんなに強烈に表したら、今なら誇張と言はれよう。處が、「手力雄が、むりに岩戸を開いてしまうたあの力が、私にもほしい」と解するなら、大分生ぬるくなる。又、今一つ有名な例で、卷十五に中臣宅守と狹野茅上娘子の戀愛歌がある。あれも、果して二人が作つたのか、それとも、奈良朝の後の文學者の作つた文學作品か、どうか、訣らな

い。

君がゆく道のながてを繰りたゝね、焼きほろぼさむ　天の火もがも　（三七二四）

女の情熱のはげしい歌として、代表的なものと思はれてゐる。山の蔓草にたとへて、君がゆく道のながてというてゐるので、この譬喩からして生ぬるい。後の鑑賞家はその實感を持たないから、「道をくり疊んで焼いてしまふ」といふ風な強烈さを感じるのだ。とも角、言葉だけは烈しい言葉を使つてゐる。使はなくてはいけないのである。手持女王にしても、茅上娘子の歌にしても、遠くへ行つてゐる愛人の歌としてみると、なまぬるいが、聲だけは大きい。それにしても、近代の我々が感じるほどの情熱はないのだ。

萬葉集の鑑賞も、本道はさういふ考へ方から出發してゆくと、新しく開拓することが出來る訣だ。鑑賞する以上は、まづ萬葉の歌の一字一句と雖も、等閑に見てはならない。併し、文字の解釋だけしてゐても訣らないものがある。萬葉びとの心を動かしてゐる處の前代知識——民俗とも傳誦とも——を知つてゆかなくてはならない。人はお互に共通するものをもつてゐる。中には古代から今に直通してゐるものもある。此を究めるには、民俗學を補助として考へなければならない。國語學をいくら積み上げてみた處で、もう今は得る處は少い。だが、同時に何というても、歌の佳し悪しが訣らなくては困る。鑑賞はまづ第一に文句に卽した解釋でなくてはならぬ。處が、大抵は歌を離れて、一部分を延長してゆくことが多い。國語學的に解釋してゐるものも精神が抜けてゐて、その上に文學としての鑑賞が低級である。其を糺す爲には、戀愛歌などは都合がよい。

短歌といふものが、戀愛的な動機から發達してゐるから、自然戀愛詩が多いことになる。所謂民謠をみると、大よそは戀愛詩——敍事詩のこはれたものもある。殊に、東歌をみると、勿論多少は自然描寫になつてゐるものもあるが、殆、皆戀愛歌である。東歌の戀愛歌も掛合ひがあるけれども、今一つ東歌の中で注意すべきは誓ひの歌の多いことだ。女が男に、或は男が女に、二人の間の絶えないやうに誓ふ。これも實は誓ひの歌か、こひ歌か、つきつめると訣らぬ。

人皆の言は絶ゆとも、埴科の石井の手兒が　言な絶えそね　（三三九八）

民謠としてよい歌である。「石井の里の石井——岩の間から泉の出てゐる處——で水を汲んでをるをとめよ。世間の人がみな絶交しても、俺にだけは絶交するな」といふことで、これは獨白ではない。誓約の歌だ。かういふ種類の歌が、かなり澤山ある。東歌の戀愛歌は、どうで本道の抒情詩ではないわけだが、やるせない心を慰めるといつた民謠が多い。それも實は、敍事詩から離れて來たものを歌つてゐる中に變つて來たもので、個人の作ではない。

この歌も、本道は、村人共有とも思はれてゐる處女をば專有することに對しての、村の制裁——村八分——を心におくべきだ。それで「人皆の言は絶ゆとも」がきくのだ。一方に強く一方に弱く、女の爲に哀願してゐる處が面白い。又この單純さは、古代の歌なればこそと思はれる。だが、

同時に單なる抒情詩でなく、傳說上の女を、つい最近居つた様に考へ、それがどうかすれば手に入る様に見てうたふ處に、民謠としての抒情法があるのだ。結果から見れば劇詩的であり、敍事詩的でもある。

昨夜(キゾ)こそは　子ろとさねしか。雲の上ゆ鳴き行く田鶴の　ま遠く思ほゆ　（三五二二）

この歌など、まじめに歌つてゐる様に見える。「雲の上ゆ鳴き行く田鶴の」は間遠を起す序歌であるが、其を生かして來た方が美しいから、實景の様にして、現に「雲の上を鳴いて通る鶴のこゑが遠くに鳴いてきこえる様に」といつた近代的な鑑賞も行はれてゐる。この歌は男が女と後朝の別れをして、戻つて來て女の處へやつた歌で、「昨夜逢うたばかりの今朝なのに、遠い昔の様な氣がする」といふのだ。

民謠とは言へ、純抒情詩と見てよい程のものをもつてゐる。

坂越えて　阿倍の田の面に居る鶴の　ともしき君は、明日さへもがも　（三五二三）

地名の阿倍(アベ)を喘ぐに通はせたので、山坂を越えて喘ぐ、とかけた。近代的に考へると、靜岡の邊りを見はらした様な感じを持たす。「阿倍の田圃に降りてゐる鳥のちよぼ〳〵ゐる——山坂越えて喘ぐ、その阿倍の田圃に居る鶴のともしい——よい此人は、明日までも逢ひたいものだ。」といふことで、もつと來てほしい、明日も會ひたい。或は明朝までも會ひつゞけてゐたいといふ意だが、多分、前者にとるのが本道だらう。山を越えて阿倍の里の田の面を見た様に說くが、實は

さうした感をもたせるに過ぎない。でも、其氣持ちを含んで見る餘裕もある歌だ。此歌は、序歌が傑れてゐる事によつて、下の句も勝つて見える。ともかく、傑れた歌の一つである。きぬ〴〵の歌だ。だが、そんな個人同志のものが傳る筈がない。さうした形式の時には、從來ある歌を使つたに違ひない。個人の經驗と思ふ方が面白いかも知れないが。

かうした歌には必要以上の誇張をしてゐるので、ために抒情詩であるべきものが、敍事詩の領域になつてゐたりする。で、萬葉集の戀愛歌についても、いろんな方面があることを注意しなくてはならないと思ふ。

萬葉集の戀歌

昭和十三年一―六月「婦人公論」第二十三巻第一―六號。原題「萬葉集戀歌讀本」

戀歌は、私にとつては、謂はゞ大きに苦手であるけれど、短歌の分類として廣い部分を占めて居り、又萬葉集にも、名こそ變れ、「相聞（サウモン）」として、凡想像以上の分量を持つて居る。さすれば、國文學を研究するものにとつては、どうしても、知つて置かねばならぬと言ふこと以上に、なぜさうした領域が、短歌の上に開けて來たか、と言ふことを思はなければならぬのである。歌が抒情詩だからさうなつた、と言ふ樣な答へは、其自體答へになつて來ない。却て、戀愛の歌が多かつたから、短歌が抒情詩として見るべきやうになつた、と逆に言ふ方がほんとうなのである。こんな問題も考へて行くことが出來れば、民族文學の本質研究の爲にも、何かの役に立つことゝ思ふ。一體、明治・大正・昭和に渉る新派短歌も、新詩社の作風が主情的であつて、所謂ろまんちっくな態度をつきつめて行つた爲に、戀歌として異常な伸び方をしたものである。其にとり替つて出て來た根岸派――今のアラヽギ派をその主流とするもの――は、謂はゞ沒主觀主義の正岡子規の唱道した寫生を態度と立てゝ居たのである。萬葉集に相聞――戀歌――を多く持つて居ると言ふ

點から、戀歌に理會はないではなかつたが、立て前として、多く自然描寫の方へ進んで行つた。だから、此派が短歌の世間に著しい勢力を出して來て以後、今になつても、尙戀愛歌の數は、敍景詩と比べれば、わり合ひにもならぬほどしかないと言へる。だから其意味でも、萬葉集の戀歌から、今一度、見直して行く必要がありはすまいか、と思ふのである。

今度の書き物は、學問くさい爲方を幾分緩めて、鑑賞的に萬葉集を見て行くのであるから、まづ作物について話して行きたい。

君が行き　日長くなりぬ。山たづね　迎へか行かむ。待ちにか待たむ　（八五）
かくばかり戀ひつゝあらずは、高山の磐ねし枕きて、死なましものを　（八六）
ありつゝも　君をば待たむ。うちなびき　吾が黒髪に霜のおくまでに　（八七）
秋の田の穗の上に霧ふ朝霞　いづへの方に　わが戀ひやまむ　（八八）

右の口譯、

（八五）　あの方のお出かけ……其が日數長くなつた。あゝ私は、山を尋ねて迎へ行かうか。其とも此まゝ、待ちに待つて居ようか。

（八六）　こんなに焦れ〳〵して居るよりは、いつそ、山の岩に枕して、死んでしまつたらよかつたのに……。

（八七）　このまゝぢつとして居て、あの方をお待ちして居ようよ。私の此髪に、曉の霜がおく
時分まで。

（八八）　稔り田の穗の上に、もや〳〵立つて居る朝の霞――霞は消えて行く方がある――其で
はないが、私は焦れ心が止まらうか。どつちの方へ。

口譯が不出來で恥しい。唯忠實に逐語譯をして、其々の歌の趣きをも出さうとするのだが、古語と近代語とでは、どうにも繫りのつかぬ所が出來て來る。

此四首は、萬葉集で嚴格に言つて、相聞歌の一等最初にあるものである。だから、宮廷における傳誦の正しい歌と考へられて居たことが思はれる。

詞書には、仁德天皇の皇后磐姫（イハノヒメ）の御歌と言ふことになつて居る。尤、かうした傳へは、古く格式のある文學には、ついて來易い考へ方であつて、古代日本では長くさう信じられて居たので、却て偶然高貴の方が作られたと言ふよりは、久しい歲月に磨きをかけられ、其處に民族としての眞實感が寄せられて居ることを考へなくてはならぬ。だから、古事記には、別の傳へが此と殆同じ歌詠の上に稱へられて居た。仁德天皇の皇子であられた允恭天皇の皇女輕大郎女（カルノイキホイラツメ）が、輕太子（カルノタイシ）の伊豫に流されておいでになるのを慕はれて、追ひ往かれた時の御歌だと言うて居る。

君が行き　日長くなりぬ。やまたづの（ニ）迎へを行かむ。待つには待たじ　（九〇）

（口譯）　あの方のおでかけ……其が日長くなつた。やまたづの向き合ふ――其ではないが（枕

詞）迎へ行かうよ。こんなにして待ち〳〵しては居まい。

歌の姿は似てゐるが、氣持ちはすつかり變つて來て居る。長い年月の間には、いや皇后樣のだ、いや御孫皇女のだといふ風に、貴族の家に、國々の語部の間の傳へが、作主から、歌の形まで異說を主張して居た樣子が見えるではないか。

さう言へば、同じ竝びの中の（八九）の御歌が、萬葉集の現在本では、「或本歌曰」と詞書して、

居明（アカ）して　君をば待たむ。ぬばたまの　吾が黑髮に、霜はふるとも　（八九）

（口譯）　坐つたまゝ夜明けまで、あの方を待つて居よう。私の髮に霜がふる樣になつても…。

「ありつゝも」と「居明して」では、大分違ふ。橫にならずに居る狀態を持續して、とれば、語は替つても、意義は結局おなじだが、若し「霜のおくまでに」を白髮になることの譬喩だと見れば、旅行きから還り遲いお方が、戻つて來られない限り、此まゝで居てと言ふことになるのだから、餘程二つは變つた歌になつて來る。どうも（八五）（八六）の歌からすれば、さうした考へも成り立つので、白髮の譬喩は、もつと時代が降つての事だとは言へないのである。

「居明（アカ）して」の傳へは、「古歌集」と言ふ名で、萬葉集に一括して稱せられてゐる昔の歌集群の一つの中に出て居たよしは訣るが、作者も境遇も傳へないから、唯普通に、夜夫（ヨヅマ）と許した人の來るのを待つて、時間が霜の降る曉方（アケガタ）――午前二時頃、昔は曉は早く、暗い中である。――に近くなつても、其人の來ない心細さを歌つたものと見る外はない。

尤、「ありつゝも」「秋の田の」の御歌と言ふものには大した問題はない。唯、表現が仁徳天皇の御代よりは新しくて、我々にぴつたり來ると言ふ點が、頭に殘るだけである。此とて古歌の時を經て通じなくなつたものは、其訣らない固定したまゝを、そつくり傳へた事は多い。が一方に物語を語り傳へる人々——語部——が、知らず識らずの中に語り換へ、歌ひ替へした痕迹も確かに見られるのである。夫々、人間の語を扱ふ者として當然ある筈のことだと思ふ。

磐姫皇后の御歌が、もつと古い時代の語で傳へられて居たのが、何時か段々かうした形に變形して行つて、而も中の精神が變らなかつたのでないか。さすれば、傳へる者が虚僞の意識を以てせず、信じ〳〵て居る以上、やはり民族文學としては、此御方の御作と見るべき訣である。だから序に、今少し此二つの歌の解釋をして置いて、(八五)(八六)に進むことにしよう。

(八七)は、うちなびきが枕詞で、髪にかゝつて居ることは勿論だが、此をうちなびくと讀む說に從ふと、そのものに掛つて靡いて居る有樣から、うちなびく髪となるので、枕詞ではないことになる。其でも殊更、なびき掛つて居るとまで譯せねばならない程の使ひ方でなく、唯慣用上、髪と言へばふと古くからのうち靡くと言ふ修辭が、くつゝいたと言ふ程度と見るべきなのだ。此がすこし新しくなると、

君待つと　庭にし居れば、うちなびき（く）　吾が黒髪に、霜ぞおきにける　（三〇四四）

と言ふ風に一・二句の條件がついて來る。はつきりするが、感情を寧、敍事に替へてしまつて、

つまらなく淺くしたものと言ふ外はない。「霜のおくまでに」の「までに」は、古くは正確には「までに」と言ひ、「まで」をも併用したのである。「秋の田の」は、大體この上の句の樣な形が流行して居た事が察せられる。「秋の田の穗の上における白露の」と言ふのもある。だから、口を衝いて、かう言ふ類似した句は幾らも出る。其を言つてゐる間に、自分の言はうと思ふ心持ちが整頓せられて來る。つまりかう言ふ句が、枕詞と同じ爲事をする訣で、其と違ふ點は、句が長くなつたゞけである。一句以上の枕詞を「序歌」と言つて來てゐる。つまり、「秋の田……朝霞」は序歌である。

繰かのきつかけを見出して、心のはけ口がつく訣だ。朝霞は、どつちかへ靡いて消えるが、自分の思ひは消える事がなからうと悲觀したのである。

「山たづね」と「山たづの」とは、人によつて、どちらかに定めようとする傾きがある。中には元、「山たづの」とあつたのが段々うたひ訛つて「山たづね」と合理化したのだと、可なり有力に主張してゐる向きもある。若し前後を假りに定めてもよいものなら、私にも一說はある。「山たづね」の方が小說的に見えて、新しく思へるかも知れぬが、さうした近代感を此歌に持つのが間違ひであらう。素朴に考へて見ると、どうも此方が古い。山尋ねを、戀人を尋ね求めて山路を越えて行くやうに考へればこそ、戲曲的な興味を狙つてゐるやうにも見えるのだ。元々さうではない。山たづねとは、魂を呼び迎へる、所謂招魂法で、後世もした「魂呼ひ（タマヨバ）」の古い一つの方式である。

魂が抜けた様に茫然としてゐる場合、又死に瀕した危篤の際、もつと、屢死んでしまつた後、蘇生の手段として行ふ招魂の法に、山に入り立つてするものがある、山たづねとは、山に魂を呼び尋ねる意であつた。さうして其魂が呼び迎へられて還つて、其人の身に入ると、呆人(ハウジン)は元の知覺・記憶をとり戻し、篤疾者(トクシッシャ)は平癒し、死人はよみがへる訣であつた。こんな呪術が信じられた時代には、屢さうした奇特な效驗が實際にも現れた。勿論今はない。魂呼(タマヨバ)ひと一口に言ふが、古代の語で言ふと、此が「魂ごひ」である。略して又「こひ」とも言つた。

思ふ人ある時、其魂の一部を呼んで、自分の身に迎へる事に成就すれば、其心は叶ふのであつた。叶うたものと信じたのだ。戀愛を遂げる爲に「魂ごひ」を行ふ事は、あるべきものがないから思ひが叶はぬもの、と逆推理を立てゝ居たのである。之を迎へるのには、袖をふり、又女は殊に頸にかけた領巾(ヒレ)なる布を其人に向つて振つた。「魂ごひ」の呪術である。其がもう、萬葉でも、大半は戀愛の意思表示の方法と言ふ風に考へられた。やるせない時にもする事のやうにすら思はれて居る歌が多い。此等は皆、戀愛成就の爲に行うた方式だといふ事を、忘れはじめて居たのである。魂(タマ)ごひを行ふ心構へに居なければならぬやうな境遇を「こひ」と言ふ様になつたので、實は「魂ごひ」の略語とも言ふべきである。だからこひ——魂ごひ——を通じて見ると、死者の爲の魂呼ひも、生人のする戀愛も、相通ずる一つの信仰を底に持つてゐたのである。だから、思ふお人の旅長きに思ひ煩うて、この爲に魂ごひをすることもなかつたとは言へない。さうすれば、此は夫

の君のお還りを迎へに行く歌と言ふよりは、還りを促す方式としての山尋ねと見る方が正しいと思ふ。だが（八六）の歌と照し合せて見ると、どうも別の事に考へる方がよいのではないかと思ふ。我々が戀の御歌と思ふ様に、萬葉集既に相聞の歌としてゐるが、どの御方かの御喪に籠つて居られた時のものが、傳誦の間に誤解せられて、魂ごひの一方の意義に感じられて行つたものと思ふ。殯宮(ヒンキュウ)に据ゑた貴人の御身に、魂の還り憑(ヨ)つて蘇生せられるやうに咒せられたものと見るのが、どうもほんとうではないかと思ふ。

「かくばかり」の方は、かの深く人を愛し給ひ、思ひあまつて激しく嫉妬心(ウハナリネタミ)を發揮なされた磐姫皇后の御作、と傳へるだけの情熱は感じられる。萬葉集の編者もさうであつたらうが、後人も亦此歌をかう考へる。「焦れるよりは死んだ方がましである」。戀に堪へないからの自棄(ヤケ)のもの言ひと見るのは、一應尤である。だが、御歌と傳へる此作が、若しかう言ふ風に解けたらどうだらう。わが思ふお方は、山の岩枕にかくれなされてゐる。其お方をよそに、生きて焦れて居る位なら、私も其山の岩を枕して死んだら、よかつたのに——或は死なうものを——。かう說明して大して不都合はないのである。さすれば、此皇后でない他の古代人の作物が、どうした理由でか、かう言ふ傳誦の形で傳へられた。さうして、死者を慰める歌であつたものに、別の解釋を生じて來たのだと見ることが出來よう。又、其方が正しいのだが、表現に新しい方法が生れて來る徑路を考へると、全くかうした誤解が、實感よりも一際強く張つて、言ふ快さを感じさせる所から、段々

用ゐられてゐるうちに、次第に新しい妥當性が出來て來て、後で思へば、古い表現の方が却て間違つて居るやうに、考へられ出して來るやうになつたのでなからうか。

最初の話としては、少しむつかしくなつた。だが、戀歌といふものゝ原義を說き得たと思ふ。其と共に、歌には長い間に、意義解釋が段々變つて行つたものだといふことも、序を得て、一口言つた訣である。

註一　（ずは）ずばではない。……するよりは、又は、……位ならば、と譯すべき古語。

註二　（やまたづ）接骨木の木で、其葉が對生する所から向ふ・迎ふの枕詞になる。此には異說がある。

妹（イモ）が家も　つぎて見ましを（三）。大倭（ヤマト）なる大島ノ嶺（オホシマノネ）に、家もあらましを（四）　——天智天皇（九一）

磐姫皇后の御歌の次に出てゐるのは、近江大津宮の御宇（ミヨ）の歌々で、其初めのが、此御製になつてゐる。昔の歌には色々な傳へがあつたもので、此お歌にも、「妹があたりつぎても見むに……家居らましを」となつた形も傳つてゐたのである。

假りに、男の人から、しみ〴〵とした思ひを訴へて來たとする。さうした時に、どう言ふ返事を與へるだらう。かう言ふことが、昔の貴族の家庭での女性教育には、一等大切な問題としてとり扱はれて居た。事實、古代から中世へ渉つての女性生活では、此以上重大なことはなかつたのである。貴族社會に限らず其以下の人々の間、又部落の民の中でも、さうたやすく男の人の欲する

答へをやることはしなかつたのである。

さうかと言つて、全く其を默殺してしまふ樣な態度を採ることはよくないもの、とせられてゐた。後代式に考へると、其が相手を侮辱したことになるのだが、さうした考へ方よりも、もつと先に考へなければならぬことがあつた。つまり全く壓服させられてしまつて、所謂音をあげたことになるのだ。だから、言ひかけた詞に對しては、必其に相當した和（アヘ）せの詞（コトバ）が返された。此を女性は常々練習して、當意卽妙の返しが出來るやうにして居た。さう言ふ中にも、殊に巧な婦人が屢現れて、村の男・他鄕の男が、とつかけひつかけ戀歌ひかけて來るのに、卽座に應酬して、かけ詞を壓倒すると謂つた人々があつた。其が地方歌人として名を高め、其作物と傳へるものが、後世まで段々殘つて來たのである。萬葉集の作者にも、其以後の女流歌人にも、さうした人が隨分ある筈である。

吾を待つと君が濡れけむ　あしびきの　山の雫（シヅク）にならましものを　（一〇八）

かう言ふ歌を見て、極めて從順な女性を想像しては、それは大きな誤解である。

わたしを待つと言ふので、あなたがお濡れになつた筈の、その山の雫になつたらよかつたわ——。

考へ方によつては、纏綿たる情に呆（ホ）けた女の人の心のやうに見えませう。山下雫（ヤマシタシヅク）が、人の著物を濡す。さうして其膚について離れない。さう言ふ雫をも羨まなければならない境遇にある男女を、空想してはならない。古代の歌を、さうした讀み方をしては、文學的にとれるかも知れぬが、其

と同時に内容は、歌自身を游離したものになるのだ。知らず識らずの間に、自分や自分の持つてゐる時代の文學に近づけて、古典を解釋してゐると言ふことは、古典自身とは關係の頗薄いことになる訣である。古典は其自身の作られた時代――出來るだけ其時代らしい解釋を立て前としなければ、一切むだごとになるのである。文學的に讀んで見たところで、作者の心持ちや、其歌の出來たに近い時代の讀者の心持ちと、沒交渉な讀み方では、しかたがない。「文學」を失つても、「時代」なり「作者」なりに幾分なりとも近づいた方が、正しいことは言ふまでもなからう。

此は、石川郎女（イシカハノイラツメ）の歌で、大津皇子（オホツノミコ）のお歌に和せたものである。

あしびきの　山の雫（シヅク）に　妹待つと吾立ち濡れぬ。山の雫に
　　――大津皇子（一〇七）

吾を待つと君が濡れけむ　あしびきの　山の雫にならましものを
　　――石川郎女（一〇八）

かう並べて見ると、單獨で見た場合とは、意味が變つて來ずには居ない。

彼女――卽おまへを待たうとして、山の雫におれは立つて居て濡れたよ。その山の雫によ――。普通の場合、女の人から來り訪ふことはないが、このお歌で見ると、石川郎女の方から通うて來るのを、お待ちになつて居るやうに思はれるかも知れない。だがさうした事は、ないのが當り前だから、やはり大國主命が沼河媛（ヌナカハヒメ）を妻訪（ツマド）ひせられた場合と同樣、郎女（イラツメ）の宿の表に立つて、戸をあけてあひに出るのを待つて居られたのである。ところが、屋敷の外に丘陵があり、其樹立（コダチ）や、崖から夜更けの露が雫となつて落ちかゝつた訣である。山の雫と言はれたのは、曉露（アカトキツユ）と言ふ風に

考へて居たのだから、今で言へば午前二時過ぎまで立つて居られて、露のおりるまで家の戸（ト）のあくのをお待ちになつた訣である。尤、實際が此通りだつたとは言へない。昔からの妻訪ひ歌の型もあつたらうし、又其時々、其人々の誇張もあつたであらうから。だが妻訪ひは結婚の前提として、必行はれたのだから、かうしたお歌の出來るのは當然である。此で見ると、第一の夜、逢はずに戻られた訣なのだ。郎女が夜戸を開いて現れなかつたのだ。で、翌朝、怨み歌を贈られたことになる。

贈られた歌がまじめなのに對して、女の歌は極めて恣（ホシイマヽ）な言ひ方をしてゐる。戸もあけず、會はずにお還しゝて置いて、「その露になりたかつたものですわ」もないものだと言ふ氣がする。讀者は、會はれなかつた事情を素直に想像するだらう。だが、はじめて訪はれた夜は、會はずにお戻しするのが、昔の上流女性の必守つた掟だつたのである。沼河媛も、大國主と長い問答歌を歌ひ交された日には會つて居られない。古事記を見ても、「故、其夜は會はさずして、明くる日の夜、御會（ミア）ひましき」とある。石川郎女ほどの女流が、誇りを棄てゝ會ふ氣遣ひはない。かう言ふ昔からの爲來りを守ると守らないとで、女性の格式がきまるので、古代の貴族の女の人は、皆之を何處までもおし通さうと努めた。其處に、男性の思ふまゝにはならない、女は女としての歷史的品位を保つ、と言ふ風が出來て來た訣なのだ。平安朝時代の貴族及び其傍に居た女房――高級侍女――たちが、女としての權式――時代の語で言へば、おもひあがり――を固く持つて少しでも傷

つけられまいとした。其心意氣は、かうした處から來てゐるのである。だから、うはべは情あはれを知らぬと思はれるのを恥ぢて、柔軟にあしらつて居るが、底意は强く彈ね返すものを持つて居た。古くからもさうであつた。

石川郎女の歌を其まゝ、現代式にとり込んだら、もう「萬葉女性」の歌などは訣らないのである。彈ね返し、牾き嗤つて居るのだ。平安朝になると、もつと其が激しくなる。最すなほに見えるものでも、

わびぬれば、身をうきくさの根を絶えて、さそふ水あらば、いなむとぞ思ふ

小野小町の歌である。文屋康秀が三河掾と言つて、なか〳〵收入の高い地方官になつて行く際、「どうです、地方見物にいらつしやる思ひきりはつきませんか」と言つてよこした。地方官の客分として奉られながら——事實は妻となるのである——出掛けて、贅澤三昧の生活をして來ることは、當時の女房たちには、とても誘惑だつたのである。其誘ひに對しての答へが、此である。うつかり見れば「私は悲觀して暮してゐるから、一處に行かうと思ふ」と言ふ返事をしたやうに、とられさうな歌だ。併し、此歌に現れてゐる反撥力を感じないやうでは駄目だと思ふ。こんなに悲觀して暮して居るのだから、憂き身——浮き草のやうに根のきれた如く、誘ふ水——人さへある なら、そちらへ出かけようと思ふ。大體かう言ふ風に說いてゐるが、其でも柔軟に、——情知らずと見られないやうに言つて、而も「往なむと思ふ」とだけで人を焦らしたまゝで、うつちやつ

て居ると言へる。併し「ねをたえて」の理會が不十分である。つまり二人の間に仲絶えのした事を言ふ慣用語だつたのだ。つまり、小町に前々から續きあひの斷れぬ男が居て、其人との間が思ふやうでないので、悲觀してゐる最中なのだ。其で、「こんなに悲觀してゐるのだから、いつそ其關聯を斷つて、誘ふ水がありさへしたら、出かけようと思うてゐる際です」と言ふのである。だから、以前からの男の人との間の、まだ續いて居ることを言つてゐる。「いなむとぞ思ふ」とは言つても、愈行かうと決心してゐるのではない。却て男の人の存在を示してゐるのは、彈ね返してゐるのである。

山の雫になつたらよかつたと言ふ思はせぶりは、十分男の人の心をうけ入れてゐる事を見せてゐるのではないのだ。人を惱殺するやうな語で、實意のない言ひ方と見るのが本たうなのである。考へ方一つで從順なやうにも見える。既に述べたやうに、古代の女性は、男の言ふなりになるのを最恥辱とした。思ひあがつた矜持を失ふまいと努めた。其上に女として優しみを何處までも保つて行かうと言ふのである。だからかうした歌々が出來るのは、當り前である。

秋山の木の下隱り行く水の　我こそ益さめ。御思ひよりは　——額田女王（九二）

秋の山の木の下蔭を水層增して流れ行く水。それではないが、私の方が增して——より以上だと思ひます。あなた樣の仰言る御思ひよりは。（此歌の作者については本卷「額田女王」參照）。

此は最初に揭げた天智天皇御製に和せた歌である。御製の方は、世間では大島ノ嶺と言ふ大和の

平群(ヘグリ)郡邊の山と說いてゐる。此には異論を持つて居るが、かう言ふ書き物で、かれこれ言ふこともないから、大和說によつて說明の根據を少し更へて行かう。

額田女王(ヌカタノヒメオホキミ)は、近江鏡山の邊に居られた鏡王の御娘であつた。其で、其鏡ノ里から北へ三里位離れた——湖水につき出た大島鄕——今の長命寺を中心にした地方に、別に家を持つて居られたものと思ふ。大和へ上られゝば勿論宮廷近くに居られたゞらうが、近江へ還られると、大島の家に入られる。此御製は、女王故鄕に在る時、遙々近江まで遣されたものと思はれる。大和にも大島ノ嶺のあること、近江とおなじである。大和の大島山なら望み見られるのだが、近江では見えない。大和の同じ名の山に、彼女の家があつてくれたらよかつたのにと、仰せられたのである。「つぎて見ましを」と申されたのは、連續的に見て居ようものをと言ふことで、つぐは今の次ぐよりも、もつと接續する意が深いのである。

此「唱(シヤウ)」のお歌に對して、何かそぐはない所のある「和(クワ)」の歌である。古人は此間に必然的な連絡を考へて居たのだらうから、考へると、近江の大島山の家に、秋の木の葉の降る時分に籠つて居られた生活を、基礎として作つて居られるのである。目前の情景を敍述して、近頃の生活を思はせるのが昔の人の爲方だから、さう考へてさし支へはない。大和の大島ノ嶺と言はれたが、近江の大島ノ嶺を思ひ遣つて言ひ遣されたのだから、大島山の家居の現狀を述べたのである。かうした最すなほであるべき歌であり、又すなほにも見える歌だが、やはりさう見てしまつては

爲方がない。「我こそ益さめ。み思ひよりは」と言つた——殊に「み思ひよりは」と反撥したところに氣をつけて欲しい。四句までは如何にも柔順に見えるが、五句になつてはつきりと、あなた樣どころなものですかと威張つてゐる。お思ひ申し上げてゐることの深さを示すのなら、柔順になつたことが出てゐるのではないかと思はれるだらう。勿論久しくお仕へ申して後までも、かうした答への爲方を續けるのである。結局同等な身分の人にも、身分違ひの方にも、その點では同じやうに、どこまでも靡き從ふと言つた風に言はないのが、「かけあひ歌」の常であつた。

註三　(まし・ましを)唯の想像を言ふ語ではない。現實と反對したことを想像するので、「かうだつたら、かうした筈だのに」とか「あの時あゝだつたとしたら、あゝなつて居たわけなのに」と言ふ風の、今現れて居ない事を空想する語法である。

註四　(家もあらましを・家居らましを)天子樣が、御自身、宮がそこにあつたらよかつた、家構へて居つたらうものを、と申されたやうに聞え、さう說く學者もあるが、其では訣らない。此事も、此短い解說では避ける。

我はもや　安見兒(ヤスミコ)得たり。みな人の得敢(カ)てにすとふ　安見兒得たり　——藤原鎌足(九五)

おれはよ。この安見子を手に入れた。すべての人が手に入れにくがつて居る、と言ふ所の安見子

を手に入れたぞ。

内大臣藤原卿、采女安見兒に娶ひし時作れる歌一首とある。此があの英雄鎌足の歌だと思ふと、此人の生活の全面が、俄かに明るく潔いものにとり捲かれて來る感じがするではないか。例に引くのも畏れ多いが、昔はこんな歌の多かつたことの説明の爲に、「第一」の皇后の御歌に關聯深い、夫の君仁徳天皇の御製、

道の後　こはだ處女を。雷の如聞えしかども、相枕まく

道の後　こはだ處女は、あらそはず寢しくをしぞも、可愛しみ思ふ

日向國諸縣君と言ふ、地方の豪族の娘、髪長媛を得た歡びに歌はれたもので、まだ大鷦鷯尊と申した頃のおん事と申し傳へる。――遠い筑紫の群國の奥日向のこはだの處女よ。其人は、鳴る雷の如、聞き懼ぢして居たが、今、相枕まき寢ることよ。

遠い筑紫の群國の奥、その日向のこはだ處女。其人が、おれにあらがふことなく、柔順に從ひ臥したことをば、おれは可愛く思ふよ。

かう言ふ、魂、空にあがるやうな歡聲を、宴席の場であげさせられた。

我はもや　安見兒得たり。みな人の得敢てにすとふ　安見兒得たり

この歌に對して應へた歌があるとすれば、どう言ふ内容を持つたものであらう。其が、我々にはちよつと想像出來ないのである。だから此は恐らく、前の御歌と同じ樣に、譬へば戰爭の「勝ち

名のり」の如く、妻を得たことを表白する形式――たとへばたけびと言ふ風の――があつたのであらう。事實其がなければ、この當時の結婚として、必しもすぐに家へ迎へるのでないから、その後、他人が又、その妻にしようとするかも知れないのである。

安見兒は、采女である。采女である以上、宮廷の神竝びに主上に奉仕する爲に、諸國の舊族から奉られて上つて來た、その國々での最神聖な格式の正しい家の娘である。この歌、ちよつと見たところは、他の貴族たちと安見兒を爭うた結果、成功したことを誇つてゐるものと説かれてゐるのも、眞らしく思はれよう。併し其は、あるべからざる考へ方なのだ。何故なら、宮廷の采女を犯すことは、最畏るべき禁忌に觸れることで、大罪に當る訣であつた。長い歷史の間には、さうした間違ひを起した者もないではなかつたらしいが、鎌足ほどの人が、其に觸れたはずもなからうし、萬一さうした過ちがあつたとしても、こんな勝ち名のりのやうなたけびのあげられる性質のことではない。だからこの場合は、采女の人數に剩りのある時に、王族・貴族に分ち與へられた例に當るのである。ちやうど舍人の場合、王族・貴族に對して帳内・資人など稱して、お與へになつたのと同じことであると思ふ。宮廷をちら〳〵行きかふ者で、すべての人が好意を寄せてゐて、しかも手も觸れることの出來なかつた安見兒なる采女を、藤原内大臣家に賜うた時の歌と見るのは、よからうと思ふ。この場合も、前の髪長媛を宮廷から大鷦鷯尊が頂かれて、作らせられた御歌と同じ場合である。私の考へでは、此が鎌足の嫡妻として傳へられてゐる、鏡姫王